
オーバーエイジ・ブレイブヒーロー

嶋本圭太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オーバーエイジ・ブレイブヒーロー

【Nコード】

N7088X

【作者名】

嶋本圭太郎

【あらすじ】

早乙女智浩が気づいたとき、あたりは見たことのない景色に生まれ、そして見たことのない生き物がいた。

見知らぬ異世界、謎の少女、そして与えられた強大な力。どこにでもある、陳腐な物語？

だが、智浩はそんなものは知りはない。何故なら……。

(1)

早乙女智浩は、いま、必死に走っている。

決して運動会の最中でもなければ、陸上の選手というわけでもない。むしろ、智浩は運動とは縁遠い生活を長く続けていた。

智浩は、追われていた。

理由などわからない。相手は智浩を視界に入れるなり、その牙を剥き出しにしてこちらを追いかけたのだ。

「いったい、なんだって、いうんだ！」

理不尽さのあまり叫び、背後を確認する。

当然、そいつはまだ智浩の背後にいて、巨大なふたつの瞳をらんと輝かせてこちらへ迫ってきていた。

人間ではない。

大きく裂けた口と、そこに整然とならぶ鋭い牙。見るからに強靱な後ろ肢と、それに比べればだいぶ華奢な前肢。そして全身をおおう緑色のうろこ。

智浩の知識からすれば、それは恐竜と呼ばれるものに相違なかった。

全長三メートルほどで、恐竜なのだとすればその中ではちいさな部類だが、一七センチメートルと日本人の平均身長ほどの背丈しかない智浩とくらべれば、倍近くはあるということである。

それが、さきほどから智浩に迫ってきているのだ。

「ひいっ！」

悲鳴を上げて、また正面をむく。彼の両足はだいぶ前からしきりに限界を訴えていたが、足を止めるわけにはいかない。

これは夢か？なんだって私がこんな目に！

もはや叫ぶこともできない。すっかり顎があがってしまい、いくら息を吸っても酸素を取りこめた気がしない。

そもそも、ここはどこだ？

智浩が走っているのは車一台がやっと通れそうな狭い道で、しかもまったく舗装されておらず、両側は森が広がっている。どこかの山奥だろうか？ しかし、彼は直前まで自分の住むマンションにいたはずだった。

もう何年も旅行すらしていなかった彼には、こんな風景は記憶にすらないものだったのだ。

「うわっ！」

ついに足がもつれ、智浩はその場に突っ伏した。立ち上がるうにも、一度動くのを止めてしまった足はもう言うことを聞いてくれない。

振り向けば、恐竜がもうすぐそこまで迫ってきている。智浩がもう逃げられないと悟って走るのをやめ、一步一步ゆっくりとこちらへ迫ってきていた。

呪文を、唱えて。

「？」

唐突に頭の中に声が響き、智浩はあたりを見回した。
だが、目の前に迫る恐竜のほかには誰の姿も見えない。

私の言葉に続いて？ e m , a v i a , q i a n ……。

透明感のある若い女性の声。はっきりとした指示の言葉に続いて、よくわからない、それこそ「呪文」というべきことばが続けられる。

見ず知らずの世界、突如おそいくる怪物、そして頭にひびく女性の声。

もしも智浩が夢と想像に満ちた子供であったなら、理解できない

までも女性の声に従っていたかもしれない。

だが残念なことに、早乙女智浩は今年四十六歳になる中年だった。

「くつ、これはなんだ、幻覚、幻聴か？」

智浩は頭を振って、自らの意識をはつきりさせようとする。

望安ほうあん濃商事で勤続二十四年、経理事務のエキスパートとして紙の台帳からパソコンへの切り替わりにも対応してきた経験豊富な社会人。

しかしそうして積み上げられた経験は、えてして想定外の事態に対する柔軟性というものを、知らず知らず削り取ってしまうものなのだ。

彼の常識では、気がついたら見知らぬ森の中にいるなどということも、映画か博物館の中にしかないような恐竜におそわれることも、頭の中に直接声が響いてくるなどということも、まったくもってあり得ないことなのだった。

落ち着いて、私の言葉を聞いて？

当然、首を振ったくらいで目の前の怪物が消え去るはずもなく、女性も頭の中で智浩を呼びかけつつづけている。

「私は、どうしたんだ？ 死ぬ間際になって、おかしくなってしまうたのか？」

ちよつと、いいから呪文を！ 聞いてる？

そうこうしている間にも恐竜は近づいてきており、頭に響く女性の声からそころなしか焦りが感じられる。

「呪文ってなんだ！ 私は、そ、そんなもの知らないぞ！」

だから、今言ってるじゃない！ e m , a v i a , q i a n ,
a n n u ! ほら！

女性の声も当初の落ち着いたものからはほど遠くなり、智浩を怒鳴りつけるようなものになっている。

だが、智浩はそれすらわからないほど、完全に我を失っていた。
「くそっ、これは夢だ、夢に決まってる！」

ねえ、ほんとに言わないと、まずいんだって、ねえってば！

「目を閉じろ、そうすれば、すぐにこんな夢」
眼前に迫る恐竜の迫力に、歯を震わせながら智浩は目を閉じる。

ちよつと、だめ！ そんなことしないで、呪文を唱えて！

頭に響く声も大慌てだ。

「そして目を開ければ、元のマンションに」
智浩が目を開く。

だがやはり、そこは先ほどまで自分がいたはずの見慣れたマンションの一室などではなく、森に囲まれた道の途上。

そして、眼前にはぱっくりと開かれた恐竜の顎が、今まさに智浩の頭部にかぶりつこうとしていた。

「うわーっ！」

きゃーっ！

智浩だけでなく、頭の中の声まで叫んだ。
そして、智浩の視界が真っ赤に染まった。

「な、なんだ……」

智浩は呆然と、目の前の光景を眺めている。

視界が赤く染まったのは、彼の頭蓋が砕かれたからではなかった。今まさにそうせんと、口腔をいっぱいに広げて見せていた目の前の恐竜は、しかしその口を閉じることがなかった。

恐竜は、燃えていた。

比喩ではなく、文字通りその全身から炎を吹き出していたのである。それが智浩の視界を染めていたのだった。

どうしてそうなったのかなど智浩には知る由もないが、とにかく恐竜が自分の意志でそうしたのでないことは明白だった。

智浩が尻を引きずりながら恐竜の口から離れるのとはほぼ同時に、それはゆらめくようにして崩れ落ち、そのまま息絶えたのである。

恐竜は倒れた後も燃え続ける。頑丈そうに見えた緑色のうろこもあえなく焼け焦げ、全身がほぼ炭となった頃、ようやく鎮火した。

「た、助かった……」

智浩は恐竜が完全に動かなくなったのを確認すると、大きく息をついた。

そして、尻についた土を払い落しながら腰を上げる。

人生で初めてではないかと思うほどの距離を全力疾走したため、膝がわらってなかなかいうことを聞かなかったが、それでもなんとか立ち上がることに成功した。

それから、改めて辺りを見回す。

気持ちが落ち着いても、そこはやはり智浩の記憶にはない場所だった。どうやってここに来たのかも思い出せない。

今日の行動をいちから思い出してみる。今日は会社が休みだったので、起きたのは午前九時過ぎだった。それから軽い朝食をとって、そして……。

その思索を中断したのは、草を掻きわけるがさがさという音だった。

もしかして、恐竜の仲間がいたのか？

智浩の背筋が寒くなる。再び逃げ出そうにも、足は限界だ。長い距離を逃げるのは不可能だった。

音は森の中から聞こえてくる。さっきのとは別の生き物だろうか？

智浩は動くに動けず、音のする方を注視した。

やがて、現れたのは。

「あれっ、大人の人だ？」

人間だった。

若い、というよりも智浩の感覚からすると幼いといったほうがしっくり来る女性だ。

息子と同じくらいだな。

智浩には妻との間にひとり息子がいる。今年十四歳になる息子のこういち浩一の姿が頭に浮かんだ。

少女はとくに警戒する様子もなく、智浩のことを眺めまわしている。無遠慮な視線に面食らいつつも、とりあえず襲ってくる様子はないので智浩はすこし身体力を抜いた。

「でも格好からしても、確かにあっちの人だよな」

少女のほうは智浩の観察を終えると、かたわらでまだ煙を上げている恐竜の死骸を見やった。

「うわ、アールが黒こげに……まさか、呪文もなしで……」

なにやらぶつぶつ言っている少女を、今度は智浩が観察する。

少女は長い金髪を後ろでまとめており、瞳の色も黒ではなく、薄い茶色だ。染めているのでなければ、外国人だろう。だが、独り言も流ちょうな日本語をしゃべっている。両親は外国生まれだが、彼女は日本で生まれ育った。そんなところだろうか。

少女の格好は少々奇抜といえた。前合わせの白い服はどこどころ赤いステッチが入っていて、上半身だけを見ると神社にいる巫女の格好のようにも見える。

だが、履いているのは袴ではなく、膝上の結構きわどいミニスカートだった。足下は素足にサンダル履きだ。

最近の中学生は、こんな格好をするのか？

ふだん街で見かける子供たちの服装はここまで突飛でもなかった
と思い、智浩ははたして声をかけていいものか、とすこし戸惑った。
だが、今の智浩はまさに、右も左もわからない状況である。ここ
がどこであれ、自宅に帰らなければならぬ。どっちに向かえば街
へ出られるかくらいは教えてもらえるだろう。

「君、すまないが……」

「あなた！ どうして人の忠告を無視したの？」

智浩の声は少女の怒声にかき消されてしまった。

「忠告？ なんの話だ」

「さっき襲われてたときの話。わたしのいうとおりにしていればあ
んな危ない目に遭う必要なかったのに」

智浩はそう言われてはじめて、さきほど頭の中に響いていた声が
彼女のものと同じしていることに気がついた。

「あれは、君の声だったのか？」

「そうよ」

頭の中に直接響いているように感じたが、実際には彼女が近くに
いて叫んでいたということだろうか。

「あそこまで言うことを聞いてもらえないなんて思わなかったわ！」

智浩は少女がなんと叫んでいたか思いだそうとした。細部は思い
出せないが、呪文がどうか言っていたように思える。

助かるように祈れ、という意味だったのだろうか？

あの状況で祈ったところで助かるとも思えなかったが、智浩は謝
罪することにした。彼女が自分のために叫んでくれたことにはかわ
りない。

「それはすまなかった。状況が状況だったから、さすがに動転して
しまっていてね。それで、これも君が？」

智浩はすっかり炭化した恐竜の死骸を見やった。

ものの数分でこの有様である。よほど強力な火力だったことは間
違いない。

だが、少女は手ぶらだ。この恐竜を燃やした火器はどこかに置いてきたのだろうか。

少女の答えは、智浩にとって意外なものだった。

「なにいつてるの。それはあなたが自分でやったのよ」

「は？」

なかばあきれたような少女の返答に、智浩の目が点になる。

「私が？私はマッチ一本持っていないぞ」

智浩は嫌煙家である。

そのことに対する少女の答えは、智浩にとって全く理解不能だった。

「道具なんか必要じゃないわ。これは魔法。本当は呪文がなければ正しく制御なんかできないんだけど、極限の危機に瀕して例外的に発動したってところかしら」

「まほう？」

智浩は少女の言葉を反芻した。

彼は魔法、という言葉は知っている。その意味も。

だが、それは彼にとって映画や、彼の息子が遊んでいるテレビゲームの中のものだ。

「私は、子供じゃない」

しばらくまばたきを繰り返した後、智浩が口にしたのはそんな言葉だった。

「見ればわかるわ」少女は素っ気なく言ったあと、ため息をついた。

「私も、大人の人を召喚するのは初めてだけど」

「しょうかん？」

智浩はまた抑揚なく繰り返した。少女の言葉についていけない。

「そうよ」

少女はうなずいた。それから大きく腕を広げて、言った。

「ここは、あなたの住んでいたのとは異なる世界。あなたはわたしに、この世界へと召喚されたの」

「召喚？」また繰り返した。「何のために？」

少女は智浩の目を真正面からのぞき込んだ。その目は真剣そのものだった。

「勇者として、この世界を救ってもらうために」

（１）（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

この作品については、あまり書き溜めをしていないので更新はゆっくりになると思います。

続きを気にしてくださる方は、どうぞ気長にお待ちください。

ご感想、ご意見など、いつでもお待ちしております。

(2)

智浩は、ともかく近くの街に案内するという少女の言葉に従って、彼女の後ろをついて森を進んでいた。

彼女の語る、魔法だの召喚だの、さらには勇者だの世界をすくうだのという言葉の数々について、智浩はまったく実感をもてなかった。少女についていくことに、不安がなかったわけではない。

だが、いま彼が置かれている状況そのものが、彼にとって理解不能なのだ。彼女と別れてひとりで森をさまよって、果たして無事我が家に帰りつくことができるだろうか？智浩にはそうは思えなかった。

より正直にいえば、ひとりになるのは怖かったのである。

もちろん、少女についていくにあたって、そんな素振りはおくびにも出さない。君のいつていることは正直理解不能だが、とりあえず人のいるところまでは一緒に行ってもいい。とそんな態度だ。

智浩からすれば相手は自分の息子ほどの少女　歳をたずねたわけではないから、あくまで外見からの推測ではあるが　であり、自分は大人だ。まして男である。

大の大人の男性が、森の中でひとりになるのは怖いなどと、年端もいかない女性にいうわけにはいかない。本当は少女と一緒に歩いているいまも、ともすれば得体の知れない不安が背筋のあたりから上つてきそうになるのだが、智浩は腹の底にぐっと力を入れて、平然を装いつつ少女のあとをついていく。

少女の方はそんな智浩の態度をとくに気にした様子もなく先を進む。ときおり智浩がきちんとついてきているか確認するため振り返るが、ちらと確認するだけでとくになにをいうこともない。

ふたりが進んでいるのは、さきほど智浩が必死になって逃げていた細いが踏み固められた道ではなく、森の中だった。少女の案内がなければ、智浩は入ってみようとも思わなかっただろう。

一応、しばらく入ったあたりからところどころ土が露出した獣道のようにはなつたが、幅は人ひとりがやっと通れる程度で、智浩からすれば歩きづらいことこの上ない。

そもそも、智浩はいま靴を履いていない。紺色のポロシャツにベージュのチノパン、それに白のソックスという、マンションの一室にいたときの格好のままだった。さきほど恐竜に追いかけられているときは必死すぎて気にする余裕もなかったし、地面が乾いていたのでそれほど走りづらいということもなかった。しかし、こうして森の中のしめって柔らかい土の上を歩くなれば、洗濯されたばかりの白のソックスはあつというまに土の色に染められて汚れてしまっているし、足下の触感がダイレクトに伝わってきて、少々気持ちが悪い。

都会暮らしが長く、歩くといえばアスファルト舗装の道の上ばかりだった智浩にはなかなかの苦行といえた。強すぎる草のにおいも智浩を辟易させる。

「おい君。なぜこんな森の中を行くんのだ？ さっきの道の方が多少なりとも歩きやすそうだったと思うのだが」

ついに我慢しきれなくなり、智浩は目の前の少女に声をかけた。

少女は足を止め、振り向いた。

「こっちの方が近いし、それに、あの道に戻ると、またアーロが出るわよ」

「アーロ？」

「さっきの怪物」

少女の言葉で、眼前に迫る無数の牙の列が思い出されて、智浩は身震いした。

「すこし前からあのあたりを狩り場に行っているの。おかげで街道は使えないわ」

「そうか……」

智浩はちいさくため息をついた。それなら、我慢してこの道を行くほかはない。

「ミュールよ」

少女がそう言い、智浩は顔を上げた。

「え？」

「わたしの名前。あとでちゃんと自己紹介するけど、名前がわからないと呼びづらいわよね」

「あ、ああ」

「おじさんの名前は？」

「私は智浩。……早乙女智浩だ」

智浩は少女につられるようにしてファーストネームを答えたが、すぐに気恥ずかしさを感じてフルネームで言い直した。

「トモヒロね。もうすこしで森は抜けるから、がんばって」

少女は軽く笑みを浮かべてそういうと、また獣道を進みはじめた。

もうすこし 確かにそういつていたはずだ。

だが、智浩はその後森の中をたつぷり三十分は歩かされた。

「ほら、森が切れるわ」

進行方向から差し込む太陽の光を手でさえぎるようにしながら、

ミュールが智浩に声をかけた。

「や、やつとか……」

日頃の運動不足がたたった智浩は息が上がっていたが、ミュールの方は平然としている。

「だらしないなあ、おじさん」

そう言われても、反論のしようもなかった。

森を抜けると、一気に視界が開ける。

なだらかな下り坂がずっと先まで続いているため、かなり遠くまで見通せた。

「ほら、あそこが目的地。リボータの街よ」

ミュールが指し示す方向に、外壁に囲まれた石造りの街が一望できた。

外壁の周りには、農地が広がっているのも確認できる。

農地はある程度のところで途切れ、あとはずっと草原が広がっていた。

「ん？ ちょっと待て」

智浩は悪い予感がした。「あそこまで、歩いていくのか？」

自分たちの方が高い位置にいるとはいえ、街の全貌が視界にはいるというのは、街がかなり遠いところにあるという証拠だ。

ミユールがそれを聞いてくすぐすと笑った。それを見て、智浩は自分がよほど情けない顔をしていたことに気がつき、あわてて表情を引き締めた。

「さすがに、あそこまで歩いていたら日が暮れちゃうわ」

ミユールは笑うのを止めて、しかし笑顔のまま智浩にいった。

「馬をつないであるから。こっちょ」

「馬？」

オウム返しになった智浩の声には答えずに、ミユールはまた智浩に背をむけて歩き出す。

歩かないというから車でも停めてあるのか、と思ったら、馬？

智浩は首をかしげたが、ひよつとしたら何か別の単語を聞き間違えたのかもしれない、と思い直してとりあえずあとをついていった。

「ほら、あそこ」

しかし、いくら森沿いを進んだあと、ミユールが指し示した先には、まさに言葉どおりに馬が木につながれて草を食^はんでいたのだ。つた。

「馬？」

「？ 馬よ」

智浩がまたそうだったので、ミユールが振り返って不思議そうにこたえた。

馬の背には鞍がのせられており、ほかには荷台のようなものもない。

どうやら、本当にこの馬に乗って街まで行くようだった。

「私は、馬に乗った経験はないのだが」

「あはは、平気よ。私の後ろで座ってるだけでいいんだから」

どうやら、ミュールとふたり乗りをするというこらしい。馬は一頭しかいないので、当然といえばそうではある。

「ゲイロン、おまたせ」

ミュールは馬の方へ近づくと、その首を二度かるくたたいてやりながらそう声をかけた。それから馬をつないである木の方へ行き、縄をほどきはじめる。智浩はすこし離れた位置からその様子を眺めていた。

馬は軽く鼻を鳴らしたあと、ミュールを追うように首を巡らした。その視線が何となくミュールの短いスカートの陰にむけられているように見えて、智浩はやや面食らった。

まさか、馬だしなあ。

たまたまそう見えたただだろう、と智浩がひとりで納得しようとしていると、馬が唐突に首を戻し、こちらを見た。

あきらかに目つきが違い、こちらをにらんでいるかのようなのである。そして智浩と目が合うや、その口が動いた。

「なに見てんだ、こら」

聞こえてきたのは智浩よりもう一段低い声だった。

「……え？」

明らかにミュールの声ではないし、もちろん智浩の声でもない。

「なんか文句あるのか？」

また馬の口が動き、そこから声が聞こえてくる。

間違いなく、馬がしゃべっていた。

しかも、智浩に因縁をつけている。

「なんとかいえよ、おっさん」

そういわれても、智浩はなにも答えられない。

またしても発生した自分の常識の外にある出来事に、理解が追いつかないのだ。

馬は間違いなく馬だ。競馬場にいるようなものに比べるとやや小さめで足が太く、口バに近いようにも見えるが、すくなくともかぶ

りものや着ぐるみのたぐいではない。

それが、どういうわけか人間の言葉を発している。

ここが映画館で、スクリーン越しにこの光景を見ているのなら、智浩も戸惑うことなく受け入れたかもしれない。

だが、智浩が立っているのはいわば、スクリーンの中だ。しかも台本も役柄も知らず、カメラも監督も見あたらない。

「ちよっと、なにいきなりケンカ売ってるのよ」

そこへ、縄を解いたミュールが戻ってきて、馬に声をかけた。

「あ、ミュールう。いやー、あのおっさんがなんかじろじろ見てるからさあ」

馬はとたんに声色を変化させ、媚びを売るような甘い声を出した。「ゲイロンは紹介するまでじゃべらないで、っていつておいたですよ。あっちの馬はしゃべらないから驚くの。コーイチのときもそうだったじゃない」

「このおっさんほどじゃなかったけどな。完璧にフリーズしてる」混乱してばかんと口を開けている智浩をしり目に、そんな会話を交わしている。

「とにかく、ゲイロンは勝手に口をきいちゃだめ。わかった？」

「はいはい」

ミュールはゲイロンをたしなめると、智浩にむきなおった。

「ごめんね、驚いたでしょ？この子はゲイロン。ちよっとスケベだけど悪いヤツじゃないのよ」

「……」

「どうも、あなたたちの世界だと言語は人間特有の文化みたいだけど、ここではそうでもないの。まあ、そのうちなれると思うから、気にしないで」

「あなたたちの、世界……」

智浩は小さくつぶやいている。ミュールは気にせず、智浩の背後に回ってその背を押した。

「細かいことは街に着いたら説明するから。ほら、乗って」

「乗る……これにか？」

智浩はゲイロンを、得体の知れないなにかのように見た。

ゲイロンの方は、ミュールのいいつけを守ってとくになにもいわず、馬銜はみをカチャカチャ鳴らして智浩を見ている。

言葉は発していないのだが、「乗るなら早くしろ」といつているように見えて、智浩はなかなかあぶみに足をかけることができなかった。

そもそも、智浩は乗馬の経験はない。

ようやく決心してその背に乗ろうとしても、最初はうまくいかず、ミュールに尻を押してもらってやっと鞍にまたがることができた。

「もうちょっと後ろに座ってくれる？ わたしが前に行くから」

そう言われて智浩が鞍の後ろまでずれると、ミュールは軽々と鞍にまたがってきた。

鞍はひとり用だったが、ミュールは身体が小さいのでふたりでも窮屈さは感じない。

「結構揺れるから、しっかりつかまっていって」
手綱を手にしたミュールが指示をする。

智浩ははじめ、鞍のふちを後ろ手につかんでいたのだが、その様子を見たミュールに「それじゃあ、危ないわ」と言われ、両手をミュールの腰に回すよう誘導されてしまった。

智浩からすると少々気恥ずかしかったのだが、いちど回した手を離すのはもつと恥ずかしいような気がしてそのままミュールの腰の前で両手をあわせた。

「じゃあゲイロン、お願い」

ミュールが声で合図をすると、ゲイロンが鼻を鳴らしてから歩き出す。

智浩は理解の追いつかない出来事はひとまず考えないことにして、自分の子供ほどの歳の少女に馬に乗せてもらい、しかもその身体につかまって運んでもらうというのはずいぶん情けない図柄だな、な
どと思っていた。

が、そんなことを考えていられたのはゲイロンが駆け足をは
じめるまでの短い時間だけなのであった。

(3)

「ほら、門が見えてきたわ」

「ああ……」

レンガ積の外壁は近づいてみるとなかなかに壮大な造りであったが、ミュールに声をかけられても智浩はそちらを眺めるでもなく、ただ生返事を返すのみだった。

「大丈夫？ 真っ青だけど」

「な、なんとか」

無理に言葉を発しようとするのとたんに静まりかけていた吐き気がせり上がってくる。智浩はしゃべるのを中断し、片手を口に当ててこらえた。

初めて馬に乗った智浩は、馬上がこんなにも揺れるものだとは思ってもしなかった。ものの十分もしないうちに平常ではいられなくなり、結局ミュールに頼んでゲイロンの歩調を落としてもらい、なんとか最悪の事態にはならずにすんだといったところだ。

「ゲイロンは疾い^{はや}んだけど、乗り心地は確かにほかの馬に比べても良くないのよね。乱暴な性格だから……」

ミュールはそう言って智浩に同情の意を示したが、本人はけろりとしている。

常日頃から乗っているのだろうから当然といえば当然だが、智浩は自分の体たらくに情けない気持ちでいっぱいだった。

学生時代から頭を使う方が好きだったが、決して運動が苦手だったわけでもない。それが初めてだったとはいえ、馬に乗っただけでしかもつかまっていたただけ。ここまでぐでぐでになってしまうとは思わなかった。年齢はとりたくないものである。

これからは、すこしは運動もしよう……。

智浩はミュールの背にだらしなくしがみつきのながら、そう心に誓っていた。

町の中へはいるとゲイロンの歩調も落ち着き、智浩もようやく周りを見回す余裕を持てるようになった。

石畳に舗装された道。三角屋根に赤レンガ、白しつくいの家。いつか紀行番組で見た、古いヨーロッパの町並みを思い出させる景色が続いている。

どこかのテーマパークに連れてこられたのだろうか？

智浩は未だに事態を飲み込めず、そんな風に考えていた。

だがそれにしても、道行く人影はまばらで、どこか陰気な雰囲気。が街全体を覆っている。とても観光地の空気ではない。

そもそも、自分以外の人間はみな今の日本の街角で見かけたら地味すぎて逆に浮いてしまうような、質素な服装をしていた。観光客らしき人物は見あたらなない。

「ここは、どこなんだ？」

智浩が問うと、前に座るミュールが振り返った。手綱は一応握っているが、彼女は先ほどからほとんど指示を出していない。ゲイロンが行き先を把握しているので、なにもしなくても勝手に進むのだが、そもそもゲイロンが人語を解すること自体が理解できていない智浩はあわてた。

「前を向きなさい」

「平気よ。ゲイロンは道を知っているもの」

当然、ミュールの方は意に介さない。

「ここはリボーテの街よ。さっきいわなかった？」

「それは聞いたような気もするが……。私はそんな街を聞いたことはない。どこかの観光施設か？ 都道府県でいったらどこになる？」

「トドーフケン？」今度はミュールが首を傾げた。

「まさか、外国なのか？」智浩は青ざめた。

薬か何かで眠らされて、船か飛行機に乗せられて運ばれたのだろうか。だとしたら、帰るのも一筋縄ではいかない。そんな考えが頭をよぎった。

だが、ミユールはそれを聞くと智浩にじと目を向けた。

「……おじさん、わたしの話ぜんぜん聞いてなかったでしょう。ここはおじさんがいた世界とは、別の世界なの」

「別の世界」

「そ。おじさんは特別な力を持った勇者として召喚されたのよ」

「……すまないが、意味が分からない」

智浩は首を振った。

「ええー、おかしいなあ……」

ミユールはやや大げさな動きで頭を垂れた。

「コーイチはこれですぐわかってくれたのに……」

それはどちらかといえばひとりごちに近かったが、智浩が反応した。

「ん、浩一といったか？」

「え？ うん。コーイチよ。おじさん、やっぱりコーイチの知り合いなの？」

「君のいつているのと同じ人物ではないだろうが、私の息子の名前には浩一という」

智浩の言葉に、ミユールは合点がいったとばかりにうなずいた。

「やっぱり。だから新しい書を送る前に召喚があつたのね」

「どういうことだ？」

「私の知ってるコーイチと、おじさんの子供のコーイチは、たぶん同じ人物よ」

「それは」

智浩が疑問の言葉を続けようとしたとき、緩やかに歩みを続けていたゲイロンが止まった。馬上はその拍子にまた揺れ、会話に気を取られて油断していた智浩はミユールの顔に突っ込んでしまった。こちらを向いていたミユールの額に、智浩の額が正面衝突する。

「きゃっ」

「うぐっ」

「ごちっ、と堅いもの同士がぶつかる音が聞こえ、ふたりの視界に

星が舞い散った。

「いったー……」

「す、すまない、大丈夫か？」

額を押さえて馬上で丸くなるミュールに、智浩はさすがに赤面しながらわびた。

「うう、だ、大丈夫」

ミュールはしばらく丸くなったまま額をさすっていたが、やがてゆっくりと起きあがった。

「もう、ゲイロンなんで急に　あ、着いたのね」

ミュールの言葉で、智浩もあらためてあたりを見回す。

会話に夢中になっていいるうちに、二階、三階建ての住居が連なっていた景色は消え、目の前にはひととき大きな建物が建っていた。三階建てで高さはそうでもないが、ほかの建物に比べると横に大きい。一階部分は壁が取り払われて、奥の方まで見通せるようになっている。テールが多く並べられているのを見ると、食堂か酒場といったところだろうか。

「じゃ、おかみさんを呼んでくるね」

ミュールはそういうと、ひとりでさっさと鞍を降りてしまった。

「お、おい」

「すぐ戻ってくるから、待ってて」

戸惑う智浩にそう告げると、小走りで食堂の奥へと消えてしまう。智浩はひとり、馬上に残された。

と思っていたのだが、突然下から低い声が聞こえた。

「おいおっさん、いつまで乗ってるつもりだ。重いだろうが」

「なっ」

また馬　ゲイロンがしゃべったのである。

最初にいきなり話しかけられたときはたいそう仰天したが、それから上に乗ってここまで来る間はずっと口をきかなかったので、ひよっとしたら空耳だったのではなどと智浩は思っていた。が、やはりそんなことはなかったのだった。

智浩が固まっていると、ゲイロンはなおも挑発的な言葉を投げかけてくる。

「まさか、ミュールがいなけりや降りられないとかいうんじゃないだろうな。いい齡したおっさんが」

「なに？」

これには、さすがに智浩もかちんときた。確かに乗るときはミュールに手助けしてもらってやっと乗れたのだが、降りるのは乗るよりも簡単なはずだ。

鞍のいちばん後ろだった尻の位置を前にずらし、先ほどまでミュールが握っていた手綱をつかみ、左足をあぶみに乗せる。

あとは自転車を降りる要領で右足を抜けばいいだけだ。

だが、智浩が勢いをつけて右足を抜いたとき、ゲイロンが身体を揺らした。

「う、うわっ」

手から手綱がすっぽ抜け、右足は地面についたもののそのままの勢いで後ろに転がりそうになる。

だが、智浩はなんとか左足をあぶみから抜き取ると、その足で踏ん張って転倒を免れた。

「ちっ、こけなかったか」

その様子を見たゲイロンは、露骨に舌打ちする。

「おまえ、今わざとやっただろう！」

智浩は憤慨し、ゲイロンへと詰め寄った。

「へん、あのくらいであわててんじゃねえよ」

「なんだと！」

「そんなでかい声で騒ぐなよ。近所迷惑だろうが」

ゲイロンのその言葉に智浩ははっと我に返り、まわりを見た。

気がつけば何人かの人々が足を止めて、遠巻きにしてこちらを見ていた。

思わず怒鳴ってしまったが、まわりからしたら今の自分は「馬に向かって本気で怒っている変人」に見えたのではなからうか？

そう考え、智浩は恥ずかしさに頬を赤くした。といつても、さつきまでも怒りで赤かったのだが。

体裁を整えようと、咳払いしつつ胸元へと手をやった。スーツを着て仕事をするようになって長いので、無意識にネクタイを直そうとしてしまう、智浩のくせである。

もつとも、今はネクタイをしていないので、所在なげに指を動かしたあとポロシャツのしわを伸ばしただけで腕をおろすことになる。「なにとりつくろってんだか」

ゲイロンがいやみな突っ込みを入れる。馬に馬鹿にされるのがこんなにも腹の立つことなのだと智浩ははじめて知った。

それにしても、みょうに見られているな。

街に入ってからここへ着くまでのあいだ、通りではそれほど人を見なかったのだが、今は建物の敷地の外に十人前後の人がばらばらと集まっている。そしてどうも、誰もがこちらを見ているようなのだ。

あるものは道を行き来しながらちらちらと、またあるものは露骨に、智浩のほうへと視線を送っている。しかも、徐々にその人数は増えているようでもあった。

「ありや、みんなおまえを見に来てるんだぜ」

とまどう智浩に、ゲイロンがそういった。

「異世界人はただでさえめずらしいし、前回のこともあるしな」

「前回のこと？」

ゲイロンの含みのある物言いに、智浩はおもわず自然にそうたずねていた。

「なにしろ前に来たやつは　まあ、そのへんの話はあとでミュールから聞けよ」

ゲイロンはいいかけてやめてしまった。

「なにをもつたいぶっているんだ」

「おまえとそんな話をしたって、俺はちっとも楽しくないんだよ。それより、ちよっと近くに来い」

ゲイロンが前肢をかくようにして智宏を呼んだ。

「噛みつかないだろうな」

「男の頭なんか噛んでどうするんだ」

智浩は警戒しながらも、ゲイロンの馬らしく長い顔に自分の顔を近づけた。

すると、ゲイロンの表情が突然変わった。馬の表情にそんなにバリエーションなどないはずだが、智浩にはそれが忘年会で女子社員にセクハラをしているときの部長のものに重なって見えた。

「なあ、どうだった？ ミュールの抱き心地は」

ややひそめた声色まで、いやらしいものに変化している。

「だき……なんだと？」

「あの森からここまで、ずっとあの子の腰にしがみついていたんだろ？ たいそう揺らしてやったから、どさくさで胸を触るくらいはできたはずだぜえ？」

「なっ、おまえはなにをいっているんだ！」

確かにゲイロンのいうとおり、それなりの時間智浩はミュールの腰にしがみついていた。そのうえ途中からは気分が悪くなり、体重をかけないようになどと遠慮している余裕もなくなった。

だが、相手は自分の息子ほどの齢に見える少女である。たとえ余裕があったとしても、身体の感触を楽しもうなどと智浩が考えるはずもなかった。

しかも今のゲイロンの言葉からすると、智浩が耐えがたいほど激しく揺れたのはどうやらわざとだったようだ。

智浩が気色ばむと、ゲイロンはたいそうつまらなさそうに鼻を鳴らした。

「まさか、本当になにもしなかったのか？ なっさけねえなあ」

「私は既婚者だ！ だいいち、あんな少女に何かしようなどと思うわけがないだろう！」

智浩はまるで自分が痴漢あつかいされたかのように感じて激昂したが、ゲイロンはまったくひるまなかった。

「バカだなあ、こつちでなにしたって、異世界の女にバレるわけないだろうが。それに、ミュールは次の春でもう十五になるんだぜ。ふつつはそろそろ結婚相手を見つけるころだ。今が食べごろじゃねえか」

「冗談じゃない！」

来年で十五ということなら、それこそ息子の浩一と同年である。胸はたしかにちつと残念だが、尻やふとももなんかは張りがあつてぷりぷりしててよお、たいそう美味そうじゃねえか。いいよなあ、人間は。あれをどうこうできるんだからよお……」

ますます怒る智浩を無視して、ゲイロンは自分の世界に入りはじめてしまっている。

「せめてさあ、鞍をはずして乗ってくれねえかな。これのせいで、ちつとも感触が伝わってこないんだ。鞍がなけりゃ、あのふとももで俺の横腹をぎゅっとはさんでくれて、しかも背中には股ぐらが……あー、想像するだけで発情期が来ちまいそうだぜ」

「こ、こいつは」

妄想をだだしやべりにするゲイロンに、智浩は怒りを通り越してあきれていた。

しばらくしてミュールが戻ってきた。食事の用意をしているから中にどうぞ、と智浩に告げる。

「ゲイロンはおとなしく厩舎で待っててね。今、馬装をはずしてあげるから」

ミュールはそういうと、ゲイロンの脇に立って鞍を留めているベルトをはずしにかかった。智浩は、なんとなしにその様子を眺める。ゲイロンが「ちつと残念」という胸は、着ている服の生地が厚めであるせいもあってか、確かに外から見ている限りはあまり主張を感じない。といって腰のあたりはほのかにくびれも見えるし、まったく少女の体型というわけでもない。

と、そこまで考えてしまったところで智浩はあわてて首を振った。

つい、先ほどのゲイロンの妄想に引つ張られるようにしてミュー
ルを観察してしまっていたのだ。

「どうしたの？」

あまり激しく首を振ったので、ミュールが不思議そうに智浩を見て
そういった。なにも含みのない単純な疑問の言葉に、自分の視線
には気づかなかったのかと智浩は安堵した。

ゲイロンは気づいていたのか、ヒヒヒと下びた笑いがかすかに聞
こえたが、とくに何もいわなかった。

「へんなの」

ミュールはそれだけいうと、また鞍をはずす作業に戻った。それ
ほど背が高くないので、時折背伸びをすることになる。

すると、ゲイロンがそれにあわせて首を下げ、下からのぞきこむ
ようにしていることに智浩は気づいた。

ゲイロンがしゃべる前に見たときはたまたまそう見えただけと思
ったが、さっきの話を聞いた以上は間違いない。ゲイロンはミュー
ルの短いスカートの中をのぞいているのだ。

気づいた以上放置する気にはなれず、智浩はゲイロンの視線を遮
るようにしてミュールの隣に立った。

「あ、てめー、こら」

ゲイロンが抗議するが聞き流す。

鞍をはずしおえたミュールは智浩が急に隣にきたので驚いたが、
その向こうのゲイロンの表情を見て事情を察したようだった。

「もしかして、ゲイロン！ またのぞいてたの？」

「いいじゃねーか、見るだけなんだからようー」

ゲイロンは口をとがらせて、子供のような抗議をした。

「よくない！ …… ありがと、トモヒロ」

「ん、ああ」

ミュールは笑顔で礼を言ったが、智浩自身直前のことがあるので、
わずかながら気まずさをのこす返事になった。

「ヒトの楽しみを邪魔しやがって」

「今のは犯罪だ。それに、おまえは馬だ」

ゲイロンがまた声を低くして智浩に言い、智浩も言い返した。それを見て、ミュールが不思議がる。

「あれ？でもふたり、いつのまにか仲良くなったのね」

「仲良くはない」

「仲良くはねえ！」

智浩とゲイロンの返答は、見事なタイミングで重なった。

(4)

やがて若い男性が智浩たちのところまで駆けてきて、馬を引き取るといつてきた。ミュールははずしおえた鞍を男に渡し、「じゃ、あとはお願い」といった。

男は両手で鞍をかかえると、「さあ、こっちだ」とゲイロンに告げ、そのまま背を向けて奥へと進んでいく。

「さあ、めしだめし」

ゲイロンもそうした扱いになれているのか、縄で引かれることもなくそうつぶやきながら男についていつてしまった。

智浩はその光景にもややとした違和感を拭いきれなかった。しかし自分でもさっきまで確かにあの馬と言葉をやりとりしていたのだ。

やはり、夢を見ているのだろうか。

智浩が四十六年かけて培ってきた常識を納得させるいちばん簡単な答はそれしかない。だが、智浩ははつきりと目覚めているのだ。

それは頬をつねるまでもない確かな事実だった。

そうはいつても、気がついたら見知らぬ土地にいて、恐竜に追いかけれしゃべる馬に出くわすという事態を論理づけて説明することまた、智浩には不可能だった。そんなことは起こり得ないということならいくらでもいえるが、現実には目の前で起こっているのだ。

結局のところ、理解の追いつかないことは考えても仕方がない、という結論に戻ってきてしまうのだった。

「じゃ、おじさんはこっちな」

ミュールはゲイロンを見送ったあと、智浩にそう声をかけた。とにかく彼女の説明をもういちど聞いてみるほかはない、と智浩は彼女にならって身体の向きを変えた。

そのとき、建物のかげにひっそりと立つ少女の姿が目に入った。

つい先ほどまで、そんなところに人はいなかったような気がする。智浩は軽い驚きとともに少女を見た。

ミュールよりももうすこし幼く見えるその少女は、そのミュールと同じ金髪を肩の先まで伸ばしている。身につけているのは黒のドレスだ。

しかし、そんなことよりも智浩の心に深く残ったのは、宝石のように紅く輝く両の眼だった。

智浩は吸い込まれるようにして、その紅い瞳に視線を合わせてしまっ

た。完全に目が合い、少女が妖しく笑った。

その瞬間、幼いと感じた少女の印象が一変した。まるで妙齡の女性に微笑みかけられたようだった。背筋を指先でなぞられたかのように、甘いふるえが智浩を襲う。

智浩と少女の間には五メートル近い間隔があいている。にもかかわらず、智浩は少女の吐息を感じた。熱のこもった息を吹きかけられて、身動きがとれなくなってしまう。

「おじさん、どうしたの？」

捕らわれた智浩を救ったのは、ミュールの声だった。

まるで湿りけのないその声で智浩と少女をつないでいた見えない糸は切れた。智浩は知らず知らずにとつめていた息を吐き出し、それからミュールを見た。

「いや、今そこに」

だが、そういつて再び少女の方を見やったとき、そこには誰もいなかった。

「そこに？」

「……いや、なんでもない」

ミュールは少女がいたことにまったく気がついていないようだった。智浩は今の不可思議な体験をうまく彼女に説明できるとは思えなかったし、事実だけをいうなら「いまそこに少女がいた」というだけのことである。結局、智浩は言葉を濁した。

ミュールも深く追求はしてこなかった。智浩の実感としては少女に魅入られていた時間は長かったが、実際にはそれほどでもなかったのだろう。

疲れているのかもしれない。

先ほどから不思議なことばかり起こっている。智浩はいちど頭を振ったあと、ミュールについて食堂へと入っていった。

広い空間に、木製のテーブルといすがいくつも並べられている。

その奥にはカウンター席もある。

だが、智浩が食堂だと思って入ったそこに客の姿はひとりも見られなかった。

時計がないので正確な時刻がわからないが、太陽はまだ高く、まだ昼をいくらか過ぎたころと感じられる。遅い昼食をとっている人がいても良さそうなものだ。

定休日なのか、それとも味がひどくて繁盛していないのか。それとも、こんな造りだが店ではないのだろうか。

「やあ、いらっしやい」

カウンターの奥から恰幅のいい女性が顔を出し、笑顔で智浩に声をかけてきた。

「どうも」

智浩はどう接していいか判断しかね、そんな曖昧な返事を返した。「このひとはリーニャさん。ここのおかみさんよ。おじさん、おなかは空いてる？」

ミュールに聞かれ、智浩は自分の腹に手を当ててみる。

そういわれれば、そこそこ空腹だった。今朝は簡単なものしか口に入れていないし、恐竜に追われて全力疾走したり馬上で必要以上に揺さぶられたりと、近年なかったほど運動もした。

「そうだな、すこし」

正直にそう答える。しかしすぐに、財布を持っていないことに思い当たった。

そういうと、ミュールは笑った。
「もちろん、ごちそうするわよ。わたしが呼んだのだもの」

カウンターから近いテーブル席に向かい合って腰を下ろすと、ほとんどくしてリーニヤが食事を運んできた。

「こんなものしかないけど、たとと召し上げれ」

そういつて、木製の碗を智浩の前に置く。

碗のなかにたつぷりと盛られていたのは、数種類の豆を煮込んだスープだった。そのうえにやや大きめに切られた肉が三切れ乗せられている。

「お、おかみさん、私はいいいよ」

あわてた声を出したミュールの方を見ると、リーニヤが彼女の前にも木の碗を置いたところだった。それにも豆のスープが盛られていたが、量は智浩のそのの半分ほどで、肉も乗っていないかった。

「あんたも成長期なんだから、ちゃんと食べなさい。気にしないでいいから」

「でも」

碗を返そうとするミュールだが、そこで彼女の腹がはつきりきゅと鳴った。ミュールは赤面し、リーニヤは優しい笑顔になった。

「ほら。魔法を使うとおなかが減るんでしょう。あんたに倒れられたらみんな困るんだから」

「う、うん」

結局ミュールは碗を受け取り、リーニヤは満足げな表情で下がっていった。

「ダイエットでもしているのか？」

やりとりを見ていた智浩がそう聞いたが、ミュールはあいまいな笑顔を返しただけでそれには答えなかった。

「じゃあ、いただきますしょうか。おじさんも、暖かいうちにどうぞ」
「ああ……」

取り繕うようなミュールの様子になんとなく違和感を覚えつつも、

腹が減っているのも事実だったので、智浩はそれ以上追求しなかった。

やせる必要があるようには見えないが、年頃の女性だし、必要以上にダイエットをしたがるのも無理はないか。

そんなことを考えて自分を納得させ、椀に添えられた木製のさじで湯気のたつ豆のスープをすくい、口に運ぶ。

スープは、あっさりとした塩味だった。

かすかに肉でとっただしのような風味も感じるが、それほど複雑な味ではない。

豆は種類によって若干食感に違いがあるが、やはり塩味しかしない。

はつきりといえば、それほどうまくもない、というのが正直な感想だった。

肉をひと切れ口に運ぶ。やけにかたい肉だった。干し肉か何かなのだろうか。噛んでも噛んでも柔らかくならず、飲みこむのにひと苦労する。

どうやら、この店が繁盛していない理由は料理の腕前にあるようだった。この料理をわざわざ食べに来る客がいるとは思えない。

それでも、ごちそうされたものを残すのも忍びないと感じ、智浩はさじを動かした。

「あんまり口に合わない、って顔だね」

椀の中身が半分ほどになったところで、声がかかった。

食堂のおかみ、リーニヤが飲み物の入ったカップをふたつ運んできたのだった。

「いや、そんなことは」

智浩は口ごもったが、リーニヤはカップを智浩とミユールの前に置くと、気にしないでと笑った。

「こつちとしても、お客さんに出す料理じゃないのはわかってるんだけどね。でも、仕方ないんだ。食材も香辛料のたぐいも、もうほとんど底をついていてね」

「食べ物がない？」

「ああ。アーロの群れのせいさ」

「アーロというのは、確か……」

智浩は何時間か前に自分を襲おうとした恐竜の姿を思い返した。

「見たのかい？ あいつらは雑食でね。人も襲うし、畑も荒らすんだ。来る途中の畑の様子は見たかい？ ひどい有様だっただろう」

「あ、ああ」

智浩はあいまいにうなづく。

街を囲う壁の外側に農地が広がっていたのは森を抜けたときに確認していたが、実際にその側を通ったときはゲイロンのせいでふらだったので、はつきりと様子は覚えていなかった。

「アーロどもが数ヶ月前から居座っているせいで、街の作物は全滅、周辺の街から運んでもらおうにも邪魔をされる。この街は孤立しているのさ。それもこれも前にミュールが呼んだコーイチとかいう」

「お、おかみさん」

相手の様子などおかまいなしにしゃべり続けるリーニヤを、ミュールが制止した。

「ああ、ごめんよミュール。あんたのことを悪くいったんじゃないくて」

「わかってる。でも、私から話すから。ごはん、ごちそうさま。とつてもおいしかった」

ミュールはそういうと、空になった自分の腕をリーニヤに差し出した。リーニヤはまだ何かいいたそうだったが、結局腕を受け取ってまた奥へと引っ込んでいった。

智浩は、まだ半分残っているスープの碗を見ながら考え込んでいた。

リーニヤの話が本当なら、このスープは実はとても貴重な彼らの食料だったのではないだろうか。

ミュールはかなり遠慮していたし、彼女の腕には肉がなかった。昼時にも関わらず、食堂には他に人がいない。

智浩が食堂の外へと目を向けると、いつのまにか数十人単位の人が集まって、遠巻きに智浩たちを見ていた。しかし食堂の中まで入ってくるものはいない。

背筋を冷たい汗が伝っていくのを感じ、智浩はかすかにふるえた。このスープを食べたのは、失敗だったかもしれない。

海外旅行でぼったくりバーへ入ってしまい、クレジットカードで数十万を支払われた友人の話を思い出す。自分もこの後理不尽な要求を突きつけられるのではないだろうか？

しかし、智浩は金を持っていない。それどころか財布もないということは先ほど伝えたのだ。

金でなければ、なにを要求されるというのだろうか。

「おじさん？」

下を向いて考え込んでいた智浩に、ミュールが声をかけた。

「な、なんだ！」

ミュールの口調はさきほどまで変わらないものだったが、智浩の方が警戒心から強い言葉がでた。

「なんだ、って……詳しい話をする、っていったじゃない。おじさんって、あんまりひとの話聞かないわよね。大人なのに」

ミュールにあきられ、智浩は言葉に詰まった。

「まあいいわ。あらためて、わたしはミュール・アスタス。この街の召喚士です。ここはおじさんが普段暮らしているのとは別の世界で、おじさんはわたしに召喚されて、ここへと喚よばれてきたの。ここまででは、いい？」

ミュールは念を押すようにたずねたが、智浩の長年かけて固まってきた頭脳は、まだ事態を理解しきれていないようだった。

「別の世界というのは、外国ということか？」

「……そう考えれば納得できるのなら、それでもいいけど」

ミュールはまたあきれた。大人というのはみなこのように頭が固いのか、それとも智浩が特別なのか。

「だが、君たちはみんな日本語をしゃべっているじゃないか」

「それは、召喚の際に自動的に魔法がかかっているのよ。私たちの言葉が、召喚されてきたひとの母国語に自動で変換されて聞こえるの」

「君が自動翻訳機を持っている？」智浩はとんちんかんな反応をする。

「……なんでもいいわ。会話には支障がないってことさえ理解してもらえれば」

「ふむ」

智浩は腕組みをして、ひとつ息をついた。

「それで、私をどうするつもりなんだ？」

「どうにかしてほしいのは、こっちな」

ミュールは真剣な表情で、智浩に訴える。

「最初にいったでしょう。トモヒロには勇者として、この世界を救ってほしいのよ」

「世界を、救う？」智浩は首をかしげた。「私が？」

「そう」ミュールはうなずいた。「あなたには、その力があるのよ」わずかな間、沈黙が流れた。

だが、智浩はすぐにミュールから視線をそらしてしまった。

「バカをいうな」

おもしろくもない、といった態度だ。

「私はしがない会社員だ。特技といえば簿記くらいなものだ。私にできるのは社員の給料の計算や貸借対照表の作成であって、世界を救うなどという規模の大きいことはどこかの大統領にでも任せておけばいい」

「そんなことない。あの黒こげになったアー口を見たでしょ」ミュールは必死でいつのつた。

「あれがあなたの力。この世界の人間では及びもつかない魔法の力よ。おじさんがその気になれば、山ひとつ砕くことだってできるよになるわ」

「私は生まれてこの方、魔法なんてものを使ったことはない。私を

担いだつておもしろいことなんかないぞ。どうせあの恐竜も、恐竜が焼けてしまったのも、なにかトリックがあるんだろう。大人をだますものじゃない。正直にいいなさい」

「だましてなんかいないわ。おじさんこそ、どうしてわかってくれないの？」

「わかるもわからないもない。魔法なんてでたらめを信じるのは、子供だけだ」

あまりにもかたくなな智浩の態度に、ミュールもいい加減頭にきていた。

「だったらいいわ。証明してあげるから、ついてきて」

ミュールはそういうと、席を立った。そして智浩がどうするのかを確認もせず、ずんずんと歩いて食堂を出ていってしまふ。

「こ、こら。待ちなさい」

智浩は後を追うか一瞬ためらったが、ここでひとりになっても文無しのうえ帰り道もわからない。仕方なしに席を立て、ミュールの後を追った。

(5)

ミュールは食堂の裏手に回っていく。智浩がそれを追いかけていく。

さらにそのあとを、食堂の外で智浩を見ていた数十人の住民がぞろぞろとついていく。もちろん、一定の距離をあけて。

食堂の裏手は、ちょっとした広さの空き地になっていた。建物が建つ予定だったのか舗装はされておらず、土がむき出しになっている。

奥の方には木造の建物が見える。位置関係からすると、ゲイロンが向かった厩舎だろうか。

ミュールは空き地の端に、食堂の建物を背にして立った。

智浩が追いつくと、やや挑戦的な目つきで見返してくる。

「いまから、魔法を使ってみせるわ。言葉で説明してもわかってくれないなら、実際に見ってもらうのがいちばんなものね」

そういうと、ミュールは智浩に正対し、両手を大きく広げた。

「わたしが何にも道具を持っていないってこと、しっかり確認して」
智浩はミュールの言葉に従って、彼女を観察する。確かに、なにも持っていない。袖口が広いので、その気になればそこに何か入れることは可能だろうが、ミュールは自分から袖をまくって見せた。

しばらくすると、今度は背中を向ける。

「わかった、十分だ」

智浩がそういうと、ミュールは智浩へとむきなおった。

「火の魔法を使うわ。あぶないから、すこし下がって」

智浩を三メートルほど下がらせる。そのさらに十メートルほどうしろにいる野次馬たちも、智浩が下がるのにあわせるように後ずさった。

ミュールは一度深呼吸をし、それから空き地の向こう、街と外を隔てている高い外壁を指さす。

「あそこへむかつて火の玉をとばすわ。わたしの指先を見ていて」
そしてミュールは押し黙り、精神を集中しはじめた。

右手の指先で銃を形づくるような、少々こどもっぽいポーズだ。
智浩はマジックショーの種をさぐるような気持ちでいた。指先を見て、といわれてその通りにしていたら、なにか仕掛けがあっても見逃してしまうだろう。むしろ空いている左手がうれしい。

あるいは、的にしている外壁のほうだろうか。智浩たちからは二十メートルほどの距離があり、あそこに仕掛けを施してあってもここからは見えないかもしれない。

ミュールが二度、三度と深い呼吸を繰り返す間、智浩はそんなことを考えながらあちこちに視線をとばしていた。

だがそれも、短い間だった。

「em, avia」

ミュールが重々しく口を開き、呪文を唱えはじめたその途端。
外壁にむけられた彼女の指先が、強く輝きだしたのである。

「な、なんだ？」

智浩は思わず声を出し、目を細めてその光を見た。

彼女がその手になにも持っていないのは、先ほど確認したばかりだ。あやしいと思って注視していた左手は握りこぶしになっているが、腕は下げられたままだった。

太陽の光の加減だろうか、と智浩が立ち位置をすこし変えても、まばゆい光はかわらない。むしろ、すこしずつ輝きを増し、直視が難しくなってきた。

光は間違いなく、その指先から発生していた。何の種も仕掛けもなしに。

「qian」

ミュールが続きの言葉を唱えると、光が収束しはじめた。

「annu！」

そして最後の言葉とともに、ミュールは光を集めた指先を軽く振りあげ、振りおろした。

すると、光は爪ほどの大きさまでまとまったあと　ぽんつと気が抜けたような少々かんだかい音をたてた。

それとともに、光のかたまりはこぶし大ほどの大きさの火の玉となり、ひよろひよろと前方にむけて飛んでいく。

火の玉はミュールが的としてしめした外壁まで届くことなく、十メートルほどとんだあたりで消えてしまった。

智浩はその様子をしっかりと見ていたが、なんのリアクションもとれない。

「はあっ、はあ、はあ　」

ミュールは激しい運動をこなしたあとのように、両手をひざにつき、肩で息をしている。野次馬たちも静まり返り、しばらくは彼女の荒い呼吸だけが空き地にひびいた。

やがて口中に溜まった唾液を飲み込んだミュールは、顔を上げて智浩を見るといった。

「ど、どう？」

「ああ　」

智浩もどう答えたものか、言葉をさがしている。すると、代わりに背後から歓声があがった。

智浩についてきていた数十人の野次馬たちだ。

「いやー、やっぱりミュールはすごいな！」

「あれだけの火の玉出せるなんて、異世界人でもないのに……」

「ミュールちゃんはこの街の誇りね」

口々にそんなことをいつているのが智浩のほうまで聞こえてきた。「なんというか、すごいな」

智浩が野次馬のほうを見ながらいったので、ミュールは赤面した。たしかに、実際に火を現出できる魔法使いは数が少ないんだけど、そうじゃなくて、魔法！　仕掛けなんかなかったでしょう？」

「　　そうだな」

智浩はうなずかざるを得なかった。

ミュールの言葉にあわせてなにもない空間から光が集まり、それ

が火の玉に変わった。その光景を、智浩が一番近いところで見ていたのだ。自分の目を信用しないわけにはいかなかった。

だが、そのわりに期待はずれ感が残るのは、光の集まる光景が神々しいまでに感じられたわりに、出てきた火の玉はひよろりと頼りないものでしかなかったからだろうか。

火の玉を出し終えたあとのミュールの疲労困憊ぶりも、成果に対して支払う労力が大きすぎるように見えた。

「じゃあ、次は智浩のばんね」

「なに？」

ようやく息の整ったミュールにいわれ、智浩はきよとした。

「自分の指先から火がでるのを見れば、もう疑いようなんかないでしょう？」

「それはそうだが　君の様子を見る限り、そんな簡単にできるようには見えないな」

智浩は戸惑ったが、ミュールは表情を引き締めて彼に告げた。

「あなたは、特別な」

他人からいわれることなどそうそうないことをいわれて、智浩はそれ以上反論できなくなってしまう。

「正確には、あなたたちは特別、というほうが正しいのかもしれないけど　。でも、あの森でアークを焼いた炎の威力を見ても、あなたはきつとなかでも特別な力を持っていると思うわ。いちど試してみて。それできつとわかるから」

「う、うむ」

ミュールが智浩の右手をとった。なんということもないはずだが、智浩は頬のあたりに血が上ってくるのを感じて、その熱を振り払うようにうなずいた。

「ありがとう」

ミュールが笑顔をむけ、智浩は顔を逸らした。

「あそこをねらえばいいのか？」

照れ隠しに、そんなことをいう。

「そうね。ねらいは目と手でつけるの。だいたいいいわ。精霊に伝わりさえすれば、あとは彼らがやってくれるから」

「精霊？」

「火や水をあやつる魔法は、それぞれの精霊に力を借りて使うのよ。呪文は彼らに指示をするための言葉。魔法の威力は、どれだけ多くの精霊に呪文を聞いてもらえるかで決まるの」

「はあ……」

ミユールが実践して見せたあとなので、智浩も先ほどまでよりは彼女の言葉を聞く構えができてはいるのだが、聞いてすぐに理解するには彼女の説明は観念的すぎた。

「とりあえず今は、細かいことは考えずに。右手を構えて。そう」

ミユールも智浩が理解できるとは思っていなかったのか、気にせずに智浩に構えをつくらせる。

「手の回りに集まっている精霊に、お願いするような気持ちで呪文を唱えてみて。いい？ em , a v i a , q i a n」

「エン、アビア、チエン……」

智浩は素直にミユールの言葉に続いたが、やはり気恥ずかしさもあった。ミユールの発音をそのままねるといふよりは、英文をむりやり日本語発音したようなたどたどしい発音になる。

ミユールが呪文を唱えたときはこのあたりですでに指先に光が集まっていたが、今はまだなにも起こらない。

この時点で智浩は、ミユールのいつていることがまったくのたぬめだとも思えなくなっていたが、といって自分が本当に魔法とやらを使えるとも信じられなかった。

それでも、いちどくらいは彼女のいうとおりを試みるのもいいだろうと思い、ミユールに続いて最後の言葉を口にする。

「なにも起こらない、と思ったのは言葉を口にしたら終わるそのときまでだった。」

最後の音が智浩の口を抜けた途端、智浩は右手を強烈に引っ張ら

れるように感じて、両足を踏ん張った。

見れば、直前までなにもなかったそこに、人の顔ほどの大きさの炎のかたまりができてあがっている。さきほどミュールが出した火の玉とは比べものにならないものだった。

「すごい……」ミュールの声が聞こえた。

智浩もちろん驚いたが、それよりもこの炎をなんとかしてしまいたくて、的になるべき外壁へと再び目を向けた。

だが、その場所を見た智浩は今度こそ驚愕し目を見開いた。

いままさに智浩が炎をぶつけようとしているそこに、少女がひとり立っていたのだ。

流れるような金髪と、紅い瞳をもつ少女。

食堂に来る前に見かけた少女に間違いなかった。

「なっ
」

智浩はあわてた。だが、すでに発動した魔法を止めるすべなど知りはない。

ねらいをはずす余裕もなかった。

智浩の右手にあった炎は次の瞬間、炎の束となって今まさに少女が立つそこへ飛びかかったのだ。

火の玉などというレベルではない。

人間が巻き込まれれば間違いなくただではすまない業火のかたまりが少女を襲う。

だが、少女は戸惑いも逃げもしない。

まさに業火が到達するそのとき。

少女は智浩を見て、また妖しく笑ったのだ。

さきほどよりもずっと距離が離れているのに、まるで目の前でそうされたかのように、智浩の脳裏にはつきりとその表情が刻まれた。そしてその直後、智浩の放った炎が外壁にぶち当たり、壁は大きく音を立てて崩れてしまったのだった。

(6)

もうもうと煙の立ちこめるそこを、ミュールも、周りを取りまく野次馬たちも、あっけにとられて見つめていた。

街と外を隔てる堅固な外壁が、たった一発の魔法によってあえなく崩れてしまったのだ。もちろん、壁全体が崩壊したわけではないが、人ひとりくらいなら余裕で通り抜けられそうな穴がすっかりできあがってしまっていた。

その魔法を放った張本人である智浩は、魔法の発動が終わって身体の自由を取り戻すや、崩れた外壁にむかって駆けだした。

「ちよつと、おじさん？」

ミュールの呼びかけも無視して、崩れたレンガが積みあがった場所まで駆けつけた智浩は、小さな山となったレンガを取り除きはじめた。

熱で溶かしたというよりは圧力で吹き飛ばした形ではあったが、強烈な火炎を浴び、ところどころは黒こげになっているレンガの山である。

「熱！」

当然、素手でさわれば熱い。

だが、そんな簡単な理屈にも考えが及ばないほど、智浩は動転していた。

「おじさん、どうしたの？ 大丈夫？」

ミュールが側へきて声をかける。

「どうしたのって 気づかなかったのか？」

智浩は強い口調で彼女を問いつめた。

「今、ここに子供がいたんだ！ わ、私は、あの子を、巻き添えに

」

「子供？」

ミュールは首をかしげる。

「子供なんかいなかったわ。人がいるところに魔法をうたせるわけがないでしょう」

「だが、確かに見たんだ！」

智浩は大量の汗をかき、声はうわずっていた。すくなくとも冗談でいつているわけではないと感じたミュールは、意識して落ち着いた声をだし、智浩をさとした。

「あのね、トモヒロ。いまこの街に、わたしより年少の子供はいないのよ」

「子供は、いない？」

「そう。アールがこの街を本格的に包囲しはじめたころ、子供と成年寄りだけはなんとか脱出させたの。成人していない人間で残っているのはわたしだけ。だから、子供の姿を見るはずなんかないのよ」

「そう、なのか？」

その後、すこし時間がたってから、崩れたレンガの山を取り除いてみても、やはり子供の姿はなかった。

「幻覚だったのか？」

「はじめて本格的に魔法を使ったから、ちょっとしたトランス状態になったのかもしれないわ。なんとか試せばなれるわよ、たぶん」

ミュールは気楽にそういった。

「あんなにはつきりと見えたのだが。肩まである金髪に、紅い瞳の」

「紅い瞳ですって？」

しかし、智浩が少女の特徴をつぶやいた途端、ミュールの態度が一変する。

「あ、ああ。宝石のようなきれいな目をしていたんだ」

「金髪に、紅い瞳」

ミュールはしばらく目を閉じ、考えるようなそぶりをした後でいった。

「よく聞いて、トモヒロ。そいつこそがいま世界を混乱させている

張本人　魔女のひとりなのよ」

「この世界にはいま、三人の魔女がいるの」

ミュールと智浩は、食堂へと戻ってきていた。野次馬たちは相変わらず、食堂の外からふたりを　　というよりは智浩を　　観察している。ただし、崩れた外壁の応急修理に何人かが空き地に残ったため、数はすこし減っていた。

「そもそも、魔女とは？」

智浩が質問する。先ほどまでの体験で、智浩自身もようやく、ここが自分が普段暮らす世界とは異なったルールのある世界だということを理解しはじめていた。

「この世界には古くから魔法の概念があるけど、実際にその力を使いこなせる人はとても限られているの。わたしはこれでもこの地方では有数の魔法使いだといわれているけれど、それでも、たとえば火の魔法ならさっきの火の玉がやつとというわけ。　　だけどころまれに、強力な魔法を使いこなせる女性が現れることがある。それが魔女という存在よ」

ミュールはいちど言葉を切った。智浩がちゃんと話についてきているのか不安になったのだろう。

「続けてくれ」智浩は先をうながした。

「魔女には軍隊も無力よ。だからたいていの場合、魔女が出現すると国が取引をするの。郊外に屋敷を与えて自由な生活を保障する代わりに、国が被害を受けるようなことはしない、というような」

「それで納得するのか」

「結構するみたい。魔女は人嫌が多い、っていうし……。でもなかには取引に応じない魔女もやっぱりいるわ。今回はこっちなね。しかも悪いことに、三人の魔女の間でいちばん強いのは誰だ、みたいな魔女同士の争いが始まっちゃって、あちこちで混乱が起きているの」

「すると、その……アークというのが街道を占拠しているのも、魔女のしわざというわけか」

「そう。『魔物使い』シトラの能力^{ちから}ね。ただ、これは魔女同士の争いというよりは、わたしをこの街に閉じこめておくのがねらいみたい」

「君を？」

「さつきもいったように、魔女相手には軍隊をぶつけてもムダ。魔法でいいようにされるだけよ。でもだからといって取引に応じずあばれる魔女を放ってはおけないでしょう。そのための切り札が、わたしたち召喚士なの。異世界から魔女以上の力を持つひとを呼び寄せて、魔女を退治してもらうのよ」

「なるほど。だが、それは君を閉じこめておく理由にはならないようだが」

ミユールに召喚の力があるのなら、閉じこめるのではなくその能力を封じる必要があるはずだ。

「あー、それは……」ミユールはすこし恥ずかしそうに鼻の頭をかいた。「わたしは、召喚士としてはまだ半人前なの。送還（おくり）とどける）はできても召喚（よびよせる）はできないのよ。それで、お師匠さまに書いてもらった召喚の書を異世界へと送って、それを読んだ人にこちらへきてもらうというかたちを取っているわけ。お師匠さまはこの街からだいぶ遠い山奥に住んでいるから、わたしがこの街にとどめられている限り、新しい異世界人は召喚できないはずだったのよ」

「だが、私は？」

「なんらかのイレギュラーがあつたのね。よかつたら、この世界にくる直前のことをおしえてくれない？」

「この世界にくるまえ」

ミユールの問いにこたえて、智浩はこの不可思議な体験の発端がどうであつたかを思い返しはじめた。

今朝　もうずいぶんまえのことのようにも感じるが、間違いな

く今日の朝のことだ。私は久しぶりにゆっくりとした休日の朝を迎えていた。

ここしばらくは残業や休日出勤も多く、あまり家族と会話もしていなかった。そこで今日は一日家族サービスに徹することにし、妻とは午後から買い物につきあう約束をしたんだ。

ひとり息子の浩一は部屋から出てこない。明確に反抗期というほどでもないが、思春期の息子とは妻以上にコミュニケーションをとっていない。さすがにこれではいかんだろうと思い、小学生の頃以来、久しぶりにキャッチボールにでも誘ってみるかトラフな格好に着替え、息子の部屋のドアをノックしたのだが 返事がない。

外へでていった様子もなかったし、不審に思った私は何度かノックを繰り返したあと、ドアを開けたんだ。

息子の部屋に入っただのは本当に久しぶりだった。

ちいさい頃使っていたプラスチック製の赤い空バットは見あたらずにうちに出ていったのだろうか。いまあいつがどんなものを好んでいるのか知りたい気持ちはあったが、親に勝手に部屋に入られたと知ったらきつと機嫌を悪くするだろうと思い、すぐに出ようとしたんだ。

息子はやはり部屋にいなかった。こっちがトイレにでも入っているうちに出ていったのだろうか。いまあいつがどんなものを好んでいるのか知りたい気持ちはあったが、親に勝手に部屋に入られたと知ったらきつと機嫌を悪くするだろうと思い、すぐに出ようとしたんだ。

だがそのとき、床の上に無造作に置かれていた一冊の本が目に入った。

真っ白な表紙に、横書きで表題らしきものが書かれている。毛筆で書かれたように見えるその文字はひどく達筆で あるいはあまりにも乱雑で なんと書かれているのかはわからなかった。やけに分厚い、五百ページくらいはありそうなハードカバーの本だ。

私は抑えがたい好奇心が沸き上がってくるのを感じていた。マン

ガ、ゲーム、スポーツ、ファッション　息子が興味を持っていたようななどの事柄にも当てはまりそうのないその本。いったいなにが書かれているのかと知りたい気持ちでいっぱいだった。

しばらく葛藤したあと、ついに私は欲望に負け、その本を拾い上げた。すこしのぞいて、元のように戻しておけば気づかれないだろうとそう思いながら。

左手で本を持ち、右手で表紙をめくる。最初のページにはなににも書かれていなかった。

続いてもう一ページ、めくろうとしたとき　。

突然、風が吹いたように本がひとりではらばらとめくれた。私の記憶では、息子の部屋の窓は閉まっていたはずなのに、だ。

それが収まったとき、開かれていたページは一面、真っ黒だった。私は、わけもわからずその真っ黒なページを見つめ　。

気がついたときには、草木の茂る全く知らない土地にいたんだ。

「ということは、あの本が　」

「お師匠さまが書いた、召喚の書よ」

智浩の言葉に、ミユールがうなずいてこたえた。

「ここは、本の中の世界なのか？」

「そうじゃなくて、本という媒介を通してでより安全に異世界どうしをつなげているのよ。……まあ、この辺はこの世界でもごく一部のひとしか理解していない理論だから、おじさんが理解できなくても無理はないけど」

いずれにせよ、好奇心に負けて本を開いたせいで、このおとぎ話のような出来事に巻き込まれることになったのは確かなようだった。智浩はため息をつく。

「だが、先ほどの話では、その召喚の書とやらを新しく送ることはできないということだったが」

「その通りよ。だから、そこにあっただのはおじさんの前にこの世界

に召喚された人物がつかった書なんだと思うわ」

「私の前に」

「おじさんの前に私が召喚した人物は、コーイチという名前だったの」 智浩は、ゲイロンに乗っていたときにすこしそんな会話がでていたのを思いだした。

「それが、私の息子の浩一だと？」

「状況からいって、間違いないと思うわ。ふつう、召喚の書はいちど発動するとロックがかかって、ほかの人物が読んでも発動しないようになるの。でも、肉親ならロックをすりぬけることもありうるかもしれないし」

「ふむ」 智浩は腕組みをして考えている。

「そうだとすると、その男はいまどこにいる？ 実際に会えば私の息子かどうかはいつぱつでわかるが」

「あ、それは」

智浩の問いに、ミュールは口ごもってしまった。

「どうした？」

「えーっと、それはちょっと、無理なの」

それまでしっかりと目を見て話していたミュールが、急に視線を逸らし、ひどく言いづらそうにしている。智浩の背筋が泡だった。

「まさか、ひょっとして、死ん」

「あ！ ちがうの、そうじゃないの！」

「じゃあ、どうして会えないんだ！」

智浩の最悪の想像ははつきりと否定したものの、それでもやはり会えない理由は口にしようとしなない。

智浩が腰を上げミュールに詰め寄ろうとしたとき、カウンターの方から声が聞こえた。

「なんだい、あいつはあんたの息子だったのかい！」

食堂の女将、リーニヤが盆に素焼きのグラスをみつつのせ、そういいながらこちらに歩いてくる。

グラスを智浩とミュールのまえにひとつずつおき、自分もミュー

ルのとなりにとつかと腰を下ろした。もうひとつのグラスは自分用らしい。

グラスからはほのかに酒のにおいがした。色からするとぶどう酒だろうか。

だが、智浩が気になるのはグラスの中身より自分の息子かもしれない男の行方だ。

「あんたは、その　その男がどうなったのか知っているのか？」

「知っているもなにもないさ」

リーニヤはグラスをあおった。

「この街の住民ならみんな知ってる。ミュールが言いにくそうにしているからあたしが代わりに言っておあげるけどね、あいつはこの子を裏切って、魔女に寝返っちゃったのさ！」

(6) (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

なかなか話が進まないですね。やっと現状説明か……。

おじさん、もうすこしものわかりを良くしてあげるべきだったかな。

ご意見、ご感想などありましたらぜひお聞かせください。

(7)

「寝返ったとは、どういう」

「そのままの意味だよ」

戸惑う智浩に、リーニヤが仏頂面を返す。

「魔女を退治してもらうために呼び寄せたのに、あいつ自身が自分の力におぼれて、魔女と一緒にになって暴れまわることを選んじまったのさ。しかもこの街を出るときには、この子にひどい侮辱を」

「おかみさん」

酒の力もあるのか、ひとりでどんどんしゃべり出すリーニヤをミユールが止めた。

「ああ、ごめんよミユール。余計なことまでいうところだった」

「わたしはいいけど……」

ミユールの視線の先で、智浩が渋面をつくっている。

「私の息子　かもしれない男が、そんなことを？」

「コーイチは、この世界を夢のようなものだと考えてしまったみたいなの。いくらでも好き放題に、自分の欲望のまま行動しても問題ないと思ってしまったのね。たしかに、こちらの世界がどういふことになっても、本来接点のないあなたたちの世界には影響はないから」

「むう」

「トモヒロはわたしのいうことを理解してくれるまでに時間がかかったけど、コーイチはわりとあっさり理解してくれたの。だから、わたしもすこし油断してしまったのね。コーイチは基本的な魔法の使い方をマスターしたところでこの街を出ていってしまった。送還の書をもって」

「送還の書？」

「わたしが書いた初めての魔法書……それがあれば、わたしが儀式を行わなくても、自分の意志で元の世界に帰ることができるわ」

「この世界で好き放題やって、やばくなったり面倒になったりしたら、そいつを使ってさっさと帰っちまおうって腹づもりなのさ、あいつは」

最初に会ったときは愛想のいい中年のおばちゃんといった印象だったリーニヤが、いまいましげに毒づいている。その対象が自分の息子かもしれないと思うと、智浩の胸は痛んだ。

「まさか、私の息子が……」

「信じられないのも、無理はないと思うけど。でも、本当のことなの」

自分の息子がそんなことをするはずがない、と一喝できたならどれほどいいだろうか。だが、智浩にはそうすることができなかった。ただでさえ、子育ては妻に任せきりだったうえ、息子が中学にあがって以降は自分も仕事の忙しさが増し、ますます接点がすくなくなっていた。

自分の息子がいまなにをどう考え、どう行動するのか。その程度のことさえわからないのだと、智浩はいま思い知らされていたのだった。

「コーイチは魔女シトラの誘いに乗って街を出ていったあと、シトラに指示をしてこの街をアークに封鎖させたのよ。そうやってわたしを身動きのとれない状態にしてから、今は南の方で好き放題に暴れているらしいわ」

「……そのシトラというのが、私が見た少女なのか？」

「紅い瞳は魔女に共通の特徴なの。もともとの瞳の色に関わらず、能力が覚醒するとそうなるのよ。でも、おじさんが見たのはシトラではないわね。シトラには監視をあざむいて街に侵入するような能力はないし、まず、少女ではないもの」

智浩はほんのわずかだが、ミユールの言葉にとげのようなものを感じた。

「だから残りふたりの魔女のうちどちらかだとは思うけど、どちらかまではわからないわ。『幻術師』スウリイは黒髪の魔女だけど、

そのふたつ名のとおり他人をあざむくのはお手のものだし、もうひとりで『探求者』パスクミウルは あれも少女なんかじゃないけど、自分の外見を変化させる秘術を使うらしいから、その気になれば子供の姿をとることもできるんじゃないかしら」

「ずいぶん、魔女を嫌っているんだな」

「えっ？ そ、そりやそうでしょ、もちろん」

魔女の特徴を語るミユールに、なんとなくさきほどコーイチを毒づいていたリーニヤが重なり、智浩が思わずそういうと、ミユールはすこしあわてたようにそうこたえた。

「この街の人を閉じこめてるのもそうだし、あっちこっちで関係のない人に迷惑をかけているのよ。好きな人なんていないわ」

その理由はもつともで、智浩も納得できるものだったが、それにしてはミユールがずいぶんうろたえているようなのが気になる。

「と、とにかく」

ミユールはひとつ咳払いをしたあと、やや強引に話題を戻した。

「おじさ トモヒロには、三人の魔女の退治に協力してもらいたいの。もちろん、これはわたしが契約しているこの国、ペルメリカ王国からの正式な依頼よ。受けてくれればこの世界に滞在中の費用はすべて王国がもつし、報酬もあるわ」

「依頼、ということは断ることもできるのか？」

一方的に呼びつけたくせに、というニュアンスを言下に感じて、ミユールは表情を曇らせる。

「もちろん、契約は双方の同意が大前提よ。それに、断つても元の世界に送還するまでの滞在費を請求したりもしないわ。ただ、送還の儀は満月の夜にしか行えないから、いまだと一ヶ月くらい待ってもらうことになるけど」

「一ヶ月！」

智浩は思わず叫んだ。

「それは困る。そんなに長い期間会社を休んだら大問題だ。いやそれどころじゃない。しかも無断欠勤だぞ。理由を聞かれて『異世界

に行っていました』なんて答えて受け入れられるはずはないし」
「おじさん、落ち着いて」

取り乱した智浩をミュールがあわててなだめる。

「この世界とおじさんの世界では時間の流れかたは一緒じゃないし、送還の儀では場所だけじゃなくて時間の指定もできるから、こつちでどれだけの期間を過ごしても、戻るときは召喚されたときとほとんど同じ時刻に戻るはずよ」

「本当だろうな？」

「本当、のはずだけど……」

ミュールも理屈でそう知っているだけで、当然自分で確かめたわけではない。おもわず口ごもってしまう。

見かねたリーニヤが助け船を出した。

「落ち着きなよ。いい大人が、みつともない」

「しかし」

「コーチがこの街にきたのは二ヶ月は昔のことだよ。あんた、自分の息子が行方不明だなんてひともいっていないかっただろう？」

リーニヤにぴしゃりといわれて、智浩は言葉に詰まった。確かに、昨日までは浩一は家にいたはずだ。いくら接点が少ないとはいっても、それくらいはわかる。

「確かに、それはそうだが」

智浩はまだ納得がいかないといった具合だったが、リーニヤはたみかけるようにして反論させない。

「なら、ミュールのいつてるとは本当なのさ。なんだい、大の男が帰ったあとのことばかり心配してグチグチと。この子はね、まだ成人まえだっていうのに、この国唯一の召喚師としてそりやあもうがんばってるんだ。こんな健気でいい子にお願いされて、いっちょやったるうつてな気持ちにならないもんかね！」

酒のグラスを空にしたリーニヤは頬を紅潮させて智浩に迫る。その剣幕に智浩はすっかり押されていた。

グラス一杯でこうまでなるとは、よほど強い酒なのか、はたまた

リーニヤが弱いのか。

「お、おかみさん」

ミュールが今度はリーニヤをなだめるが、リーニヤは聞かない。しゃべっているうちにどんどん酔いが回ってきているようだ。

「本当にミュールはいい子なのにねえ。あたしに息子がいたら、ぜひともお嫁にほしくらいだよ。それをあのクソガキ、同じ年のくせに子供に興味はないだのなんだの、まったくガキはどっちだって」

すっかりたがはずれてしまったリーニヤはその後もしゃべりつづけ、最後はミュールに引きずられるようにしてカウンターの裏へと押しやられてしまったのだった。

「あ、あのー……おかみさんのいつてたことは、あまり気にしないでね」

ひとりで戻ってきたミュールは智浩のむかひに座り直すと、恥ずかしそうに下を向いた。

「依頼を受けるか、決めるのはトモヒロよ。トモヒロの魔力はさっきみただけでも明らかにけた違いだけど、それでもまったく危険がないという保証はできないし」

「私としては」智浩は落ち着きを取り戻していた。先ほどのリーニヤの様子にあてられた部分が大きかったが、「君たちのいうコーイチが、本当に私の息子なのかを確かめたいのだが」

確かに、息子の部屋に落ちていた本を開いて智浩も召喚されたのだから、同一人物だと考える方が自然ではある。

だが、智浩にはリーニヤの態度を見て、自分の息子がこれほど他人に嫌われる行動を本当にとったのか、了解しきれない部分がどうしても残っているのだった。

「コーイチは、いまはシトラと行動をともにしているはずよ」

「では、そのシトラとやらに会いにいけば」

「ううん、その必要はないと思う」

ミュールの言葉はやけに確信に満ちていた。

「どういうことだ？」

「さつき、智浩がみたつていう魔女　スウリイかパスクミウルだ
と思うけど、間違いなく智浩を偵察にきたのよ。あらたに異世界人
が召喚されたのを、向こうも感づいたのね。三魔女はネットワーク
を持っているはずだから、ひとりが気づけば当然　」

そのとき、ミュールの言葉をさえぎるように食堂の外がざわついた。

見れば野次馬をかきわけながら、男がひとり中に入ってくるところだった。ミュールの表情が曇る。

「まさか、もう？」

「ミュール、大変だ！」

男は智浩には一瞥をくれただけで、ミュールに向かって大声を出した。

「アレクさん……」

「シトラのやつがきた！　アールを何十匹も従えて、正門を包囲してやがる！」

アレクと呼ばれた男の言葉で、野次馬たちも騒ぎだした。

「シトラだつて？　大変だ！」

「ついに俺たちを食っちまうつもりなのか？」

「男どもは武器庫にいけ！　急がねえと侵入されちまうぞ！」

口々に叫びながら、食堂に背を向け走っていく。

「ミュール！」

「すぐにいきます」

ミュールが緊張した声で答えると、アレクもすぐにまた走り去った。

「シトラが来たなら、コーイチも一緒にいるはずよ」

ミュールは立ち上がり、智浩を見下ろした。

「依頼を受けるかはあとでいいわ。いまは一緒に来て。シトラはあなたを見に来たの。あなたが出ていかなかったら、アールを使って

強行突入してくるかもしれない」

「わかった」

智浩も席を立った。

「もし本当に私の息子がそこにいたなら、依頼を受けよう」

「いいの？」

「息子が人の道を踏み外そうとしているのなら、それを修正してやるのも親のつとめだ」

「もし、あなたの息子さんじゃなかったら」

ミユールは一抹の不安を感じて智浩を見上げた。

「そのときは、そのときで考える」

智浩はミユールを見ずに答えた。

「だが、そうだとしたら君たちの説明にはおかしい点があるということだ」

「うそなんてついてないわ」

ミユールがそういつても、智浩は視線を向けなかった。

「私は子供じゃない。感傷に流されて勢いだけの判断はしないつもりだ」

そのころ、街の正門 。

そこは頑丈な鉄の扉がしっかりと閉じられており、何者も出入りができないようになっていた。

当然、魔女シトラが従えてきたアーロの群れも一気に突入することとはかなわない。

だが、さきほどから何体ものアーロがかわるがわる鉄扉に体当たりを続けており、そのたびに扉がきしむ音を立てる。その音は少しずつ大きくなっていった。

アーロの群れの先には、巨大な亀のような怪物の背中にしつらえた輿に乗って、ふたりの人間が高みの見物をしている。

ひとりには蒼く染めた髪を背中まで伸ばし、胸元の大きくあいた黒のドレスに身を包んだ女性。

もうひとりとは、この世界では一般的な薄い青色に染めた長袖の胸衣に、刺繍の入ったいくらか上等な上衣を羽織り、ゆつたりめのズボンをはいたまだ年若い少年である。

女性は魔女シトラであり、少年は異世界人コーチであった。

「ほらほら、はやくミュールを呼んでこないと、扉が破られちゃうわよー？」

シトラは正門のうえの見張り台にいる男たちにそう声をかけると、心底楽しそうに胸を張って笑った。それに合わせて、ご自慢の巨大な乳房がゆさゆさと揺れる。

見張り台の男たちは、アーロに向かって弓を射かけたり、石を落としたりしているが、頑丈な鱗に覆われているアーロにはほとんど通じない。

それでも、野生のアーロ相手なら威嚇くらいにはなるが、いま正門に群がっているアーロたちには何の効果もなかった。

アーロたちはシトラの魔法によって自我を奪われ、操られている

のだ。『魔物使い』と呼ばれるシトラの得意技だった。

「なあ、もういいんじゃないか？俺、待ってるの飽きたよ。俺が魔法で門をぶち破るから、突入して皆殺しにしちまおうぜ」

楽しそうなシトラと対照的に、不機嫌な声を出したのはシトラの後ろに控えているコーイチだった。ただし、その視線は正門ではなく、シトラの魅惑的な胸元へそそがれていたが。

「ああん、コーちゃん！ その男らしい考えかた、ステキよ」

シトラはその声を聞くやコーイチへとしなだれかかり、甘い声でそういうとコーイチの頬に遠慮なくキスの雨を降らせた。

魔女の証である紅い瞳を猫のように細めて、コーイチの耳元へささやき声を吹きかける。

「だけど、もうちょっと待って。新しい異世界人が出てきたら、コーちゃんにおもいきり暴れてもらうから。ね？ オネガイ」

シトラはその柔らかい肢体を存分にコーイチへと絡みつかせながらそういうと、とどめとばかりにコーイチの唇へ自分の唇を押しつけた。

「わかったよ、シトラがそういうなら」

すっかり夢見心地にされてコーイチはうなずいた。たいそうだしな顔になってしていることに、本人は気づかない。

「あの小娘を殺しちゃうと、あとあと面倒なのよねー」

シトラが小声でそうつぶやいたのも、まったく耳に入っていないようだった。

「……にしても、ちょっと遅いわね。なにやってんのかしら」

コーイチの首に手を回し、耳に息を吹きかけて遊びながらシトラがつぶやいた。

こちらに気づいた見張り番があわてた様子で降りていってから、もう小一時間ほどたっている。街の反対側にいたとしても、十分たどり着ける時間だ。

「あ、来たわね」

見張り台にいる男たちの様子が変わり、階段を上がってまず金髪

の少女の姿が現れた。

続いてこの世界では珍しい衣服に身を包んだ中年の男性が現れたのを見て、シトラが意外そうに目を丸くする。

「あら珍しい、大人が喚ばれるなんて。ほら、コーちゃん見て。あれが新しい異世界人みたい。……どうしたの、コーちゃん？」

シトラが見上げると、コーイチは見張り台を見上げて固まっている。

やがて、その身体がこきざみにふるえはじめた。

「と、とう」

「トウ？」

「父さん　？」

見張り台にあがった智浩は、ミユールが指し示したほうを見て、すぐにため息をついた。

見たこともない巨大な亀の背に乗っているふたりの人間。そのうち、少年のほうはこちらを見て固まっている。

やや距離はあるが、さすがに見間違えるはずもなかった。

「どう？　おじさん」

「間違いない。あれは浩一　私の息子だ」

「そう……」

肩を落としている智浩に、ミユールはどういえばいいのかわからずそれだけいった。ただ、これで智浩は自分に協力してくれることになるはず。そう思い、ひっそりと安堵の息をつく。

「で、あの息子にべったりくっついてる女は何だ」

「え？　あ、ああ。あれが三魔女のひとり、シトラよ」

シトラは浩一の首に手を回し、体重を預けたまま智浩を見上げていた。まだ幼い息子　智浩はそう思っている　に、娼婦のようにしどけない肉体をべったりとはりつけているその様子に、智浩は不快感を覚えた。

「けしからん」

「えっ？」

智浩はつぶやくと、身を乗り出した。

「浩一！ おまえはなにをやっとるんだ！」

大声でそう叫んだ。

智浩は息子のことをさほど叱ったことはない。しかしその声は、

浩一の心の芯の部分が無条件に揺さぶる効果があった。

「えっ、なーに？ コーちゃん、あのおじさんと知り合いなの？」

ひとり事情を解さないシトラが智浩と浩一を交互に見くらべている。

浩一からすれば、これまで面と向かって反抗したことのない父親である。もういくらか年若ければ、これだけで抵抗する心を完全に奪われていたかもしれない。

だが、思春期に入り、日に日に成長する心と体が、そしてなにより隣にいるシトラの存在が、浩一を勇気づけた。

「と、父さ 親父こそ、なんでこんなところにいるんだよ？」

ようやく我にかえってそういいかえす。

すると、痛いところをつかれた智浩は、語気を弱めてしまった。

「む？ それは、おまえの部屋にあった召喚の書を見てだな……」

「あーっ、勝手に部屋に入ったのかよ！」

案の定、智浩のひんしゆくをかってしまう。

「あ、いや、それは」

「ちよっと、おじさん！ なに押されてるのよ！」

急激に勢いを失った智浩が、ミュールにたしなめられた。

「そ、そうだ。そんなことはどうでもいい。浩一、どうしてこんな街の人を苦しめるようなことをしているんだ。みなさん食糧が不足して、たいそう困っていらっしやるんだぞ？」

父親に問いつめられて、浩一は視線をそらした。

「……」

「浩一、答えなさい」

浩一はしばらく目をそらしたまま無言でいたが、やがて圧力に耐

えかねたのか、輿の上ではじけるように立ち上がった。

「うつ、うるさいなあ、親父には関係ないだろ！」

「あん」

「なっ」

ふりほどかれる形になったシトラが声をあげ、智浩は絶句する。

「ここは俺たちの世界とは違うんだ。ちよつと現実感のある夢、ゲームみたいなもんだよ。この世界の人間がどうなろうと、俺には関係ない。飽きたら帰ればいいだけさ。もっとも、せっかく魔法が使えるんだ、当分帰るつもりはないけどな。親父はさっさと帰れよ、明日も仕事だろ？」

しゃべっているうちに、父親に対して感じる無意識の恐怖心が吹っ切れたのか、挑発的な笑みさえ浮かべて智浩を見返すようになる。まさか息子にそんな物言いをされるとは思っていなかった智浩は、なにも言い返すことができないでいた。

「コイチ……本当に、本当にそう思っているの？」

かわりに問いかけたのは、ミュールだった。かすかに眉をひそめ、悲しげな目で浩一を見つめている。

「ほ、本当に決まってるだろ」

浩一はそう答えたが、ミュールと目を合わせようとはしない。

「それなら、ちゃんとわたしの目を見て答えて」

ミュールがそういつても、浩一は外壁に群がっているアーロを見るふりをして、ミュールを正視しなかった。

智浩はその様子を見て、口でああはいっても、浩一はミュールや街の住民に対して後ろめたさのようなものを感じているのだ、と思った。

きつと、あの魔女にうまいことされて、裏切らざるを得ない状況にさせられたのではないだろうか。このままミュールに任せておけば、浩一を改心させられるかもしれない。

そんな智浩の思惑と、場にながれる神秘的な空気をうち破ったのは、ややおいてけぼりにされていた魔女シトラだった。

「ちょっと、コムスメ！ あたしのコーちゃんをいじめてんじやないわよ！」

「こっ、小娘ですって？」

その言葉に、それまで神妙にしていたミュールは驚くほどあっさりとは挑発に乗ってしまった。

ミュールがいいかえすと、シトラはここぞとばかりにいつの。「コムスメでしょーが。なあに、コーちゃんをあたしにとられたくせに、まだ誘惑しようっていうの？ その短いスカートだって、コーちゃんにいわれてそうしたくせに！」

シトラがそういい、智浩が思わずミュールの腰に目をやる。途端にミュールは赤くなつて膝上丈のスカートの裾を押さえてしまう。

「こっ、これは、確かにコーイチにこのほうがかわいいっていわれたんだけど　じゃなくて、違うの！ このほうが動きやすいからこうしてるのであつて、別にそんなのじゃ」

聞かれてもいないのに、あわあわとそんな弁解をする。

「ふん、あんたみたいなのがいくらがんばったってムダムダ。女の魅力はやっぱりここよ。ねー、コーちゃん？」

勝ち誇るシトラは、そういいながら両手で自分の乳房をこれ見よがしに持ち上げてみせる。

浩一は無言だったが、思春期の男の悲しい性か、視線はがつつりとシトラの手の中で柔らかく形を変えるそこに固定されていた。

それを回答と受け取って、シトラは満足げにほほえむ。

「うふふ。あんたみたいにちっちゃなおっぱいじゃ、特殊な趣味の男しか捕まえないんじゃない？」

「そ、そこまでちっちゃくないわよ！」

「あらそうなの？ここからじゃぜんぜんふくらんでるように見えないのよねえ、ごめんなさーい」

「なによ、もう老眼はじまつてるんじゃないの、おばさん！」

「なっ、二十八で老眼がはじまるわけないでしょ」

「ふんだ、十代からみれば二十八も五十八も大差ないわよ」

「なんですって、このガキ！」

「なによ、おばさん！」

いつの間にか、智浩と浩一はそっちのけで、みにくいもののしりあいが展開されていた。

世界を救うだの、人々を混乱させている魔女だの、スケールの大きい話をさんざん聞かされ、いまでもこうして怪物が門を突破しようとしているわりに、ずいぶんと緊張感のないものだ。智浩はあっけにとられて言い争いを続けるふたりを見ていた。

まわりを見ると、男たちも弓矢や石を落とす手を休めて、「またか」といった表情で見物している。

アーロたちだけが、変わらず勤勉に門への体当たりを繰り返していた。

ふたりは次第にヒートアップの度合いを強めていくものの、罵倒する材料はだんだん乏しくなっていくので、しまいには「ちんちくりん」だの「ホルスタイン」だの、勢いだけで程度は低いやりあいになり下がっていった。

結局、見るに耐えなくなった智浩がミュールの肩をたたいた。

「なによ？」

すっかり頭に血が上ったミュールは、智浩に対しても噛みつかんばかりだ。

「すまんが、君に任せているといつまでも話が進まない」

智浩に落ち着いた声でいわれ、ミュールはようやく我に返った。

「あ、ご、ごめんなさい！」

あわてて頭を下げると、すっかり朱に染まった頬を手で隠しながら一歩下がった。

「ふん、もう終わり？ だらしないこと」

そういうシトラも、肩で息をしている。

浩一はといえば、輿に取り付けられている背もたれによりかかって、すっかり傍観者きどりだ。

「さて、シトラくんといったな。私は早乙女智浩。君の隣にいる男

の父親だ」

「あら、おとうさまでしたの？んもう、コーちゃんったらすぐにいってくれればいいのに」

「……いった気がするけど」

肩をいからせ、目をむいてミュールをにらみつけていたシトラは、智浩が挨拶したとたんしなをつくつてみせ、それから浩一の頬をつittた。

「私は、彼女にこの世界の魔女を退治するように依頼された」

智浩がミュールを横目で見ながらいうと、シトラの様子がすこし変わった。紅く輝く瞳を細めて、智浩の姿をなめるように観察する。「だが、私はまだここへ来たばかりで、状況をしっかりと把握できていない。そんななかで君を一方的に退治するのは抵抗がある。よかつたら、なぜ君がこんなことをしているのか、君の言い分を聞かせてほしい」

「あら」

「ちょ、ちよつと、おじさん？」

智浩の言葉にあわてたのはミュールだ。

「どうしてそんなこと……協力してくれるんじゃないの？」

「もちろん、そのつもりだ」

問いただされても、智浩は平然としている。

「だが、私がここについて知っていることはほぼすべて、君から聞いたことだけだ。そんな一方的な知識だけで相手をやつつけるなんて危険なことではない。双方の言い分を聞いて判断したい。その上で、まずは多くの人を危険にさらしている街の封鎖を解除させること。それから、君のいっていた、あー、名前は忘れたがなんとか王国と契約をしてもらう。これができれば、君の要求は達成したことになるだろう？」

「それはそうだけど……」

「それなら、なにも力づくで退治なんてしなくとも、まずは話し合いをするべきだろう。子供のケンカじゃないんだから」

智浩はまったくもってまじめな顔でそう言い放った。

「そ、それで解決できるならそもそも」

「あつははは！」

ミユールの言葉を、甲高い笑い声がさえぎった。

魔女シトラが、口に右手を当てて高笑いしたのだ。

「さすが、大人のひとは違うわねえ。ちゃんとこちらの話も聞いてくれるんだ」

笑い終わると、今度は智浩にむかつて挑発的な流し目を送った。

「コーちゃんのおとうさまだけあって、ルックスは悪くないし、中年にしてはおなかもでてないわね。けっこういい線いつてるかも」

露骨に値踏みされて、智浩はかすかに顔をしかめた。

「そんなことはいい。とにかく君の話を」

「でも、ざあんねん。あたし、年上はシュミじゃないの」

シトラはそういいはなつと、笑みを引っこめて智浩に攻撃的な目つきをむけた。

「なぜこんなことをしているかって？ 楽しいからに決まってるじゃない！ あたしはね、力のないザコを踏みじるのが好きなの。でもそれって当然の権利でしょ？ あたしには力があるんだから！」

シトラが右手を振りあげると、門に群がっていたアー口たちが一斉に咆哮をあげた。門の上にいる智浩たちにまで振動が伝わってくる。何人かの男がその迫力に身をすくませた。

「あたしの能力で、凶暴な怪物だってごらんのとおり。こいつらを使えば、無力な人間どもはどいつもこいつも尻を向けて逃げまどうのよ。こんな爽快な絵面はないわ！ こんな楽しいこと、やめられるわけないじゃないの！」

いいたいことをいってしまうと、シトラはまた右手で合図をした。それにあわせて、アー口たちが門への体当たりを再開する。

「ほらほら、悠長なことをいってると、門を壊されて全員食べられ

「ちゃうわよ！」

「だからいったじゃない。魔女に話し合いなんて通用しないの。自分の力におぼれて、呑みこまれてしまった連中なんだから」

「むっ……」

ミユールに非難の目をむけられて、智浩はうなった。

「浩一、おまえはどうなんだ。さっきいつていたことは本心なのか？」

そこで、矛先を自分の息子へと変更する。

「そ、そうに決まってるだろ」

浩一はそう答えたものの、先ほどにくらべるとやや齒切れが悪い。「本当にか？おまえのせいで、誰かが死んでしまつかもしれないのに？」

「う……」

浩一は口ごもった。一度は振り払った父親の圧力にふたたび捕まってしまう。

首筋がじつとりと汗ばんでくる。まだまだ父親に対して、根拠のない恐怖心を抱く年頃なのだ。

「ちよつと、コーちゃんをいじめないでよ！」

そこへ、シトラが割り込んできた。一度はなしていた身体をまたくつつけ、浩一の左肩に胸を押しつけるようにする。

そのとき、浩一の表情がかすかにゆるんだのを智浩は見逃さなかった。

「まさかおまえ、女の色香に目がくらんで」

「ち、違う！」

否定の声が、あたりにひびいた。

強すぎる音量にはあせりの色があまりに濃くて、智浩はため息をついてしまう。

「まあおまえも年頃だから、女性に興味を抱くのが悪いとはいわんが」

「違っつていつてるだろ！」

決まり悪さを押し隠そうと、浩一は輿の上で立ち上がり、シトラから身体をはなした。

「お、俺だって力を得たんだ。それも、この世界の人間じゃ誰もかなわないような、すごい力だ！ 親父もそんなふうにエラそうにしてると、俺の魔法で大けがするぜ！」

浩一は大げさに腕を振って強がっている。智浩は瞳だけ動かしてミュールをみた。

「大丈夫」

ミュールは小さくそういつて、うなずいてみせた。

「そうか」智浩はできるだけ背筋を伸ばし、父親の威厳を損ねないようにしながら、いった。「なら、やってみせろ」

「え？ やってみせろって……」

予想外の父の返答に、浩一は戸惑う。

「そこまでいうなら、魔法のひとつも使ってみせろといったんだ」

「本気か？ まともにくらえば、けがどころか死んじまうかもしれないんだぜ」

「この世界の人間を傷つけるのはいとわなのに、父親を攻撃するのは気が引けるのか？」

「そ、そういうわけじゃ……」

浩一はなおも強がってみせようとするが、明らかに腰が引けていた。

この世界の人間がどうなっても自分の世界に帰れば浩一の視界には残らないが、父親であれば 同じ世界の人間であればそうはいかないのだ。

躊躇する浩一に、またしてもシトラが絡みついてきた。

「いいじゃん、やってやんなよ！」

「でも、シトラ。親父が怪我したり、死んじやつたりしたらさすがにまずいよ」

不安な表情を見せる浩一に、シトラは明るい笑顔で答えた。

「平気よ。この世界で死んだ異世界人は、元の世界に強制送還され

るだけだもの」

「え、そうなの？」

「そうよ、だから気にせず、おもいつき叩きのめしてやっちゃって！」

（なんちゃって、嘘だけど）

屈託のない様子で浩一に笑いかけながら、魔女シトラは心の中で舌を出した。

（ていうか、異世界人同士で戦った歴史なんてほとんど残ってないから、どうなるかなんて誰も知らないんだけど。まあ、コーちゃんは単純だからそこまで考えないでしょ。それに、コーちゃんを元の世界に帰してあげるつもりもないしい……）

思惑通り、シトラの言葉で強気を取り戻していく浩一の横顔を眺めながら、その笑みが自然といやしさを含んだものになっていく。
（あたし好みの年下で、しかも異世界人。こないない物件、あつさり手放すわけじゃないじゃない。魔女を退治する力を秘めた異世界人と手を組めば、怖いものなし。世界最強のカップルってわけ！）

「ようし、覚悟しろよ、クソ親父」

浩一はすっかり調子を取り戻し、智浩にむかってこれまで口にしたことのない暴言を吐いた。

「この俺が、あんたを元の家に送り返してやるから、感謝しろ！」

高らかにそう宣言すると、精神を集中し、呪文を唱え始めた。

「em, avia, du i……」

言葉のひとつひとつに呼応するように、浩一のまわりに光が集まり、やがて彼の周囲にみつつの火球が浮かび上がった。ひとつひとつがどれもひとの顔ほどの大きさをしている。

「pier！」

浩一が最後の言葉を発すると、それらは同時に形を変え、細長い矢のようになった。

「行けーっ！」

気合いのこもった号令とともに、三本の炎の矢が立て続けに門の

上の智浩めがけて飛来する！

智浩のまわりにいる男たちは、それを見て口々に悲鳴を上げながら身を伏せた。だが、智浩とミュールはなんの反応もせず、そのまの姿勢でそこに立っている。

いよいよ矢が智浩を直撃する、と思われたそのとき。

智浩の眼前に突如白い膜のような何かが出現し、矢をすべてはじいてしまった。指向性を失った炎は空中でむなしく四散する。

白い膜もそれとともに見えなくなった。

「防御魔法！」「なっ、親父、仕込んでたのかよ！」

シトラと浩一が、そろって驚きの声を上げる。

「戦いになる可能性があるなら、準備をしておくのは当然のことだ」
智浩は平然とそういった。

シトラの言葉どおり、白い膜は魔法をはじくことができる防御用の魔法で、リーニヤの食堂からここへ来るまでに智浩がミュールから方法を教わって、事前にかけておいたものだった。相手の魔法に反応して発動するようにしてあったのだ。

浩一と智浩の魔法を両方見ているミュールは、智浩の力なら浩一の魔法を防ぐことは十分に可能だという自信があつたが、智浩からすればぶつつけ本番である。

平然を装ってはいても、握りこぶしにした両手の中は汗でびっしりなのだった。

一方、魔法を防がれた方のふたり組のうち、ひそかに冷や汗をかいているのは魔女シトラである。

（ここへくるまでに時間がかかったのは魔法を教えていたせいか。それはいいとして、あの威力！ むこうが見えないほどはつきりとした防御壁だったわ。しかも、事前にかけておいたものなら時間とともに威力は弱まっていくはずなのに……）

「それで挑発してやがったのか、きたねーぞ！」

魔力はあっても知識は乏しい浩一は、父親のもつ魔力の大きさに考えがいたっていない。ただ予想外の方法で攻撃を防がれたことだ

けに憤慨していた。

（たとえばあたしがコーちゃんに同じ魔法を教えたとして、あそこまでの威力が出せるかしら……）

浩一の魔力は過去に魔女退治をおこなった異世界人とくらべても遜色なく、むしろ抜きんできているといえた。もちろんこの世界のなかでは反則級といっていいレベルだ。ミユールのもとで強力な魔法を覚えていけば、伝説どおりに魔女を倒す存在になり得ただろう。だからこそシトラは浩一を籠絡したのだ。もちろん、好みの問題もあったが。

（まさかあのコムスメ、二回連続で当たりを引いたっていうの？）
しかも、今度は大当たりかもしれない。

（これは、ちょっとマズイかも）

冷たい汗がひと筋、胸の谷間をつたって落ちた。

「へん、一回防いだくらいで調子に乗るなよ」

浩一はといえばそんなシトラの様子には全く気づかず、相変わらぬ勢いの良さだった。

「俺の魔法をくらい続けて、どれだけ耐えられるか」

「コーちゃん、まって」

なおも智浩にむけて魔法を繰り出そうとするが、そこにシトラがストップをかける。

「なんだよ、シトラ」

「方針を変えるわ。コーちゃんは魔法で門を壊して。アーロを突入させるから」

（四の五のいつていられない。あいつが強力な魔法をいくつも覚える前に、確実にご退場願わなくっちゃ）

相手はこの世界に来たばかり。まだごく基本的な魔法しか扱えないはずだ。それならアーロをけしかけて、数で圧倒してしまえばなんとでもなる。先ほどの防御魔法はあくまで魔法をはじくだけで、物理的な障害にはならない。シトラには勝算があった。

「ええっ、どうしてさ。いまから俺が」

「いいから」

浩一は不満げに口をとがらせたが、シトラにいつになく強い言葉でいわれると、不承不承うなずいた。

「ちえっ、わかったよ」

かすかに未練の残る目で智浩の方をちらりと見やったあと、正門にむけて意識を集中する。

「em , a v i a , q i a n , a n n u !」

言葉とともに現れた巨大な火の玉　数はひとつきりだが、大きさは先ほどのみつつの火の玉をあわせたほどだ　が一直線に正門へとむかい、アーロたちを飛び越えて門の上方に炸裂した。

「きゃっ」

「おっと」

その上の見張り台はそれまでのアーロの体当たりとはくらべものにならないほど激しく揺れた。ミュールはバランスを崩して転びそうになり、智浩がとつさに腕をつかんで支えてやる。

「大丈夫か？」

「わたしは平気。でも、むこうはアーロを突入させる気みたい。近接戦になったらあの数はさばききれないわ」

「どうすればいい」

「とにかく、門が壊される前にアーロの数を減らすしかないわ。トモヒコの魔法で！」

浩一は一撃で門を破壊できなかったとみるや、すぐに次の魔法を放つため集中をはじめている。さきほどより強力な火球をとばそうとしているのか、集中の時間を長くとっているようだ。

智浩は口中にたまったつばを音を立てて飲み込み、それから眼下のアーロを見据えた。泡立つ心を落ち着けながら、右手をゆつくりと高くあげる。

「一匹ずつねらっているのでは間に合わないわ。意識を広く持つて！　一度でなるべく多くの敵をとらえるの」

「呪文はそのままでもいいのか？」

「大丈夫。精霊たちが術者の意思を感じてくれるから」

「よし わかった」

うなずいて、意識を集中しはじめる。

（たくさんの目標を一度に攻撃しようとするれば、当然威力は減衰するはずだ。それを防ぐには……）

智浩は一瞬だけ、同じように意識を集中している息子をみやった。それから、呪文を唱え始める。

「em , a v i a , d u i ……」

「あっ」

ミュールが声を上げたのは、それがまだ智浩には教えていない魔法だったからだ。

それはつい先ほど浩一が使ってみせた、炎を矢の形にして敵へとばす魔法だった。

ただ火球を投げつけるより、この方が炎を分散しても威力が落ちないはずとにらんで、智浩がとっさにまねをしたのだ。

「pier !」

最後の言葉とともに、炎の精霊たちが智浩の意思を具現化する。

アークにむけて落とすべく、炎の矢が下向きに出現した。

「な、なによ、それ……」

シトラの声が、驚愕のあまりふるえた。

ミュールも、見張り台の男たちも、そればかりか次の魔法のために集中していた浩一さえも、そしてなにより、智浩自身も。

目の前のあまりの光景に呆然としていた。

智浩の魔法は、確かにアーロの頭上に炎の矢を出現させた。しかし尋常でないのは、その数である。

アーロの総数に匹敵するほどの、数十本の炎の矢が、智浩の魔力によって生み出されていたのだ。

しかも、矢の一本一本は先ほど浩一が放った三本の矢と同等の太さを持っている。

アーロたちが見上げれば、炎が空を覆い尽くさんばかりだっただろう。

「し、シトラ、あれ……」

浩一がぼうとしたままつぶやく。

「あつ、た、退却！ 退却しなさい！」

その声で我に返ったシトラが大あわてでアーロに指令を与える。

「トモヒロ！」

それをみてミュールもあせった声で智浩をうながした。智浩が指示を与えなければ、生み出された炎は落ちていかない。

「あ、ああつ」

予想をはるかに超えた状況に呆けていた智浩も自分を取り戻し、急いで右手を振りおろした。

数え切れないほどの炎の矢が、一斉に解き放たれてアーロを穿^つつ。シトラの命令にしたがって後退しようとしていたアーロたちではあったが、門前に密集しすぎていたこともあり、その行動は遅きに失した。

矢はねらいどおりアー口の群れをとらえ、怪物たちの断末魔は門の中で避難していた女たちにも届いたのだった。

「あ……あ……」

シトラは水面に浮かぶ鯉のように口をパクパクと動かしていたが、意味のある言葉を発することはできないでいた。

一瞬ののちに眼前に広がった光景は、彼女にとっては悪夢といつていいものだろう。

正門前は、無数の炎の矢によって大地がえぐられていた。下草が燃えているのか、ところどころで小さい火の手が見える。あちこちで白い煙が上がり、火の粉も舞っている。

そして、直前まで彼女の忠実な手足であったアー口たちは、大多数が折り重なるようにして倒れ伏していた。

完全に息絶えているものは半数ほどだが、息があるものも大半は身動きができない状態、難を逃れたのはほんの数匹ほどだった。

彼女が手塩にかけて育てたモンスター軍団は、智浩の呪文と右手のひと振りによってあっけなく壊滅状態にされてしまったのだった。シトラのかたわらにいる浩一も、彼女に声をかけてやる余裕はなかった。

目を見開き、全く無言のままで、その光景を眺めている。

恐怖はなく、ただ驚きだけ。

それほどに、彼の父が放った魔法は想像を絶していたのだった。

そして、それは智浩たちの陣営にしても同じことだった。

魔法を放った智浩自身が、誰よりも驚いていた。理不尽さを感じていたとさえいえた。

自分の言葉によって炎が生まれ、自分の指示によって目標へむかって飛ぶ。それが夢物語でないことは、先ほど確かめて納得したはずだ。

アー口に包囲された街を救うことを決意したとき、あの怪物を自分の意思で殺す覚悟もしたはずだ。

だが、足りていなかった。

その力と覚悟が、これだけのことを引き起こすのだと、そこまでの意識は彼にはまったくなかったのだ。

だから、先ほど眼前に浮かんだ無数の炎と、いま眼下に累々と並ぶアーロの死体が、本当に自分のしでかしたことなのかという思いが自然と智浩の脳裏に浮かび、そしてなかなか消え去らないのだった。

「なっ、なんてことすんのよお、このバカ！」

シトラが叫んだ。ほとんど泣き声だ。

「ここまでアーロを集めるのに、あたしがどれほど苦労したと思って……ギャクタイよ、動物虐待！」

「な」

シトラのそれは負け惜しみでしかないのだが、智浩はともに受け取ってしまう。ミユールがすこし心配そうに智浩を見上げたが、シトラはその様子には気づかないようで、好きにまくしたてている。「なによなによ、コーちゃんのお父さまだからってやっていいことと悪いことが……ん、なんか焦げ臭いわね？」

「し、シトラ！」

シトラが鼻をひくつかせると同時に、浩一がぱつと立ち上がった。

「燃えてる、燃えてるよ！」

「燃えてるってなにが　ぎゃああああ！」

シトラが振り向くと、燃えているのはなんと自分の着ているドレスの裾だった。シトラは悲鳴を上げた。

絹製の豪華なドレスの裾に火の粉が燃え移り、嫌なにおいを放出しながらちりちりとすこしずつ燃え広がっていたのだ。

「ぬ、脱いで、脱いで！」

「こんなところで脱げるわけないでしょ！　なんとかしてよ！」

異世界からきた強力な魔法使いと世界を混乱に陥れる魔女のふたり組は、輿の上でわめきながらばたばたと駆け回ったあと、結局最後は浩一がはいっていたサンダルで裾をたたいて消し止めた。

その滑稽さに見張り台の上にあった男たちからは失笑が漏れる。

浩一はサンダルを履きなおしながら、「こういうときって、魔法を使う余裕なんてないよね……」としみじみいった。

シトラは台無しになったドレスの裾をしばらく眺めていたが、最後は見張り台をきつとにらみかえすと、心底悔しそうに地団太を踏む。

「あ、あたしに恥をかかせて、覚えてなさいよ！この、この……」
歯ぎしりが聞こえんばかりに歯を食いしばってしばらくそうしていた魔女シトラだったが、

「う、うわーん！」

結局いい捨てぜりふが思いつかなかったのか、最後は泣きながら自分たちの乗っている亀の怪物を回れ右させると、そこから走り去っていった。生き残ったわずかばかりのアーロたちが後を追っていく。

「意外と早いよね、あの亀」

ミュールの言葉どおり、亀の怪物はアーロを引き離すほどのスピードで、あっという間に見えなくなったのだった。

魔女シトラと浩一、そして付き従う何匹かのアーロの姿がすっかり見えなくなってしまうと、見張り台は歓声につつまれた。

ひと月以上にわたって続いた街の封鎖がついに解かれたのである。

「いやーっ、やったなー！」

男たちのひとりが智浩に近づくと、その背中を豪快にたたいた。

それを合図にするかのように、ほかの男たちも口々に智浩をたたえながら、肩をたたき、握手を求めていく。

「すごい魔法だったな！」

「あんたは街の救世主だ、ありがとうよ」

この街に入ってからずっと、ミュールとリーニヤをのぞいた街の住民はみな一定の警戒心を持って智浩から距離を置いていたが、ようやくその垣根が取り払われたのだった。

智浩はまだ自分の引き起こしたことへのショックを引きずっていたのだが、男たちはそんなことはお構いなしだ。それまでと打って変わって全員が心からの笑顔を浮かべていた。

「よしっ、女たちを呼んでくるぞ」

「おお、祝宴だな！」

「やつと腹一杯食べるなあ……」

そして男たちは満面の笑顔のまま、階段を駆け降りていった。

その場には智浩とミュールが残される。

「お疲れさま」

ミュールが右手を出し、握手を求めた。

「ああ」

智浩もそれに答えたが、やはり声にも、あわせた右手にもどことなく覇気がない。

「すごい力、だったね」

眼下からはまだ、白い煙が数本上がっている。ミュールは見張り台の石壁の縁に手をおき、静かにそういった。

「あれは本当に私の力だったのか？」

「紛れもなく、あなたの力よ」

静かに、しかしはつきりとそう告げる。

「わたしが今まで見たなかでは、間違いなく一番……文献や伝説に残されているものを含めても、あなたの力はきつとトップクラスの強大なものだわ」

「大きすぎる」智浩は正直にいう。「私には扱いきる自信がない」

「おそれなくても大丈夫」

ミュールは顔を上げ、智浩に励ますような笑顔を向けた。

「あなたの力だもの。ちゃんと制御できるようになるわ。そのためにも、わたしがこれから魔法を使うための知識をしつかり教えてあげるから」

「そうだな、だが……」

智浩は眼下を見やった。そこには数十体の怪物がいまなお横たわ

っている。

その傷口は炎によって焼かれているため、出血はめだっていない。そのため、知らずに遠くから見ただけではそれが死体だとは思わないかもしれない。

だがその実、彼らのほとんどはすでに死に、まだ息があるものも確実に死にむかっている。

そうしむけたのは智浩であることに間違いないのだ。

「シトラのいったこと、気にしているの？」

智浩は答えなかったが、固さを増した表情が物語っていた。

「あんなの、気にしなくていいわよ。アークは野生でも、人や家畜、畑をおそう害獣だもの。群れが見つかったらすぐに軍隊が退治にくくらないのよ」

「そうなのか」

「そうよ。まあ、すぐに割り切るのは難しいかもしれないけど」

「いや……確かにそうだな」

智浩は自分の右手に視線を落とした。きれいなままのその手を、ぎゅっと強く握る。

「一匹を殺す覚悟をしておいて、十匹を殺す覚悟ができていないというのは、おかしい話だ」

「えーっと……あんまり思い詰めないでね？」

ミユールはすこし心配だった。とはいえ、これは自分で解決するほかない問題だ。自分よりずっと年上のトモヒロなら、きつとうまく折り合いをつけてくれるだろう。そう考えるしかなかった。

いつの間にか太陽は西にかたむき、空の色が赤く染まりはじめている。

「もうこんな時間か」

つい日常の感覚でそうつぶやいてから、智浩はここが異世界であることを思い出す。

だが空の茜の色は、元いた世界となら代わりのないものだった。

「この世界の夕焼けは、きれい？」

隣に並んでいるミユールがそうたずねる。

「ああ」

ややあつて、智浩はそう答えた。

「コーイチも、ここで夕焼けをみたのよ」

不意に息子の名前を出されて、智浩はミユールをみた。

「きれいだって、いつてくれたの」

ミユールは空のむこうへと視線を馳せている。智浩からすれば少女でしかない彼女が、このときばかりはやけに女の気配をさせているように感じられた。夕日の赤い光が、彼女を大人びて見せているのだろうか。

「だからね、きつと大丈夫」

ミユールが勢いをつけて身体ごと向きを変えた。改めて正面から見れば、一瞬感じた女らしさは消えて、最初と同じ快活な印象の少女がそこに立っている。

「コーイチは、シトラにいいように言い含められて、たぶん事態をよくわかってないまま協力しているんだと思うの。おじさんが説得すれば、きつと改心してくれるわ」

「たとえそうだとしても、多くの人に迷惑をかけ、拳げ句の果てに父親にむかつて炎を投げつけてきたことには変わらない。親として一度きつく灸を据えてやらねば」

「ふふ」

「……笑うところか？」

「あ、ごめんなさい。なんだかコーイチがうらやましいなって。わたしのお父さんは、もう死んじやっているから」

「それは」

智浩はいいかけた言葉を飲み込んだ。

ミユールはおだやかに笑っている。笑って話せるくらいには昔の出来事なのだろう。だが一方でその笑顔は、それ以上踏み込んでほしくはないという意思表示にも感じられた。

四十六年生きていても、こんなときなんといえればいいか、なかなか妙案は思いつかないものだ。

智浩が迷っていると、背中越しに金属がきしむ音が盛大に聞こえてきた。

内心ほつとしながら振り返ると、正門がゆっくりと開いていくところだった。そこから住民がわらわらと飛び出していく。

「どうしたんだ？」

「祝宴よ。さつきいつていたじゃない」

不思議そうに眺める智浩に、ミユールが答える。

「あそこでやるのか？」

魔女シトラという脅威が去ったとはいえ、そこは街の外側だ。まして、数十体のアークの死骸が横たわっているのだ。

だが、ミユールは当然、といった様子でうなずいた。

「いちいち運びこむのは面倒でしょ」

「運び込む？」

「いいから、わたしたちも行きましょう」

空はすっかり日が落ち、電灯のないリボーテの街の中は暗い。

そうはいつても雲はなく、砂を蒔いたかのような星々が照らしているため一歩先も見えない漆黒というほどではないが、すでに深夜であるかのように街はひっそりと静まりかえっていた。

だが、眠っているものはひとりもない。

住民たちはみな、正門の外に集っているのだ。

そこはいま、まさしくお祭り騒ぎとなっていた。

ついさきほど、ふたりの魔法使いによる炎がとびかっていたその場所で、いくつもの火がたかれ、そのどれもに人々が集まっている。ある場所では串に刺された肉があぶり焼きにされ、ある場所では大きな鍋がつるされて、そのなかではやはり大きな肉の塊がゆでられている。

魔女シトラによってひと月以上にわたって街を封鎖されていた住民たちにとって、新鮮な肉を口にするのは本当に久しぶりだった。

もちろん、材料となっているのは。

「まさか、これを食べるとは……」

智浩が手にしている大皿には巨大なもも肉が骨付きのまま鎮座し、食欲をそそる香りを立ち上げながら食べられるのを待っていた。

確かに空腹ではあるのだが、智浩はなかなかその肉に手を伸ばせないでいる。

なにしろそれはさっきまでそこで倒れていたアーロのもも肉なのだ。

「食べなよ、おじさん。大丈夫だよ、おいしいから」

となりでミュールがそういつている。いいながらも彼女は自分のぶんにかぶりつき、口の周りを脂でべとべとにさせながら、もぐもぐと口をせわしなく動かした。

「あー、久しぶりのお肉！ しあわせ……」

なんの憂いもない、心からの喜びだった。

「あんたたちの世界じゃ、こういうのは食べないのかい？」

すこし遠くから声が聞こえて目を向けると、リーニヤがこちらにむかってくる場所だった。

食堂の女主人ということもあり、先ほどまでは包丁をふるって一口をひたすらさばいていたのだが、ようやくそれが一段落したのだろう。手にはやはり、調理済みの肉が入った椀を持っている。

「食べないというか、こんな生物はそもそもいないからな」

「ふうん」

リーニヤはミュールとは反対側の智浩の隣に腰を下ろした。

「まあ、うちらも普段はあまり食べないけれどね。ただこいつらのせいで長いこと外にでられなかっただろ？ リポーターにはもともと家畜はあまりいなかったから、肉はすぐになくなっちまったのさ。

昼間にあんたに出した豆のスープには干し肉を入れたけど、あれは秘蔵中の秘蔵だったんだよ？」

「そうだったのか」

ほんのすこし意地悪さを含んだリーニヤの物言いに、智浩は急に申し訳ない気持ちがあがってきた。

肉入りのスープは、つまりミュールとリーニヤからしたら最大級の歓待だったのだろう。だが事情が飲み込めていなかった智浩はそこまで考えることができなかった。そもそも、あのスープ自体半分ほどしか食べていなかった。

「なんだか、悪いことをしたな」

智浩がわびると、リーニヤはすぐに笑顔に戻った。

「気にすることないさ。あんたのおかげで、こうしてみんなが食事にありつけたんだからね。それより、あんたもお食べよ。調味料はあいかわらず塩しかないけれど、新鮮だから臭みもなくてうまいよ！」

「ああ……」

リーニヤがさかんにアーロの肉をすすめてくる。ミュールなどは本当に幸せそうに食べているのだし、意趣返しということでもなくて、本心から食べてもらいたいと思っっているのだろう。

智浩からすれば、アーロはこの世界へ来るなりおそわれて、あやうく自分が食われそうになった怪物だ。それを食べるというのはなんだかとても背徳的な行為であるように思われて仕方なかった。

だが、周りの住民たちはそんなことを全く気にしていない。長らく飢えていたこともあるのだろうが、食べられる物を食べるというのはこの世界ではきつと当たり前のことなのだ。

智浩はなんとかそう自分を説得して、頭の中のグロテスクなアーロのイメージを脇に追いやった。

もも肉の骨の部分をつかんで持ち上げる。何しろ自分よりも大きなアーロの太ももの部分だから、チキンのもも肉などとは比べものにならない大きさである。

いざ口に運ぼうとしてふと気づくと、リーニヤばかりではなくミュールも、さらにはまわりで好き勝手に騒いでいたはずの住民たちも、いつのまにか智浩を注視していた。

ただ肉を食べるだけなのに、なんだか引くに引けないプレッシャーを感じてしまう。

智浩は覚悟を決めて、もも肉に豪快にかぶりついた。周囲からおっ、とちいさなどよめきがあがった。

肉をかみきり、口の中で咀嚼する。しばし、無言。

やがてのどぼとけが動き、智浩が肉を嚥下したことを示した。

肉を胃に収めた智浩は、すこしばかり驚いたような表情を周囲に見せながら、いった。

「うまいな」

それとともに周囲からは安堵にも似た、さきほどよりも大きななどよめきが生まれ、リーニヤをはじめ何人かは笑顔になって智浩の肩をたたいた。

「鶏肉みたいだな、身も白いし」

外はこんがりと焼かれているので茶色くなっているが、ひとくちかじつてのぞく部分は智浩のいうとおり白色をしている。

味も鶏に似て淡泊だが、思っていたよりもずっと食べやすい味だったことに安心した智浩は、さらにひとくち、ふたくちとかぶりついた。

その様子を見て、周囲を取り巻いていた人たちもまた元のように騒ぎ始めるのだった。

住民たちの注目から解放された智浩は、ふと空を見上げる。

この一角をのぞけばまったくいいほど光のないここでは、星空は都会の比ではない。

智浩が幼い頃みたプラネタリウムよりもずっと多い星々がめいっぱいに瞬いていた。

無言で空をみている智浩に気づき、ミュールは食事の手を止めた。

「帰りたいって、思ってるの？」

「帰れるのならばな」

智浩にそう返されて、下を向いてしまう。

智浩はそんなミュールの肩を軽くたたいて、笑顔をむけた。

「だが、どのみちすぐには帰れんのだろう？ それなら早く用件を終わらせて、仕事を忘れてしまわないうちに帰るまでだ。浩一も一度きつくしかったあとで、連れ戻さなければならぬしな」

「おじさん……」

「そんな顔をするな。私はやるときめたらちゃんとやるぞ。浩一のせいで、父親の私もいまいち信用されていないかもしれないが」

「そ、そんなことないよ」

ミュールはあわてて首を振ると、智浩に右手を差し出した。

「これからよろしく、トモヒロ」

「ああ」

星空の下、約束の握手を交わす。

「……べたべたしてるな」

「食事中だったからね」

互いにアーロの肉の脂をたっぷりつけた右手を見たあと、苦笑しあうのだった。

正門のうえに設置された見張り台には、交代制で昼夜を問わず見張り番がいることになっている。

だが、さすがにこのときばかりはすべての住民が眼下の宴に出払い、誰も立っていないかった。

かがり火だけが焚かれた、無人のはずのその場所に、ひとりの少女が立っている。

肩の先まで伸ばした金髪と、レースをふんだんにあしらった黒のドレス。動かずじっとしていれば、人形なのではないかと錯覚するほどにととのった顔立ちを持った少女。

だが、その瞳は宝石のように紅い^{あか}。

少女は、魔女パスクミュルであった。

「うふふ……」

彼女の存在に気づくものはいなかった。もちろん、その視線がどこにむけられているのかも。

視線の先では、智浩が楽しげに食事をしている。

その隣にはやはり楽しそうに笑うミュールがいて、ふたりを囲むようにして街の住民たちが輪をつくっていた。

その様子を、パスクミュルはほほえみをたたえて見つめている。

智浩も、いまは少女に気づかない。

たとえ何かの拍子に見張り台に目をやったとしても、誰も気づくことはないのだ。

「うっふふふ……」

パスクミュルは目を細めて笑った。

そして、煙が立つようにしてそこから消えてしまった。

紅いかがやきの名残をその場に残して。

オーバーエイジ・ブレイブヒーロー 第一章 おわり

第二章へつづく

(11) (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

どうしてか昨日の更新分、(10)とするところが(11)になっていました。戸惑った方もいるかもしれませんが、ただのケアレスミスです。すみません。

さて、これで第一章は終わりです。内容的には序章といってもいいくらいかもしれませんが。

しかし、構想を考えたときにすでに分かっていたことではあるのですが、これ、誰向けの小説なんだろう？

このサイトに多くいそうな学生の人たちが読んだらどう思うのだろう。智浩に感情移入……はしないよな、たぶん。

聞いてみたいけど、自分のまわりに意見を聞かせてくれる知り合いの学生はいないので、誰か教えてください。

ちなみに、書いている自分は大変楽しいです。お気に入り登録してくださいっている方もいるので、自分と感性が近い人もきっと違うに違いない、と勝手に考えてこの先も書いていこうと思います。

少し書き溜めをしようと思ってますので、続きの更新はしばらく時間をいただくことになると思います。

ご意見ご感想などありましたら、ぜひお聞かせください。

(1)

智浩がこの世界へときて二日が過ぎ、三日目の朝をむかえた。

「くあつ……」

伸びをしながらベッドから抜け出す。暗い足下に注意しながら窓際まで行き、窓を覆っている木の板を上げる。朝の太陽の光がさしこみ、室内が一気に明るくなった。

同時にさわやかな風も入ってくるが、少々ひんやりとしている。

智浩は身体をぶるりとふるわせると着替えをはじめた。

寝間着としてきていた服も、これから着る服も、智浩がこの世界にきたときに身につけていた衣服ではない。それだと目立って仕方がないので、住民から服をゆずりうけたのだった。街の救世主となつた智浩に衣服を提供したいという申し出は数多く、しかしそんなにたくさんもらっても仕方がないので受け取つたのはひと揃いだけである。しかし、彼ら住民のもちものとしてはかなり上等な服を提供されたのだということは智浩にも理解できた。

なめらかな毛織りの肌着の上に、こちらはややごわごわとした手触りだが、頑丈で動きやすいつくりのズボンをはいて、腰ひもを締める。そして胸元がV字に開いたシャツを着るのだが、これは胴回りがかなりゆつたりしたもので、その上からベルトでまた締める。丈も太ももにかかるあたりまでであるため、ワンピースのスカートをはいているようで、智浩はすこし落ち着かない気持ちになる。

さらにしっかりと編み込まれたサンダルをはけば、着替えは完了だ。

身体を回しながらおかしなところはないか確認する。鏡がないので、限界はあるのだが。

(なにしろ昨日はずいぶんと恥をかかされたからな)

智浩がこの服を最初に着たときの失態を思いだしていると、入り口のドアがノックされた。

「おじさん、起きてる？」

ミユールの声だった。

「ああ」

智浩が返事をするとき少しだけドアが開き、足が差しこまれた。両手にもものを持ったミユールが、足と肩でドアを開けながら中に入ってくる。

「行儀が悪いな」

智浩が苦言を呈すると、ミユールはふくれた。

「手がふさがってるんだもん、しょうがないじゃない」

「入る前にそういえば、私が開ける」

「……なるほど」

ミユールが持ってきたのは水の入った桶だった。

「はい、顔を洗ってね」

智浩はミユールに礼を言ってから、両手を水の中に差し入れる。風も冷たいが、水も冷たい。ここリボーテはそこそこ標高が高いらしく、朝晩は冷えこむのだ。

「歯は磨く？」

「……ああ」

次にミユールが渡してくれたのは、少量の塩が入った包みと木の枝だった。

「まあ、しないよりはましだろう」

智浩は木の枝を桶の水で洗うと、塩をつけ、口に差し込んだ。

この世界には智浩が普段使っていたような、毛先の形状にこだわった歯ブラシは当然ないし、歯磨き粉なんてものもない。さきっぱの繊維がほぐれていくらかブラシっぽくなった木の枝と塩で歯を磨くのだ。

昨日はじめて渡されたときはバカにされているのかと思ったが、ミユールもリーニヤも、実際これで歯を磨いていた。ほかの手段としては指に塩をつけてこするか、なにもしないかだ。

奥歯までまんべんなく木の枝でこすり、口をゆすぐ。すっきりと

もさっぱりともしないが、無い物ねだりをしてもし方がない。

本当ならひげも剃りたいのだが、もちろん安全カミソリもシェービングクリームもここにはない。昨日、念のために町の住民はどうしているのかとたずねたら、ある程度のばしてからはさみで整えるか、剃りたいひとはとなりの街までいって理髪師に頼むのだという。もちろん、簡単に行き帰りができる距離ではないので、何かの用事のついでということになるが。

「この街には理髪師がいないのよ。どうしてもっていうならわたしはやってあげようか？ 自信ないけど」

ミユールの申し出は丁重に断った。会社人としては毎日剃りたいがこれも仕方がないだろう。

「それにしても、ずいぶんかいがいしく面倒を見てくれるが、君はこの従業員というわけじゃないのだろうか？」

智浩が昨日今日と夜を明かしたこの部屋は、リーニヤの食堂の二階だった。もともと宿屋も兼業しているのだという。

じつはミユールもこの宿の別の部屋に泊まっているのだ。彼女はもともとこの街の出身だが、すでに家族はおらず、召喚師になる修行のために街をでた際に家を引き払ってしまったため、もうこの街に彼女の家はないのだという。

「もちろん違うわよ。私だって一応お客さんなんだから。とはいっても、おかみさんは私がちいさい頃からよく知っているひとだからあんまりそんな感じでもないけど……おじさんの面倒を見るのは、そういう決まりがあるからなの」

「決まり？」

「異世界人を召喚したら、その面倒は原則として召喚師が自分でみるの。無事に元の世界に返してあげられるまでね。ほとんど無理矢理呼びつけて協力してもらう以上、できるかぎり不自由を感じさせることがないようにって、契約書に必ず書かれる条項なのよ」

「契約書、ねえ」

そんなところだけ、みように社会的である。

「さあ、下に行きましょう。おかみさんが朝食を用意してくれているから。詳しい話もそこでするわ」

水桶などをまた両手に抱えてミユールが立ち上がった。そのままドアへむかおうとするが、ふと気がついて智宏をふりかえる。

「今日は服、ちゃんと着られたみたいね」

「おかげさまでな。なにしろ昨日は」

いいかけて、智浩は口をつぐんだ。

昨日試しに着たときは腰帯が上すぎるといわれたのだ。ミユールが苦笑いしながら締めなおしてあげるといい、腰帯をほどいたとき、その下のズボンがずんと落ちてしまった。ひもの締め方がゆるかったのだ。

腰帯を締め直そうとしていたミユールの顔はちょうど智浩の股の高さにあった。

もちろん下着をつけていたから現物をみられたわけではないが、ミユールは赤面して顔を逸らしてしまい、周りにいたリーニヤや住民たちは大笑い。とんだ赤っ恥だった。

ふたりとも思わずその光景を頭に浮かべてしまい、そのときのように赤面した。

「と、とにかくいきましょう」

「あ、ああ」

なんとも微妙な空気のまま、ふたりは部屋をあとにした。

「正式な契約を交わすために、街をでる？」

「そう。ここには契約書を作成できるひとはいないから」

一階の食堂で食事をしながら、ミユールは智浩に今後の予定を語った。

ちなみに、食事ははじめて智浩がここを訪れたときに出されたのとおなじ、塩味のみ豆スープだった。干し肉も入っていない。一口の肉はかなりの量があったはずだが、あの祝宴でほとんど食べ尽くされ、残った分も昨日一日ですべて住民たちの胃袋に消えてい

た。

封鎖が解除されたとはいえ、近くの街まではただ行くだけでも一日がかり。枯渴していた物資が届くにはすくなくともあと一日は必要だった。それまでは我慢を続けなければならない。

とはいえそれもあとすこしのことだ。終わりが見えていれば、我慢もさして苦にはならない。住民たちにもう陰鬱な空気は流れていなかった。

さて、ミユールの説明によると、現段階では智浩がミユールに協力して魔女を退治するという約束はいわば仮契約の段階で、正式な契約を交わすためにはある場所へ行かなければならないという。

その場所とは、ここよりもさらに北の山奥にあるというミユールの師匠が暮らす屋敷とのことだった。

「正式な契約を交わしたら、ペルメリカ王国の首都であるグルエンの街へ行つて、そこで魔女の情報を集めようと思うの」

「シトラはいいのか？ あいつの根城はこのあたりなんだろう？」

「アールをやられて、しばらくはおとなしくしてと思うわ。それよりも、ほかの魔女たちはいまだここにいて、なにをしているのか。

この街に閉じこめられている間、そうした情報はほとんど手には入らなかったから」

そこまでいって、ミユールはふと心配そうに智浩をみた。

「やっぱり、コーイチが気になる？」

シトラを放置するということは、そのそばにいる浩一のこととも後回しにするということになる。

「いや……」すこし考えてから、智浩はいった。「たしかに、ほかの魔女のことは私はなにも知らないし、そのほうがいいのだろうな。どうも浩一は尻に敷かれているように見えたり、魔女のほうがおとなしくしている間はあいつも同じだろう」

「あはは……」

ミユールもふたりの関係を思い返して苦笑した。

「それで、その師匠の屋敷というのはどうやって行くんだ？ さっ

きの話しぶりだと、けっこう距離があるようだが」

「歩いても行けなくはないけど、何日もかかってしまうから、馬を使うわ」

「馬、か……」

智浩はげんなりとした。この世界に来て、馬にはいい思い出がない。

「大丈夫よ。ゲイロンのほかに、馬はいるから」

ミュールも智浩の表情の意味をすぐに察知したようだった。

「街のひとたちが旅支度を整えてくれているから、もうすこししたら厩舎へ行きましょう。おじさんの相棒を紹介してあげる」

食事を終えたふたりが食堂の裏手にある厩舎へ向かうと、数人の男たちが出迎えた。おととい、ミュールへ魔女シトラの襲撃を告げにきた若者アレクのほか、あとき見張り台の上で顔を合わせた覚えのある男もいる。

「やあ勇者さま、お待ちしてましたよ！」

男のひとりがにこやかにそう挨拶してきたので、智浩は困ってしまふ。

「あの、昨日もいったのだが……その呼び方は恥ずかしいのでやめてもらえないだろうか」

「へえ？」

智浩が街に来たときは露骨に警戒していた住民たちは、シトラを撃退したあと態度を一変させた。それは仕方のないことだと智浩も思う。

しかし、祝宴明けの昨日から住民のほとんどが智浩のことを「勇者様」と呼ぶようになってしまったのだ。

どうやら、異世界から来て魔女退治をするものは伝統的にそう呼ばれているらしいのだが、智浩からすれば恥ずかしいことこの上なかった。

そこで昨日から何度も普通に呼んでくれとっているのだが、聞

き入れられた試しはなかった。

「そうはおっしゃいましてねえ。じゃあ、救世主様、にします？
英雄様、とか。でもやっぱり勇者様ってのがいちばん響きがいいんじゃないかと思いますがねえ」

「そういうことではないのだが……」

結局、ここでも智浩の主張は受け入れられることはなかった。

「セランさん、馬の支度はできてますか？」

「おっと、そうだった」

ミュールにうながされて、セランと呼ばれた男はぽんと手を打ち、奥へと引っ込んでいってしまった。

「ひよつとして、私はこれから行く先々であんな風に呼ばれるのか？」

「場合によつてはね。実際ここでは大活躍したんだし、悪い気分じゃないでしょ？」

「うーん……」

たしかに気分を害されるわけではないが、圧倒的に恥ずかしさのほうに勝っているように感じられた。

やがて、セランが戻ってきた。その後ろから二頭の馬がゆつくりついてくる。智浩はこれまで馬の顔を覚えようとしたことはなかったが、大きいほうの馬がゲイロンであることは雰囲気でわかった。

「よう、大活躍だったらしいじゃねえか」

ゲイロンは智浩の前まで来ると、おもしろくもなさそうにそういつた。智浩はそれには答えず、ミュールのほうを見た。

「こいつのほかにも馬はいる、といっていなかったか？」

「ゲイロンにはわたしが乗るの。なんだかんだで、一番乗りなれるからね」

ミュールがいうと、ゲイロンがぶひひひんといかないた。

「ミュールう、俺だっておまえがいちばんだぜえ。でもどうせなら背中じゃなくって腹のほうに乗ってほしいのにさあ」

「だまって。……おじさんが乗るのはこのコ。身体がちいさいし、

ゲイロンみたいに乱暴に走ったりしないから安心よ」

ゲイロンの下ネタをぴしゃりとさえぎったミュールに手招きされて、もう一頭の馬がとこと前にでてきた。ミュールのいうとおり馬にしてはずいぶん身体がちいさく、耳が大きいのでロバのようにも見える。

「名前はポルカよ。ポルカ、この人がトモヒロ。これからしばらく一緒だからね」

ポルカは、その目立つ耳をばたばたさせながら、つぶらな黒い瞳で智浩を見た。それから目を伏せて、人がおじぎをするようにおもむろに頭を下げた。

「よろしく願います、勇者さま」

「あ、ああ……」

ゲイロンを見ているので、ポルカがしゃべったことについてはもう驚くことはなかったが、ゲイロンとは違って礼儀正しい仕草に智浩は少々面食らった。

「ポルカは、ゲイロンのお嫁さんなのよ」

「えっ！」

ミュールがそうだったので、智浩は今度こそ声を上げて驚く。

「へん、馬なんか嫁にしたってうれしくねえや。おっさん、ほしいならあんたにやるよ」

「あんなことをいつているが」

「いまは発情期じゃないからね。発情期がくれば、ちゃんと子づくりするのよ」

「そ、そうなのか」

「俺がほんとに子づくりしたいのはミュールなのによ。春がくるとなんかこう普段と違う感情が沸き上がってきて、雌馬なんぞにムラムラしまうんだよ。ああ、種族の壁がうらめしいぜ。本当なら俺のこのたくましい××でミュールのちいさな」

「ゲイロン」

すっかり暴走をはじめたゲイロンを止めたのは、ポルカの静かな

ひとことだった。

「な、なんだよ」

ポルカはそれ以上何もいわず、ゲイロンを見つめているだけ。
だが、結局ゲイロンは圧力に負けたようにそっぽをむいてしまった。

「あんなこといっても、ゲイロンはポルカに頭が上がないのよ」
ミュールが智浩にそつと耳打ちする。

結局ゲイロンは、ポルカが最後まで何もいわずに目をはなすまで
そうしていた。

やはり、どの種族でも女が強いのは変わらないのである。

(1) (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

さて二章ですが、この章では魔女はあまり（というか、ほとんど）出てきません。智浩とミユールのやり取りがメインです。

もともと独立した章というよりは、幕間的な位置づけにしようか
とっていたのですが……。例によって長くなってしまいましたの
で……。

馬の話とか、書かなきゃいいんですけどね。でも書かずにいられ
ないのです。

飽きられないうちにお話を動かさなくては。

ご意見、ご感想ありましたらぜひお聞かせください。

(2)

ミュールの師匠の屋敷へとむかうのは、智浩とミュールのふたり
ゲイロンとポル力を数に入れるならふたりと二頭である。

「ポル力は乗りやすい馬だけれど、おじさんはまだなれていないし、
いそがず行くからどうしても途中で一度野宿をすることになるけれ
ど、大丈夫かな？」

「まあ、一晩くらいなら何とかなるだろう」

智浩はそう答えたものの、内心は不安もあつた。そもそもインド
ア派の智浩は、キャンプの経験はほとんどない。

ゲイロンとポル力の鞍には旅の荷物もいくらか積まれてはいたが、
大きなものではない。すくなくともテントや寝袋はついていなさそ
うだ。さて、どうやって眠るのだろうか？

ミュールは旅慣れているようなのでまかせておけば大丈夫だろう
が、やはり年長者としてはあまり頼りない姿は見せたくないと思
うのだ。

「あ、そうそう。これを渡しておくわね」

そういつてミュールが智浩にいくつかのものを差し出した。

まっさきに智浩の目についたのは、朱色のさやに収められた短剣
だった。これといって装飾も入っていないシンプルなデザインだが、
さやの大きさから推定すると刃渡り二十センチはありそうだ。

「これを、持ち歩けと？」

さすがに智浩は躊躇した。智浩は結婚前には料理もしていたから、
包丁を握ったことならあるが、包丁を持ち歩いたことはない。

「べつにこれで戦えていうんじゃないから。護身用だと思って。
それに、野宿のときに枯れ枝をちょうどいい大きさの薪にしたりと
か、けっこう役に立つのよ」

そういつて押しつけられるように渡されたが、想像以上にずしり
とした存在感がある。包丁とは比べものにならない。

ミュールにいわれたとおり上衣とベルトの隙間に押し込んだものの、なんとも落ち着かない気分だった。

ほかには、手のひらに乗る大きさの巾着袋に、肩に掛けられるもののついた大きめの袋。

「これはお財布ね。ちよつとしか入ってないけど、基本的にお金の支払いにはわたしがするから心配しないで」

ちいさな巾着袋をのぞいてみると、銀貨と銅貨が数枚ずつ入っていた。

「あと、これはポルカに持たせてもよかったんだけど」

大きな袋に入っていたのは、智浩がこの世界へ着たときに身につけていた服の一式だった。

長旅ではないので、馬の鞍にはまだ余裕がある。しかし、智浩にはミュールがわざわざ気を使ってくれたのだと理解できた。

なにしろ財布も持たずにこの世界へとはばされた智浩にとって、この服が元の世界へのつながりを感じられる唯一の所持品なのだ。

「いや、ありがとう」

「さあ勇者様、こいつを着てください。目的地はここからさらに北ですからね」

ミュールから荷物を受け取ったと思ったら、今度は男たちのひとりが智浩に、毛皮でできた外套、帽子、そしてブーツを持ってきた。「お師匠さまのお屋敷は山奥で結構冷えるから、覚悟しておいてね」

そういうミュールも智浩のものと同じように外套や帽子を身につけている。外套の中は昨日までと同様、巫女服のような独特の上衣にミニスカートだが、よくみれば昨日までさらしていた生脚は白いタイツで隠されていた。

「かなり寒いのか？」

昨日聞いた話では、いまは季節的には夏を過ぎたあたりだという。しかし智浩からしたらこのリボーテの街でさえけっこう寒い。（なので毛皮のブーツを渡されたときは内心ほっとしたのだ。足の指がでる編み込みサンダルは彼にはつらいものがあつた）

「本格的に寒くなれば雪も降るわよ。今の時期ならよほどのことがなければ降らないと思うけど」

「そうか……」

毎日空調のきいた部屋で仕事をしていた智浩は、暑いのも寒いのも得意ではない。わざわざ契約書を作るためだけに、そんなところへわざわざいくのかと思うと、自然と外套のひもを結ぶ手もゆつくりになる。

「あ、でもお師匠さまの屋敷には大きなお風呂があるわよ」

「なに、本当か？」

しかし、ミユールのひとことで智浩の目が輝いた。

なにしろこの街には風呂がなかったのだ。いやあるにはあるのだが、それは智浩からいわせれば風呂と呼べる代物ではなかった。

昨日宿屋のおかみであるリーニヤに風呂に入りたいと訴えたところ、物置から大きな木の桶を引っ張りだしてきた。どうするのかと思ったら、それにお湯を注いでそこにつかれというのだ。しかもかこいもなにもない、食堂の裏の空き地で、である。

どうやらこの街の住民は風呂にはいるという習慣がないのだった。リーニヤに聞いた話では、男は川に行つて水浴びをすることもあるが、基本は身体をしめらせた布で拭くくらいで、お湯につかるのは病気のときだけなのだという。

「身体をつからせるほどお湯を沸かすとなると、費用もバ力にならないしねえ。ああ、もちろんあんたはそんなこと気にせず好きにしたらいいんだよ！」

リーニヤはそう笑い飛ばしたあと、「ごゆつくり」とその場を去つていったが、智浩からすればどこから見られているかもわからない場所でゆつくりできるはずもなかった。

そんな有様だったから、屋敷にちゃんとした風呂があるというのはなによりもうれしい情報だったのだ。

「ちかくの温泉から直接引いてるのよ」

なんと、源泉掛け流しである。

「そうか、それは楽しみだな」

「トモヒロの世界のひとつて、お風呂が大好きなのね。そういえば、コイチもここにいる間、毎日入ってたわ」

「……あの桶にか？」

「そうよ」

身なりが気になり出す年頃とはいえ、あそこで毎日裸で桶につかるのはなかなか根性のいることのように感じられた。

「私にはムリだなあ……」

智浩はほんのすこし、息子を見直したのだった。

「じゃあ、元気でね。魔女退治が片づいたら、元の世界に帰る前に一度はうちへよるんだよ。今度こそ、リーニャおばさんの名物料理を食べさせてあげるからね！」

リーニャのそんな言葉と、多くの住民の激励に見送られて、智浩とミュールはリボーテの街をあとにした。

道を知っているゲイロンとミュールが先行し、そのあとをポルカと智浩がついていく格好だ。

「勇者さま。乗りづらくはありませんか？」

「ああ、大丈夫だ」

ポルカはたびたび首を巡らせては智浩の様子をうかがっている。乗馬初心者智浩が疲れないように気を使ってくれているのだ。智浩は目的地への道のりも知らないが、それもポルカが自分で先行するミュールとゲイロンを追ってくれるので、手綱こそ握ってはいるものの、本当にただ座っているだけでよかった。動物と意志疎通ができるというのは便利なものだと思智浩は感心していた。

「こら、ゲイロン！ 駆け足にしたらうしろがついてこれないですよ！」

「せっかく街の外なんだから、思いつき駆けまわりたいだろ。それにこんなゆつくりじゃいつまでたってもつかないぜえ？」

気がつけばずいぶんと先に行ってしまったているミュールとゲイロ

ンのそんなやりとりが風に乗って聞こえてきた。

結局は性格によるのかもな。

ゲイロン相手では、言葉が通じたところでいうことをきかせるのも苦勞しそうだった。

「ポルカ、もうすこし急いでもいいぞ」

「でも、揺れますよ？」

「だいぶなれたから、すこしくらいなら平気だろう」

智浩がそういうと、ポルカはわかりましたと返事をして、ペースを並足から早足に切り替えた。

彼女の言葉どおり揺れが強くなったが、耐えられないほどではない。ゆりかごのようだ、とまではいかないにしても、先日乗ったゲイロンの背中の上とは雲泥の差だ。

すでにリボーテの街は振り返っても視界に入らなくなり、農地も抜けた。智浩たちの進む、馬車二台がやつとすれちがえるほどの幅しかない道をのぞけば、まったく人の手はいっていない草原が広がるばかりだ。進む道のはるか先には岩山がそびえるのが見え、その裾は森に覆われている。

ポルカがゲイロンたちに追いついたのは、草原が切れ、道が森の中へと続いているのが見えるようになったころだった。

「おせーぞ、こら」

「あんたがはやいのよ、もう。おじさん、身体は大丈夫？」

悪態をつくゲイロンを制しながら、ミュールがたずねた。

「ああ、これくらいならいい運動だ」

ここまで智浩の感覚では二、三時間ほどだが、実際には身体の節々がすでに痛みだしていた。ポルカのおかげでずいぶん乗りやすいはずだが、それでもただ座っているだけというのとは違う。

そういえば乗馬はオリンピック競技だったな、と思い出しながら、スポーツ扱いされる所以を身体で理解しているところだった。

だが、大人の男としてそうそう弱音は吐けない。意識して背筋を伸ばしながら、疲労を悟られまいとした。

「そう？ それならよかった」

ミュールのほうは本当に馬には乗りなれているらしく、まったく疲れた様子は見えない。

「森に入ったらだんだん道が悪くなってくるけど、その様子なら平気かな。もうすこし行っただきに水場があるの。今日はそこまで行つて野宿しましょう」

（たしか、最初の日にもこんなことがあったな……）

どうやら、ミュールの「もうすこし」という言葉は信用してはいけないらしい。

森に入ると急激に道幅は細く、傾斜もきつくなった。

それでも智浩には堪えたが、結局水場があるところまでたどり着くには、森に入るまでとほとんど同じ時間、馬にしがみついているなければならなかったのだ。

疲労困憊の智浩は、ようやくたどり着いて馬から降りようとなつたところには下半身がすっかり固まってしまっていて、あぶみからうまく足を抜けずにあやうく転げ落ちるところだった。

「きつかったんなら、いつてくれればいいのに……」

「面目ない」

ミュールは口をとがらせながらも、智浩の足をマッサージしてくれた。外套を敷いた上に智浩を寝こぼさせて、智浩の足を引っ張ったり押したりしてくれている。

「申し訳ありません、勇者さま。私が気づくべきでしたのに」

その脇でポルカも顔を寄せている。ひとりほつたらかしのゲイロンはすこし離れた場所で桶の中に顔をつっこんで、汲まれた水を飲んでいた。

「いやあ、私が意地を張りすぎたのさ。あいたた」

「はい、あんまりやりすぎるのもよくないから、こんなものね」

ミュールが身体をはなすと、智浩は起きあがって礼を言った。

「ああ、すまない」

「さて、と」

ミユールは腰をまわして身体をほぐす仕草をした。

「わたし、ちょっと森の中をみてくるね。今の時期だと木の実とか果物とか、あると思うから。トモヒロは、火をおこしてくれる？」

いわれて智浩はきよとした。

「どうやって？」

「どうやって、って……魔法を使ってに決まってるじゃない」

「あ……そうか」

木の棒を板にこすりつけて火をつけている映像を頭に浮かべていた。もちろんおぼろげに覚えているだけで、自分で再現できるわけではない。智浩は、ミユールにいわれてはじめて自分の力がそうしたことにも使えるのだと思いついた。

「枯れ枝を集めて薪にすれば、智浩の力ならすぐに火がつくわ。むしろ威力を調整して、薪を吹き飛ばさないようにしてね」

森の夜は静かだった。

無音ではない。近くの川から心地の良いせせらぎが聞こえる。風が通り抜けるときには草木の揺れる音が聞こえる。智浩が魔法でつけた火の中で、木の枝が爆ぜる音も聞こえてくる。

だが、そうした音を聞けば聞くほど、智浩はいま自分のいる場所がとても静かであると実感せずにはいられなかった。

横には、ミユールが眠っている。身につけていた外套を地面に敷き、馬の鞍にくくりつけてあった布で身体をくるんだ格好で、すすうと寝息をたてている。智浩も同じ状態で横になっている。

火を挟んでむこう側には、馬装を解かれたゲイロンとポル力が並んで眠っていた。

起きているのは智浩ひとりだ。ひよつとしたら、この森全体でも、智浩以外の生命はいまはみな眠っているのかもしれない。

そう思わせるほどに、静かだった。

智浩は音を立てないように気をつけながら、むつくりと身を起こし、あたりを見回した。森の中だから頭上はほとんど樹木に隠されて、月も星も見えない。煌々と燃える火がなかったら、自分の手元さえ見えないような漆黒があたりを包みこんでいた。

まだ夜は長そうだ。

なにしろ、彼らが眠りについたのは日が落ちてまもなくのことだった。

なんとかミユールが戻ってくる前に火をつけられたのが、ちょうど夕暮れ時だった。そのあとリーニヤが持たせてくれた保存食節分のときに食べるような乾燥豆だ。と、ミユールが見つけてきたあけびのような果物を食べ、川の水を沸かして飲んだら、あとはもうすることもないし、明日は明るくなったらすぐ出発するからもう寝ましよう、ということになったのだ。

正確な時間はわからないが、智浩の感覚としては六時か七時くらいだろうか。普段は日付が変わるころに眠ることが多い智浩には早すぎた。

それでも身体は疲れていたし、目を閉じていれば眠れるだろうとミュールのとなりで横になった。すると確かにいくらかは眠れたようだったが、結局こんな真夜中にまた目が覚めてしまったのだった。身体に巻き付けていた布をそとはずして立ち上がると、たき火の光が届かないくさむらまで行って小用を足す。下草にあたる水音が思いのほか大きく響いて智浩は首を巡らせたが、誰が聞いているはずもなかった。

用を終えて、またできるだけ音を立てないように気をつけながらたき火の元まで戻る。ミュールもゲイロンもポルカも、先ほど同じ格好で眠っている。

不思議なものだな。

その光景を見ながら、智浩はしみじみとそう思った。ほんの数日前まで、毎日には決まった時間の流れがあった。決まった時間に起き、会社に行き、仕事をする。家に帰って風呂に入り、妻の用意した夕食を食べ、それから短い時間本を読んだりテレビを見たりして、また明日のために眠りにつく。

それをつまらないと感じたことはない。仕事は充実していたし、驚きも喜びもちやんとそこにあった。

このまま何年先までも、そうした生活がずっと続いていくのだと思っていたのに。

気がついたらこんななにもない山奥まで馬に乗って（しかもしゃべる馬だ）やってきて、知り合ったばかりの女性と並んで横になっているのだ。

これでもしミュールがもっと女性の匂いを感じさせる年頃だったなら、もうすこし違う感想を抱いたかもしれない。智浩は浮気をしたことはないが、妻以外の女性に魅力を感じないというわけではない。

だが幸いにといふべきか、彼女は息子と同じ年齢の少女である。立ち居振る舞いも齡相応だ。おかげでこうして枕を並べていても、変に緊張するということもないし、妻に対して申し訳なさを感じることもないのだった。

何日かかるかわからないが、仕事に影響はないというのだし、珍しい経験をしていると思えばそう悪いこともないさ。

再び眠る姿勢をとりながら、智浩は努めて楽観的にそうかんがえた。

ミユールは深く眠っているらしく、ずっと変わらぬ調子で寝息をたてている。

智浩の当面の心配ごとは、明日もたつぷり馬に乗らなければいけないというそれだけだった。

「ほら、見えてきたわ」

ミユールが馬上から指し示すさきに目を凝らすと、岩山のなかに確かに人工的に造られた建物の姿が浮かび上がった。石造りのそれは堅固な造りで、個人の屋敷というよりは要塞のようにも見える。

「ずいぶんものものしい建物だな」

思ったままを口にしてから、ミユールの師匠が暮らしているのだから失礼だったろうかと思に至る。

だが、ミユールは肩をすくめて苦笑して見せた。

「お師匠さまは変わってるの。実際に会えば、もっと驚くと思うわ」
「いいのか、君の師匠なんだろう？」

「自分で自分のことを変人だっていつてるもの。気が合わないかもしれないけど、あそこには契約書をつくりに行くだけだし、一晩しかいないから、あまり気にしないで」

どうもミユールは、あまり師匠のことを好きではないのだろうか。その口振りにはすこしとげがあるように、智浩には感じられた。

「あのじいさん、目がやーらしいんだ」

そういったのはゲイロンだ。

「昔から思ってたんだが、去年屋敷に行ったときなんか、ミュールのことをじろじろ眺めてやがってよお、頭に噛みついてやろうかと、どれだけ思ったことか」

「おまえ、他人のことはいえないだろう」

「一緒にするな！ 俺はミュールのことを本当に愛してるんだぜ？ だけどありや、なんか真つ当じゃないんだよ、絶対。屋敷の中になにかいたずらされてるんじゃないかって、俺は心配でたまらなかつたんだ。だけどそこは悲しいことに俺は馬だからよお、厩舎にながれたらできることなんかなにもねえんだ」

ゲイロンは首を振ってそう訴えたあと、智浩の方を振り返った。

「おっさんのことも気に入らねえが、あのじーさんよりはまともだ。頼むから屋敷の中でミュールが汚されないように、見張っててくれ！」

その目は真剣そのものだった。

「……念のためいっておくけど、変なことをされたことはないからね」

ミュールはゲイロンが黙ったあとで、恥ずかしそうにそういった。

そんなやりとりがあつてから、さらに一時間ほどでようやくミュールの師匠の屋敷へと到着した。はずだったが、がっちりと石が積まれた門には鉄格子がはまっており、押しても引いても開くようには見えない。おまけに門の向こうはまた鬱蒼と森が繁っており、遠目から確認できた屋敷の姿はそのむこうに隠されてしまっていた。「本当にここから入れるのか？」

智浩は不安になってミュールにたずねた。門番が控えている様子もない。

「一応、魔法のお師匠さまのお屋敷だからね。まあ、ちょっとそこで待てて」

そういうとミュールはゲイロンから降り、智浩たちを制して鉄格子の前まで歩いていった。

「ミュール・アスタスです。ヤノさん、いらつしやいますか？」

張りのある声で、鉄格子のむこうへそう告げる。

すると、ややあつて鉄格子の前の空間がゆがんだ。

次の瞬間、現れたのは巨大なふたつの目玉だった。ひとつひとつがミュールの顔より大きい。

目玉は連動してギョロギョロと動いた。ひとの顔を魚眼レンズでどアップにしたら、こんな風に映るかもしれない。

「あらあら、ミュールちゃんじゃない。久しぶりねえ！」

ふたつの目玉がミュールをとらえると、大音量が響きわたった。

唐突だったので、智浩の身体はびくりとふるえ、背中が総毛立った。

「お久しぶりです、ヤノさん」

ミュールのほうはある程度予想していたのか、肩をすくめてはいるものの落ち着いてそう答えていた。

「まあまあ、すっかり美人になって！ 一年ぶりくらいだものね！ 会うたびに見違いちゃうから、もつと遊びに来てくれないとおばさんわかんなくなっちゃうわあ、あははは」

ヤノさんなる目玉（？）は、ポリウムをまったく下げないままひとりでわめき散らした。笑い声が響くと、草木さえふるえているような気がする。

ふと見ると、ゲイロンがいない。あまりの音量の大きさに耐えかねてどこかへ避難してしまったのだろうか。ポル力はいえ、目を閉じ耳を伏せてなんとか耐えているようだった。

「えーっと、とりあえず、入ってもいいですか？」

ミュールもここで会話につきあうつもりはないようで、ヤノさんがさらになにかいいだす前に先手をとってそういった。

「やだやだ、ごめんなさい！ えーっと、ちよつとまっててね」

そして、目玉は消えた。

「いまのはいったい……」

智浩はミュールに事情を聞こうとポル力を前に進めようとしたが、直後にまた目玉が出現する。

「はいはい、おまたせ！」

また大音量で叫ばれて、智浩は今度こそポルカの背から落ちるところだった。

「ありがとうございます、ヤノさん」

「いえいえ、どういたしまして！ 悪いけど、お馬さんは自分たちで厩舎に入れてきてね。あつたかいお茶を用意してまつてるわあ！」

「はい、またあとで」

ふたつの目玉は片方だけをばちんと閉じてみせたあと（ウインクをしたのだろうか？）再び見えなくなった。空間のゆがみは収まって、また鉄格子のはまった門とその奥の森だけが視界に入るようになる。

「もう大丈夫だよ、おじさん」

ミュールが振り返り、智浩に事態の収束を告げた。

「そ、そうか」

「ゲイロン！ 終わったよ！」

ミュールは智浩の背後にも叫んだ。ゲイロンは道のはるか先にある木陰から顔をだし、走って戻ってきた。

「毎度心臓に悪いんだよ、この門」

ポルカと智浩の横に並ぶと、さっそく悪態をつく。

「いつもこうなのか」

「いくらいつても声が小さくならねえ。来客自体めつたにないから、次にくるころには忘れてるのさ。おまえもこんなやつ放り出して逃げちまえばよかったんだ」

最後の言葉はポルカにいったようだった。だが、ポルカは首を振る。

「勇者さまを乗せているのに、そんなことできるわけないでしょう」
「けっ、なにが勇者さまだ」

「そうか すまなかったな、ポルカ」

二頭のやりとりを聞きながら、智浩は馬が本来臆病な生き物で、大きな音は苦手だという話を思い出した。さつきもおとなしくして

いたが、実は必死で耐えていたのだと思うとなんだか申し訳なくなる。

だがポルカはすましていた。

「いえ、お気になさらないください。勇者さまの乗馬を仰せつかった以上、そこが戦場だろうと谷底だろうと、おそれることなく突き進む覚悟です。この程度、なんでもありません」

「そ、そうか」

予想外の返しに、智浩のほうが面食らってしまった。

「ほら、行きましょう。はやくしないとまた閉じてしまうわ」

いつの間にかゲイロンの上にまたがっていたミュールにうながされた。

しかし、智浩が門のほうを見ても、相変わらず鉄格子ははまったままである。

「閉じるもなにも……」

「大丈夫。先に行くわね」

そういうとミュールはゲイロンをうながして、並足で鉄格子へとむかっていった。

「あ、おい」

智浩が呼びかけても答えない。

ゲイロンの鼻先が鉄格子へぶつかると思ったそのとき、鉄格子は水面に映した絵であるかのように波紋を伝わせた。ゲイロンの鼻から頭と順にその中へ吸いこまれるようにして消えてゆく。

「ポルカ、トモヒロをつれてきてね」

「はい、ミュール」

振り返ってポルカに声をかけるミュールも、そのままの姿勢で鉄格子の中へと呑みこまれていった。

「わたしたちも行きましょう、勇者さま」

ポルカは背上の智浩にそういうと、返事は待たずに鉄格子へと歩みを進めた。

その鼻面が鉄格子にふれると、現実の風景にしか見えなかった鉄

格子がやはり波立った。それだけで一気に現実感を失い、何物も立ち入れないように見えた鉄格子がポル力を受け入れ、奥へと導いていく。

智浩の眼前にも鉄格子が迫り、そして抜けた。だが、智浩は通過の瞬間、どうなったのかはわからなかった。

得体の知れない恐怖に逆らえず、両目をしっかりと閉じていたからである。

「どうしたの、おじさん？」

ミュールに声をかけられて、おそろおそろ両目を開いてみる。

目の前に広がっていたのは、先ほど鉄格子ごしに見えていた森の小径こみちであった。

石造りの門は背後にあって、やはり鉄格子がしっかりとまっぴる。

「……どうなったんだ？」

「鉄格子は見せかけなの。お師匠さまの魔法よ。普段はひとが入ってこられないように、その上から結界の魔法をかけているんだけど、それはいまヤノさんに解いてもらったから、入れるようになったのよ」

「そのヤノさんというのは、君の師匠とは別の人なのか？」

「別に決まってるだろ。ミュールの師匠は薄汚いじーさんだ。ありやオバサンだ」

ゲイロンはそういうが、智浩はどちらにも会ったことがないのだ。すぐに両方とも会えるわよ。それにしても、おつかしいの」
ミュールは突然、我慢できないとばかりに口元を押さえて、くすくすと笑った。

「あんなにぎゅーっと目を閉じなくてもいいのに。おじさんって、意外と臆病なのね」

「なっ……」

智浩の頬にさっと朱が入った。

「けけ、笑われてやんの」

「う、うるさい」

ゲイロンの茶々入れにはとりあえずそういったものの、反論はできなかつた。

森を抜けると、ようやく屋敷が間近に見えるようになる。

屋敷は西洋の城塞をおもわせる堅牢な作りだった。背後にそびえる岩山とあわせて見れば、なかなか荘厳な景色である。

だが、広い庭園は荒れ放題だった。おかげで知らずに来たら廃墟だと思ってしまうかもしれない。

「昔はわたしみたいな弟子がたくさんいて、みんなで手入れをしていたんだけど……。今はもう隠居しているようなものだから、お師匠さまとヤノさんしかすんでいないの。お師匠さまはお年だし、ヤノさんひとりじゃ屋敷の中だけで精一杯ね」

ミユールがすこし寂しげな顔でそう教えてくれた。

まずは屋敷の脇にある厩舎へ行き、ゲイロンとポル力をつないだ。智浩もミユールの見よう見まねで、ポル力の馬装を解いてやった。さらに水と飼い葉も用意してやらなければいけない。

厩舎の中にはもう一頭馬がいた。この屋敷で使っている馬なのだろう。ミユールはその馬にも親しげに挨拶を交わし、ゲイロンと同様に水と飼い葉を用意してやった。彼女は智浩がポル力一頭の世話をするのに四苦八苦している間に、二頭分の世話を終えてしまった。 「ありがとうございます、勇者さま」

あまりにも手際が悪いので隣のゲイロンにさんざん笑われたものの、ポル力は智浩に丁重に礼をいった。

「あ、ああ。しかしその勇者さまってというのはなんとかならないかな」

「お気に召しませんか？」

「なんというか、恥ずかしいんだ」

「そうですか……」

ポル力はつと考えるような仕草を見せる。

「おじさん、こっちだよ」

ミュールから声がかかった。

「まあ、無理に変えてくれともいわないが。今日はありがとう。よく休んでくれ」

智浩はポルカの首筋をぽんぽんとたたくと、ミュールについて厩舎を後にした。

「なんというか、馬にもいろんなのがいるんだな」

「そりゃそうだよ。人間だっていろいろいるでしょ」

「たしかにそうだが……。そういえば、しゃべらない馬というのはいるのか？」

「見たことないかな。野生の馬だったらいるかもね。言葉を知らないってことだけど」

「ほかの動物はしゃべるのか？ 犬とか、猫とか」

「犬はしゃべらない。猫は、しゃべることはできるはずだけど、あんまり聞いたことないかな。あんまり人と関わるのが好きじゃないみたい」

「へえ、犬はしゃべらないのか。なんだか意外だが……」

馬や猫がしゃべるのなら、犬だってしゃべって良さそうなものだ。
「そう？ わたしには想像できないけどな。犬がしゃべってるところなんて」

「私もこの世界にくるまで、そんなことを想像したことはなかったよ」

「あはは、そうだよな」

などとやりとりを交わす間に、ふたりは屋敷の玄関までたどり着いた。智浩の身長は二倍はある立派な観音開きの扉が、なんだか威圧的に感じられる。

ミュールが進み出てドアの取っ手をつかみ、二回ノッカーにうちつけたあと、そのまま取っ手を引いた。

重くきしんだ音を立てながら、ドアがゆっくりと開いていく。途中からは智浩も手伝った。

ある程度開いたところで、ミユールにうながされてまず智浩が中に入り、それからミユールが滑りこむようにして中に入った。

「ふう、重くてやんなっちゃうわ、これ」

手にさびでもついたのか、ぱんぱんと手を払いながらそんなことをしている。

屋敷の中は、外観同様西洋風のホールになっていた。二階分の吹き抜けになっており、中央には階段が据え付けられている。床には赤いじゅうたんが敷きつめられ、いくつか調度品もおかれていた。

見上げた天井にはシャンデリアも吊り下がっていたが、そちらは明かりがともっておらず、ホールはやや薄暗かった。

そうはいつても、2LDKのマンション暮らしである智浩からすれば、十分に立派で豪華な建物だった。彼の稼ぎではまずこんな住宅は建てられないだろう。

智浩が感心しながらホールを眺め回していたとき、一階の奥の扉が音を立てて開いた。

「ヤノさん！」

「まあまあ、ミユールちゃん！」

ふたりの声が響いて、智浩はそちらをみた。ミユールとヤノさんは再会を祝って抱き合っていたが、ヤノさんはずいぶん身体が小さいらしく、智浩の位置からはミユールの背中しか見えなかった。

「お久しぶりです」

「うんうん、本当に大きくなったわねえ。おばさんびっくり」

「ヤノさんは、すこしやせたんじゃないですか？」

「おやおや、うれしいことってくれるじゃないの」

そうやってしばらく旧交を温めていたが、智浩がこちらから声をかけようか迷いだしたころ、ようやくミユールが思い出したようにこちらを振り返った。

「そうそう。今日は契約に来たんです。彼がトモヒロ。トモヒロ、こちらがヤノさんよ」

「あらあら、そうだったの」

ミユールの陰から、ヤノさんがひよいとばかりに顔を出した。

「あ、これは、どう……も……？」

あいさつをしようとした智浩は、その顔を見て固まってしまった。

「あれあれ、どうかしまして？」

ヤノさんは首を傾げている。

「いや、その」

智浩は二の句が継げない。

「おじさん、どうかした？」

ミユールも智浩が固まった理由がわからないらしい。

「ミュ、ミユール」

智浩はミユールを手招きすると、小声でいった。

「犬はしゃべらないんじゃないのか？」

「犬って」

智浩はヤノさんの毛むくじやらなその顔を凝視していた。

「ヤノさんは犬じゃないわよ」

「しかし、あれはどうみても」 犬だった。

智浩の様子を不思議そうに眺めているヤノさんは、ミユールの胸あたりまでの身長があり、女物の服を着て、二本足で立っている。

が、その身体は、少なくとも服の外にでている部分はもれなく長い毛に覆われていた。もちろん顔も例外ではなく、くぼんだ目とつぶれた黒い鼻と唇のあたりをわずかに露出させているほかは、白と黒と茶色をミックスした毛並みが覆っている。

思い出した、あれは確かシー・ズーとかいう犬種だ。

むかし動物番組でみた知識があたまにひらめいた。

「智浩の世界だと、犬は服を着て、二本足で歩くの？」

「いや」

服を着ている犬はけっこういるが、あれは着させられているのであって、自分で着ているのではない。二本足で歩くこともしこめばできなくもないが、それは芸の範疇である。

「そんなことはない、が」

「でしょ？ しっかりしてよ」

ミユールは腰に手を当て、ため息をついた。

「でも、智浩が驚くのも無理はないか。ヤノさんはね、エルフなのよ」

「……エルフ？」智浩はぼんやりと繰り返した。

「知らない？ 本当は森に住んでいる妖精なの。ヤノさんは魔法の修行をするためにお師匠さまに弟子入りして、そのまま住み込みでお師匠さまの面倒を見ているのよ」

「おやおや、なんだか恥ずかしいねえ」

ミユールに紹介されてヤノさんは照れている。

智浩も、エルフという言葉は聞いたことがあった。森の妖精という情報も覚えがある。だが、目の前の人なつつこそうな犬（にしか見えない）とはどうにもイメージが一致しなかった。

「ま、まあいいさ」

理解が追いつかないことなど、ここに来てから山ほどあるのだ。

ミユールがエルフだというからには、ヤノさんはエルフなのだろう。

「早乙女智浩です、よろしく」

強引に自分を納得させて、右手を差し出した。

「あらあら、なかなかかつこいいじゃないの」

つぶらな瞳で智浩を見上げながら、ヤノさんも右手を差し出した。握手をする。犬のそれよりは大きく、指もしっかり分かれているように感じたが、手のひらには肉球がしっかりとついているのを智浩は見逃さなかった。

「お師匠さまは、いまはお部屋ですか？」

握手が終わると、ミユールがたずねた。するとヤノさんは少々あわてた様子で手を打った。

「そうそう、そうなのよ。そろそろお茶をお持ちしないと。ちょうど準備をしていたところにあなたたちが来たものだから。あの方っぱい時間に正確だから、遅れてしまうと大変だわ」

そついい残すと先ほどでてきた扉の奥へ引っこんでいく。そして

程なくしてティーポットとカップをのせたお盆を持ってまた現れた。
「ほらほら、あなたたちの分も用意したから、いっしょにおいでなさいな」

ヤノさんは階段を先立って上っていく。智浩はその様子をまじまじと見てしまい、ミュールに小突かれた。

「ちよつと、失礼よ」

「あれは、尻尾か？」

ヤノさんの腰はロングスカートに隠されているが、腰の部分が不自然に盛り上がっているように見える。

「まだいつてる」

「驚かないように先に聞いておきたいんだが、君のお師匠さまは人間なのか？」

「もう、お師匠さまは人間です」

ミュールはあきれた顔でそう答えたあと、つと視線をそらせた。

「どうした？ なにかあるなら、先にいっておいてくれ」

「あ、そうじゃないのよ」

ミュールは否定したが、その笑顔はぎこちない。

それは久方ぶりに恩師に会うというわりには、どうにも腑に落ちない態度だと智浩には感じられた。純粹に敬愛しているというようには見えない。

屋敷の中でいたずらされるんじゃないかって心配で。
唐突にゲイロンの言葉が思い出された。

二階に上がり、ホールから各部屋へと続く廊下を進む。

ホール周辺はきれいに掃除されていたが、奥へと進むにつれてだんだんと得体の知れないアイテムが廊下の脇を埋めつくすようになっていく。なにか液体の入ったつぼや小瓶やら、毒々しいデザインの置物やら……。

「みんな、魔法のアイテムなのよ。特殊な魔法を使うのに必要だったり、それ自体に魔力がこもっていたり」

「そうそう、なかにはうかつにさわれないものも混じっているから、なかなかお掃除をさせてもらえないのよねえ、あははは」

精巧な鳥の彫刻に手を伸ばしかけていた智浩は、ヤノさんの言葉を聞いてあわててその手を引っこめた。

目的地は、廊下の一番禺だった。いや、ひょっとしたらまだ奥があるのかもしれないが、様々なアイテムが山のように積もっていて、それ以上進めなくなっているのだった。

「どうしたの、トモヒロ？ そんなに熱心に見て」

ミユールの言葉どおり、智浩は触れはしないもののアイテムの山をしきりに眺めている。

「ああいや、いいんだ」

智浩が気になったのは、いかにも魔法のアイテムといったものに混じって、炊飯器やら冷蔵庫やら、どうも元の世界で見たことのあるようなものが置かれていることだった。

まさか使えはしないだろうが、なぜそんなものがここにあるのだろうか？

そう疑問に思ったが、これからこの屋敷の主に会うのだ。そこで聞いてみればいいと思い直して、ほこりの積もったアイテムの山から目をはなした。

それを待っていたかのように、ヤノさんが扉をノックした。

「旦那さま旦那さま。お茶とお客様ですよ」
返事はない。

だが、いつものことなのか、ヤノさんはとくに気にせず取っ手を引き、ドアを開けた。

「さ、どうぞ」

ミユールと智浩が先に中へと通された。

部屋の中は、廊下の様子から想像していたとおり、乱雑な印象だった。とにかくあちこちに本や巻物が積み上げられ、所々ではそれが崩れて散乱している。壁際には本棚があるが、そちらはすでに満杯のようだった。

部屋の手前には木製の小さな丸テーブルがあり、その周辺はいくらか整頓されている。奥には重厚なつくりの立派な机　智浩の会社の社長室にあるものより高そうだが置かれているが、その上は余さず本が積みあがっていた。

人の立つスペースは確保されているが、肝心の「お師匠さま」の姿は見えない。

「お師匠さま、ミユールです」

ミユールが机の上に積みあがった本にむかつてそういった。

「……そこにいる」

返事は本のむこうから聞こえてきた。

いすを引く音がして、その拍子に机の上の本の山がひとつ、崩れた。

「あらあら」ヤノさんがこぼした。

本が崩れたのと反対側から、ようやく人影が姿をあらわす。

出てきたのは、禿頭の老人だった。ヤノさんと同じくらいに背が低い。杖をついており、かなり齢をとっているのか顔もしわくちゃだが、その真ん中で立派な鷹鼻が存在感を放っていた。

「お久しぶりです」

ミユールが緊張した面もちでそういったが、老人はそちらにはちらりと目を向けただけだった。

杖の先で床の本をどかしながら、見た瞬間に感じたよりは力強い足取りで智浩の前まで歩いてくる。

そして、値踏みするように下から上へと視線を動かした。

「またずいぶんと、齢くつたのが来たな」

それから、意外なことを聞いた。「おまえは、チャイニーズ（中国人）か？」

「私は、日本人　ジャパニーズです」

智浩は戸惑いながらもそう答える。

「ふん、そうか」老人は口の端をつり上げて笑みをつくった。「わしはブリティッシュ（英国人）だった。もつとも、あそこで暮らしたのはたつたの十六年だったかな」

「ということは、あなたも召喚されて、この世界に？」

「いいや。誰かに召喚されたということではない。たまたまの偶然で、ここに落つこちてきたのさ。わしらの世界とこの世界は不意につながることがあるようで、時折そうやって世界を移動するものがある。人も、ものも、いろいろとな」

「召喚術を確立させたのは、お師匠さまなのよ」ミュールが補足した。

「ウイズダムだ」

老人は名乗ると、右手を差し出した。

「もつとも、本名ではないがね。異世界へようこそ、お客さん」

「　早乙女、智浩です」智浩もすこし考えてからそう名乗り、その右手をとった。

「さあさあ、お茶はそちらにおいておきましたからね」

入り口に立っているヤノさんがそういつてテーブルを示した。いつの間にか、三つのカップに紅茶がそそがれて置かれている。

「やれやれ、お夕食の準備があるので失礼しますよ。ごゆっくり」

ヤノさんはそういつてぺこりと頭を下げるとドアからするりと出ていった。その様子を目で追っていたミュールにウイズダムが声をかける。

「なにをしている、ミュール。いすを持つてきなさい」

「あ、はい！」

それほどきついいいかたではなかったが、ミュールは飛び上がるようにしてそう答えると、部屋のみへとむかつていった。本の山に紛れるようにして、いすが積まれているのが見える。

途中に散乱している本を丁寧拾ってよけながらいくミュールをみながら、ウィズダムがいった。

「あいつは八歳のときにここへきたが、そのころから気の利かないやつだね。成長して身体つきはそれらしくなったが、そういうところは変わらないな。あんたも不便を感じていないかね」

「いや、そんなことは……。よくしてもらっていますよ」

ミュールがみつつのいすをがたがたと不安定な音をさせながら運んできて、三人はテーブルを囲んで座った。

ウィズダムがまずカップに手を伸ばし、紅茶の香りをかいでからゆっくりとした動作で一口する。智浩とミュールもまねをするように紅茶をすすった。

まる一日かけて山道を来たふたりの身体が内側から暖められる。ため息がほつとふたりの口をつき、しめしあわせたかのように重なった。

「長旅ご苦労だったな。これまでに乗馬の経験は？」

「いやまったく。幸いこちらの馬は座っているだけでも進んでくれるのでなんとかりました」

智浩がそう答えると、ウィズダムは肩をゆらして笑った。

「あれをはじめてみたときは、わしは腰を抜かしたよ」

「私は、幻聴が聞こえたのだと思いました」

それからしばらくは、元の世界の情勢が今どうなっているのか、日本には行ったことがないがどんなところなのか、など、ウィズダム老からの質問が相次いだ。

ミュールの緊張具合から、智浩はこの老人がかなり気むずかしい性格なのかと思ったのだが、実際話してみるとまったくそんなこと

はなかった。皮肉屋なところはあるが、とりたてて話しづらいということはない。

が、ミュールはあいかわらず固い表情のままで、会話にはほとんど加わらない。

話題の中心が智浩たちのもといった世界のことなので、会話に加わりたくてもできないだけかもしれない。智浩は気にしすぎないことにした。

ウィズダムと話すうちに、この老人が偶然この異世界に「落ち」たのは、智浩が召喚されるちょうど十年前だということがわかった。だが、すっかり頭の禿げあがった彼は、この世界に来たときまだ十六歳だったという。

「もう細かい年数は覚えておらんが、この世界ではわしがここに来てからすくなくとも六十年は経っているよ。あちらとこちらでは、時の流れる速度が違う。ただ、仮に六十年だったとして、こちらが六年進む間に必ずしもあちらで一年進むというわけでもないらしい。時の流れかたは一定ではない、というのがわしの理論だ。そしてそれが正しいからこそ、ある程度日時を指定した送還も可能になる」

ウィズダムは得意げにそう語ったが、さすがに専門的な内容になると智浩には理解できなかった。

「元の世界に帰ろうとはしなかったのですか？」

召喚術を確立したのが彼なら、その術を使って帰ることも十分可能はずだ。智浩は不思議だった。

「もちろん、最初はそう思っていたさ。召喚術の研究を始めたのもそれが理由だった。だが、なんとか元の世界に帰れる目途がついたとき、わしはすでに大魔法使いとしてあがめられていたんだ。元の世界に帰れば、ただの学生でしかない。貧乏ではないが、裕福でもない。当然、あちらでは魔法は使えないだろうから、何の特技もない平凡な男さ。おまけにそのときすでにこの世界では十年ほど時が経っていて、わしの外見はすっかり大人のそれになっていた。さて、はたして戻る必要があるのだろうか？」

ウィズダムはやや興奮した口調でまくしたてると、ひと呼吸おいて紅茶を口に含んだ。

「まったくくない。それが私の結論だった」

「ご両親は？」

「健在だったよ。歳のはなれた弟もいる」

智浩の胸がちくりと痛んだ。

「もしかしたら、いまもあなたの帰りを待っているのでは？」

言うべきことではないかもしれない、と思いつつ口に出した。ミユールがちらりと智浩を見やった。

だが、老人はまったく表情を変えなかった。

「さてね。搜索願いくらいは出しているかもしれないな。だがどうでもいいことだ。私たち異世界人は、この世界では例外なく強力な魔力を得る。つまり、ここでは常に強者だ。君ももしこの世界に残りたいと願うなら、魔女退治の後でこの国の王にいうといい。立派な屋敷を用意してくれるよ」

ウィズダムは笑みを浮かべて智浩をみている。さきほどまでとおなじ、柔和で気さくな笑顔だ。だがおなじ表情のはずなのに、智浩は急に受け入れがたい圧力のようなものを感じた。その正体は分からなかったが、智浩はとりあえず首を振った。

「私は、妻のいるところに帰りたいと考えていますので」

「無理強いはいしないさ」ウィズダムはあっさりといった。「だが、この世界の女も悪くはないよ。機会があったら試してみるといい」

「そんな」

智浩が気色ばんで何か言おうとしたとき、腹に響くボーンという鐘の音が聞こえてきた。

鐘の音は続けてなっている。智浩が見回すと、部屋の柱に振り子式の時計がかかっていた。

「そいつは召喚術の実験中に偶然呼び寄せたものだ」

ウィズダムは目を細めて針の位置を確かめている。「おお、もうこんな時間か」

時計は四時を指し示していた。

先ほどの発言などなかったかのように、老人は膝を打つと朗らかな笑顔になった。

「とはいえ夕食まではまだ時間がある。日本人なら風呂は好きだろう。この屋敷には温泉を引いてあるんだ。よかつたら入っていくといい」

「それはありがたいが　そもそも、契約書を作るのではなかったのか？」

智浩はミュールにむかつてたずねたのだが、答えたのはやはりウイズダムだった。

「そんなものは明日でいいだろう。今日はゆっくりしていくといい」「そうしなよ、トモヒロ」

ミュールも追隨した。なんだか会話の流れもあやしいし、今日はここまでということなのだろう。

「それなら、お言葉に甘えて。　といっても、場所がわからないのですが」

「あ、それならわたしが　」

風呂場の場所を案内しようと、ミュールが腰を上げる。

「ミュール」

だが、ウイズダムの低い声がそれを押しとどめた。

「おまえは、残りなさい」

「　はい」

ミュールはうなずくと、いちど浮かせた腰を下ろした。

「ごめん、お師匠さまとお話があるから、ヤノさんに案内してもらって。一階に降りて右奥の台所にいると思うから」

「ああ。　いいのか？」

なんとなく、そうたずねてしまった。

久しぶりに会った師匠と弟子なのだから、積もる話があつて当然なのだが、どうもミュールは師匠と一対一になりたがっていないように見えたのだ。

もちろん、根拠はない。

「うん、またあとでね」

そしてミュールも、そういつて笑う。それ以上なにかいうことはできなかった。

「ああ」

ウィズダムに挨拶をして、その場を辞した。ミュールの笑顔が、いつもより固く、元気がないのを感じながら。

(6)

智浩が部屋を去ると、室内にはにわかに沈黙がたちこめた。

ウィズダムは無言で紅茶をすすり、ミュールは肩を縮めてその様子をつかがっている。

「あの」

「話は聞いているぞ、ミュール」

意を決して口を開いたミュールにかぶさるようにウィズダムが重々しくいった。

先ほどまでとは声のトーンが違う。

「異世界人を魔女にとられるとはな。とんだ大失態だったではないか」

ミュールはなにかいおうと口を開けたものの、ウィズダムのいったことは厳然たる事実であり、結局なにをいってもいいわけになつてしまう。

「申し訳ありません」

なんとか言葉にできたのは、それだけだった。

「運良く次の異世界人が来たからよかったものの、あのままだったらわしのところに依頼が回ってくるところだった。この老いばれにまだその青い尻を拭かせる気なのか？」

ミュールは無言で下をむいている。

「それにしてもよりによつてシトラにしてやられるとはな。ありや女としては上玉でも、魔女としては三流だぞ。まあその女の武器を使つてとられちまったんだからな。おまえじゃ分が悪すぎる」

ウィズダムは席を立ち、ミュールへと近づくとおもむろに杖先を持ち上げて、ミュールの胸のあたりをついた。

「んっ」

ミュールは小さく息をつくような音をたてただけで、その仕打ちに耐えている。

「だからここを出るときにいつておいただろう。異世界人を見つけたら、まず自分のモノにしてしまうんだと。おまえみたいな貧相な身体でも、いちど抱いてしまえば情がわくんだ。先手をとることが重要だとあれだけ教えたのに、どうせ誘惑しようとしてもしなかったんじゃないのか？」

「それは……」

「まさか、本気で惚れちまってたんじゃないだろうな」

口ごもっていたミュールだったが、ウイズダムの指摘に顔を赤くした。

「なんだ、凶星か？」

ウイズダムはおおげさに呆れてみせた。「まったく……魔法だけじゃなくて、男のこともしっかり教えておくべきだったな。現地人にしては魔力があるし、女の特性を使えば召喚師として使えるかと思っただが、これじゃどうにもならん」

「こ、今度は」ウイズダムの態度に、ミュールはあわてていいつつた。「今度は、大丈夫です。トモヒロは奥さんを大事にしているみたいだし、あんなことには」

「そんなことをいつているからダメなんだ」

しかし、ウイズダムはそれをさえぎって一喝した。

「あの年頃ならまだまだ男として機能するんだぞ。女に興味がないんじゃない、おまえに興味がないんだ。その程度もわからないから魔女なんぞにとられるんだ」

ミュールはまた、下をむいてしまった。

「今夜だな」

ウイズダムは柱時計を見やりながらいった。

「ここにいる間は、魔女も手出しはできん。今夜中に、モノにしてしまえ。この世界へ来て四日目か。そろそろ溜まつてるころだろう」

「そ、そんな」

「できなきや、破門だ」

ぴしゃりといいつけられて、反論は封じられてしまった。

「さあさあ、こちらが脱衣所ですよ」

犬　ではなくてエルフのヤノさんは、とても働き者だった。大人数相手でも十分サービスできそうな広い台所でひとり、せわしなく動き回っていて、智浩は声をかけるかどうか迷ったほどだ。それでもむこうから智浩に気づいて「あらあら、ご用はなあに？」とにこやかに近づいてくる。

風呂の場所をたずねると、行き方を教えてくれればいいのにわざわざついてきてくれた。

「はいはい、替えの服はここね。荷物は部屋に運んでおきますから。それじゃ、ごゆっくりね」

「すみませんね、忙しいのに」
「いえいえ」

ヤノさんは去り際に振り向いて、「そうそう、身体、洗って差し上げましょうか？」といった。

つぶらな瞳で智浩を見上げるヤノさん。その鼻の頭はつやつやと濡れて黒光りしていた。

「それは、結構です」

「あらあら、残念」

ヤノさんはころころと笑うと、脱衣所から出ていった。

「……あの服の中、どうなってるんだろうな」

果たして全身シー・ズーなのだろうか。

おそらく、智浩には一生明らかにされない謎だろう。

「おお……」

入り口にかけてある布をくぐって風呂場にはいると、智浩の口から自然と声が漏れた。

そこはかなり広かった。旅館の大浴場といってもいいくらいだ。床はタイル張りになっていて、光沢のある石材で造られた湯船が部屋奥、三分の一ほどを占めている。

ただよう湯気から、かすかに硫黄のにおいも嗅ぎとれた。

「本当に温泉なんだな」

滑る足下に注意しながら湯船まで行く。指先を入れてみると、想像していたよりはぬるいようだ。

そばにあつた木桶で湯をすくい、二回掛け湯をしてから湯につかる。

腹の奥底から自然と深いため息が出た。

温度がぬるいのが残念ではあるが、久方ぶりのまともな風呂だ。

そもそもこんな広い風呂は、智浩には二年前に社員旅行で行った旅館の大浴場以来だった。

湯は透明だが、こころなしかとろりとしていて、なにかの薬効もありそうだ。だが、さすがに日本の温泉旅館ではないので、薬効の書かれた立て札はたっていないかった。

湯船は深くなく、ふつうに座ると腰のあたりまでしかこない。ほかに誰もいないのをいいことに、智浩は首から上だけを湯から出して大胆に寝そべってみた。やはり、肩までつかりたいものだと思うたのだ。

大の字になって身体の力を抜くと、身体は自然と浮き上がってしまい、足の先やら股間の一部やらが湯の外に出てしまったが、智浩は気にせずそのまましばしたゆたった。

やはり湯の効能はてきめんで、智浩はこの世界に来て初めてここからリラックスできていた。

すると、自然と妻子のことが思い出される。

ここしばらくは仕事にかかりきりで、気づけば家族旅行も長いこととしていなかった。遠出といえばせいぜい実家の墓参りくらいだったのだ。

無事家に帰ったら、みんなで温泉に行くのもいいな。

この広い浴場を独り占めしていることが申し訳なく思えてきて、智浩はそんなことを考えながら湯にからだを任せていた。

やがて存分に温泉を満喫した智浩は身を起こすと、浴場内をきよ

ろきよると見回す。

身体を洗いたいのだ。

実際気候の問題なのか、ここへ来て数日は簡単に身体を拭くことしかしていないし、昨日はそれすらしていなかったのだが、とくに垢が出るわけでも頭がかゆくなるわけでもなかった。しかしそうはいっても長年の習慣として、ほぼ毎日風呂に入って頭と身体を洗ってきたのだから、せつかくこうして立派な風呂に入ったときくらいはなんとかしたい。

だが室内には木桶はあるものの、やはりシャンプーもボディソープもないし、タオルもスポンジもない。

落胆した智浩は、こうなれば小さな手ぬぐいでも持ってきて身体を拭くか、と湯船からあがった。

入ってくるときは、風呂の様子が気になって脱衣所のなかになにがあるかなど気にしなかったが、まあ身体を拭くものがないということはないだろう。

ぺたぺたとタイル床を歩いて脱衣所の前まで行き、仕切りになっている重い布を持ち上げる。

当然、誰もいない空間を想定していた智浩だったが、事實は違った。

そこにはミユールがいて、着替えをしていた。彼女が普段身につけている衣服は棚にしまわれ、彼女自身は白い薄布の装束を身につけている。智浩がみたのは、ミユールが服の前をあわせて帯を締めようとしているその瞬間だった。

「あれ、トモヒロ、もうあがるの？」

ミユールはさほど驚いた様子もなく、そう声をかけた。

一方の智浩は、その声でようやく我に返った。

「おわっ」

短く声を発して、持ち上げていた布を戻す。

「す、すまない！」

とにもかくにも布越しに謝罪をする。はだかを見たわけではない

が　　というか、智浩の方が隠すものもない状態なのだが　、こ
ういうときはとにかく男が謝るものだというのが智浩の常識である。
しかし、浴場はここひとつしかないようであつたし、男女別に分
かれていた風でもなかったから、よく考えるとここは混浴であつた
ということだ。

前を隠すものくらい最初から持つておくんだつた、と後悔は先に
立たないものである。

「いいよ、気にしないで」ミユールの声は落ち着いている。「わた
し、トモヒロの身体を洗つてあげにきたんだけど、遅かつたかな？」
「身体を？」智浩はなかなか動揺から立ち直れない。「いや、そん
なことまでしてもらわなくても　」

「でも、お風呂で身体洗うの、楽しみにしてたんでしょ？　ここに
来るまでもよくいつてたじゃない」

「確かにいつたが、手伝つてもらわなくとも大丈夫だ」

「でも、石鹸、ここにあるし」

「うっ」脱衣所に石鹸があつたとは。

「はじめてきた場所だし、ものの場所とかよくわからないんでしょ。
手伝うよ。召喚した対象が不自由しないようにするのも召喚師の仕
事だつて、いつたでしょ」

ミユールの口調がいつもと変わらなかったおかげで、智浩も次第
に冷静に考えることができるようになっていた。彼女は仕事の延長
でこうしてきてくれたのだ。他意があるはずもない。だいたい、息
子と変わらない歳の少女相手にこんな風に動揺してみせるのは、大
人としていかなものなのか　？

そう考えた智浩は、ひとつ息をつくともミユールに告げた。

「……それなら、背中だけ流してもらおうか」

「わかつた」

ミユールの元気のよい答えが聞こえ、すぐに布が持ち上がる気配
がする。智浩はあわてて付け加えた。

「入ってくる前に、腰に巻ける布をよこしてくれ」

浴場の脇には、いすのようにでっばった石があり、智浩はそこに腰掛けた。むろん、腰回りはしっかりと隠したうえで。

その背後では、無地の浴衣のような衣服に身を包んだミユールが、木桶のお湯の中で石鹸と海綿スポンジをもみ合わせて泡を立てている。

智浩は振り返ることもできず、会話をしようにも話題が思い浮かばず、ただせいぜい背筋を伸ばしてその気配を感じていた。

まあ、娘ができたとも思えば……。

そんな風に考えて、むりやり気持ちを落ち着かせる。誰かに身体を洗ってもらうなんて新婚時代以来だ。

「じゃ、いくよ」

ミユールが合図をする。

スポンジの感触を想像して身構えていた智浩だったが、その前にミユールの左手が肩にのせられた。吸いつくようなその感触に、身体がびくりとはねてしまう。

「あ、ごめん。手、冷たかった？」

「いや、大丈夫……」

智浩は赤面しながら答えた。幸いにも背中をむけているので、その様子はミユールには伝わらなかった。

今度こそ泡にまみれたスポンジが背中にあたり、肩甲骨のあたりから下にむけて身体をこすられていく。

背中を流してもらうのは、智浩の思い描いていた以上に気持ちよかった。

智浩が自分で身体を洗うときに比べれば、だいぶやさしい力加減だったが、むしろそれがこちよい。

「どう、気持ちいい？」

「ああ、いい感じだ」

だいぶ気持ちがほぐれて、ミユールの問いかけにも自然と答えら

れた。

「そういえば、さつきは師匠とふたりで、なんの話をしていたんだ？」

その流れで会話もスムーズに運ぶ……と思ったのだが、ミュールの返答は一拍遅れた。

「怒られてたの」

「浩一のことか？」

「うん、まあね」

ミュールは自分の感情を覆い隠すかのように、いそがしくスポンジを動かした。

「それは、すまなかったな」

背中をむけたまま、智浩はわびた。

「おじさんが悪いんじゃないでしょ」

「だが、息子の不始末を父親がわびるのは当然だ」

智浩がいうと、ミュールの手が束の間、止まった。

「うっん、そうじゃなくて、コーイチよりもわたしが悪いのよ。わたしが未熟だったから、魔女につけこまれる隙をつくったからいけなかったの」

「そんなことはないだろう。結局、誘惑されて、それに乗ってしまったのは浩一だ。まだ中学生とはいえ、あんな風に世間知らずに育ってしまったのも、結局は私の責任だ。それなのに君が師匠に怒られてしまったというのはなんだか申し訳ないな。夕食のときにも私が事情を説明して」

「い、いいよ、いいよ！ そんなことなくて」

ミュールはあわてて智浩の言葉をさえぎり、また智浩の背中をこすりだした。

「お師匠さまがわたしに厳しいのは仕方がないの。わたしは、お情けで置いてもらっているようなものだから」

「それはどういう」

「もともとは、わたしのお父さんがお師匠さまの弟子だったの。お

師匠さまは召喚術を確立したあと、それを広めるために一時期はたくさん弟子をとっていて、その中のひとりだったのよ。でもこの世界の人間はみんな魔力が低かったからうまくいかなくて、最終的にはお父さんを含めてほんの数人しか残らなかった」

語りながら背中を洗いおえたミュールは、そのまま左肩から腕を洗いはじめた。

「お父さんはけっこう優秀で、お師匠さまにも見込みがあるっていわれていたみたい。でも魔法の実験中に事故を起こして、そのときに負ったケガがもとで死んじゃったの。お師匠さまもそれを境に残っていた弟子もみんな返してしまつて、お手伝いとしてヤノさんが残っただけになった」

左腕を洗い、ついでにわき腹もこすつたミュールは、すこし身体を移動させて今度は右側を洗う。

「わたしはお父さんの跡を継ぎたくて、ムリをいつて弟子にしてもらつたの。お師匠さまが認めてくれたのは、お父さんのことで負い目を感じているからなんだと思う。わたしの魔力も、召喚師として一本立ちするにはやっぱり足りなくて、でも、そのうまくすればなんとかやつていけるかもしれないから、つてことでなんとか破門にならずにすんでいるのよ」

ミュールが一瞬言葉に詰まつた。彼女がなにかをはぐらかしたように聞こえて、智浩は違和感を覚えた。

「いま」

「はい！ うしろから洗えるところはだいたい洗つたよ」

ミュールが会話は終わり、とばかりに元気よくいい、智浩の言葉を断ち切つた。

ミュールの身の上を聞いているうちに、背中、肩、両腕に両わき腹とひととおり洗われていたのだった。

「やつぱり、前も洗つてあげようか？」

「いや、結構。あとは自分でできる」

智浩は振り返り、ミュールからスポンジを受け取つた。彼女の着

衣はほとんど濡れていないが、腕や膝下はいくらか水を吸い、その奥の肌色が透けていた。

「じゃあ、わたしは戻るね。ごゆっくり」

ミユールは立ち上がるとそう告げた。

「君は入らないのか？」

智浩は素朴な疑問を口にしたつもりだったが、ミユールはきよとんとしたあとで、胸を両腕で隠しながら意地悪な笑みを浮かべた。

「もしかして、一緒にはいりたいの？」

「ち、違う！」

とんだ失言をしたと気づき、智浩は顔を真っ赤にして否定した。

「あはは、冗談よ。わたしはあとでヤノさんと一緒にはいるの。それじゃ、あとでね」

ミユールは屈託のない笑顔になって手を振ると、布をくぐって浴場を出ていった。

ミユールが着替えて脱衣所をでると、ウィズダムが待ちかまえていたかのように立っていた。

「ずいぶん早かったな。ちゃんとやったのか？」

「背中を流してあげただけです」

ミユールは目を合わせずに答えた。

「それじゃあ大した誘惑にはならんぞ。まあ泡踊りならもつと肉の柔らかい女のほうがいいがな。おまえじゃスポンジと変わらん」

侮辱と聞いていい言葉にも、ミユールは言い返さなかった。

「忘れるなよ。今夜中にモノにできなければ破門だ。どのみちおまえの魔力では、父親の研究を引き継ぐことなど夢のまた夢かもしれないがな」

ウィズダムはいいたいことをいってしまうと、ミユールに背をむけて立ち去っていった。そのちいさな背中が見えなくなるまで待つて、ミユールはゆっくりとため息をついた。

(7) (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

文字数が……。四〇〇〇字前後を一話の目安にしているつもりなんです、ちつとも思い通りにならないですね。

このあたりはもっとベタベタな展開にしたかったんですが、まだ気恥ずかしさがあるなあ。もっと精進が必要ですね。

ご意見ご感想などありましたらぜひお聞かせください。

その晩、智浩は夕食を終えて、用意された部屋へと案内された。

もともとは弟子たちの使う部屋のひとつだったらしいその部屋は、四畳半ほどの広さしかなく、家具もベッドのほかには小さな机と机すが備え付けられているだけだった。寒くなるはずなのに暖房設備は見あたらず、代わりにベッドの上には布団が山積みになっている。「ちよいちよいは掃除しておきましたから、ほこり臭くはないと思いますよ」案内してくれたヤノさんがそういった。その言葉どおり、いまは使われていない部屋のはずだが、ほこり臭くもカビくさくもない。

「ああ、ありがとう」

智浩は礼をいってから、首を傾げた。「しかし、いつの間に掃除まで……」

ヤノさんは智浩たちを師匠の居室に案内してからは、ずっと夕食の準備をしていたはずだ（智浩を風呂へ案内したときをのぞいて）。ほかに人員はいないようだし、食事もコース形式でこそなかったものの、前菜にサラダ、スープ、メインディッシュにデザートとずいぶん豪華なものだった。小麦のパンも焼きたてで、智浩は彼女の腕前に感服したばかりだった。あの手の込みようだと、ほかのことをしている余裕はなさそうだったが。

「あらあら、野暮なことを聞いたらいけませんよ」

しかしヤノさんはほころろと笑って、智浩の疑問には答ええてくれなかった。机の上に持っていたランプを置いて、それじゃまた明日、といって部屋から出ていった。

その後ろ姿は、腰のあたりの不自然なふくらみがゆらゆらと左右に揺れているように見えて、智浩はヤノさんに尻尾があるのか聞いてみたかった。が、昼間ミュールに失礼だといわれていたこともあり、結局なにもいわずに見送った。

「不思議なひとだな」

ある意味、この世界で出会った生物では今のところ彼女がいちばん神秘的な存在かもしれないかった。

「さて」

部屋にひとりになった智浩は、ヤノさんが机の上においていったランプを見やった。

ランプは光量がしばらく減っていて、室内は少々薄暗い。もうあとは寝るだけなのでそれはいいのだが、先ほどから油の燃えるにおいが気になっていた。燃料は灯油ではなく獣油なのだ。

この世界では精製された油はなかなか手に入らないのだ、と食事の席でウィズダムがこぼしていた。

「君も気になるようなら、この呪文を唱えてみるといい」

と、その場で老人に簡単な呪文を教わっていたのだ。

試してみるか。

智浩は目を閉じ、精神を集中させた。それから、頭の中でイメージを固める。

魔法を思いどおりに使うには、イメージが大事。イメージが明確であればあるほど、呪文を唱えた結果もそのイメージに近づいていく。屋敷へくるまでの道中でミュールに教わった魔術の基礎である。

右手をかざし、言葉を紡ぐ。

「co, di, rest e」

右手の先が一瞬だけあたたかくなるが、その熱はすぐに消え去った。

ゆっくりと目を開くと、智浩の頭よりほんのすこし高い位置にちいさな光の珠が浮かび上がっていた。

ランプを消してみると、明るさは魔法を使う前とさほど変わらない。智浩は満足してうなずいた。ほぼイメージどおりだ。

老人の話では、放っておけば一時間ほどでこの光は消えるのとのことだった。

「しかし、せっかく教わったからと使ってはみたものの、正直もう寝るだけなんだよな……」

ミユールは当然別の部屋だから話し相手はいないし、暇をつぶすようなものもない。

明かりがないと眠れないということもないし、ちよつと余計なことをしたかもしれない。発動した魔法を消す方法というのも教わっておくべきだったかもしれない。

光の珠はふよふよと空中を漂っている。ランプの光とも、見慣れた蛍光灯のそれともどこか違うその光を、智浩はベッドに腰掛けたまま、しばらく眺めていた。

「ふあつ……」

十分か二十分か、そのくらいの時間がたった頃、智浩の口からあくびが漏れた。

今日も半日は馬に乗っていたのだし、昨日は野宿だ。疲れていないはずはなかった。光の珠はまだ消える気配がないが、布団をかぶってしまえば気にならないだろう。

「寝るか」

そう口にしたとき、ドアがちいさく二回ノックされた。

「はい？」

ベッドに腰掛けたまま返事をする。

「あ、あのー、ミユールですけど……」

ドアのむこうから聞こえてくる声は、確かにミユールのものであった。

「なんだ、こんな時間に」

「は、入ってもいい？」

しかしその声は、普段の彼女のものからするとやけに弱々しく、頼りない。

「構わないが」

智浩の返事とほとんど同時に、ドアが薄く開かれ、ミユールが首から上をのぞかせてきた。

「あれ？ 明るい…… あ、魔法を使ったのね」

「ああ、消し方がわからなくてな。なにか相談ごとでもあるのか？」
ミユールは智浩の問いには答えず、いくらか逡巡するような素振りを見せたあと、すべるように室内に入ってきた。

彼女は風呂場で見たときとおなじ、白い無地の浴衣のような服を身につけていた。

もちろん、ずっとその格好をしていたわけではない。すくなくとも食事のときはいつもの格好だった。

となると、あの服は寝間着もかねているのだろうか。

「え、えーと」

「どうした、明かりも持たずに」

すでに外はすっかり日が落ちて暗い。廊下も当然真っ暗だから、ランプも持たずに歩くのはちよつと危ない。

ひよつとして、久しぶりにきたせいで自分の部屋がわからなくなつたのだろうか？と智浩は考えた。

ミユールは下を向いたり横を向いたり、なんだかもじもじしている。胸元の合わせが甘く、身じろぎする度に肌色の部分が見え隠れするのがどうしても気になってしまう。

確か風呂場では、あの下にも何か身につけていたと思つたのだが……。

そう思い至つたとき、ミユールが唐突に声を上げた。

「あの！」

「な、なんだ？」

「よ、夜伽のお相手」夜伽の「と」の部分で、盛大に声が裏がえつた。「に、きました……」そのせいで、せっかく威勢良くはじめたものの、最後は尻すぼみになってしまう。

「……は？」智浩は目が点になった。

夜伽、という言葉は聞こえたし、それ自体やや古めかしい言葉ではあるが、意味が分からないということはない。

要は、男女が夜の床を同じにして寝るということだ。もちろんた

だ寝るだけではなくて、その先の行為も含めての言葉だ。

智浩に理解できなかったのは、どうして目の前のまだ幼い　と、智浩は考えている　少女がそんな言葉を口にしたのか、ということだった。

「なにをいつている、ミュール？」

「だ、だからその……」智浩が思いのほか鋭い目つきをしてそう聞き返したので、ミュールはすこしたじろいだが、それでももう一度口にした。「夜のお相手に、その　」

「言葉の意味が分かっているのか？」智浩の語調が厳しくなった。

「大人をからかっているのか。自分の部屋に帰りなさい」

「う、うつつ　」

ミュールは言葉に詰まってしまった。しかし次の瞬間、驚くべき行動にでる。

突然、身につけている服の帯を解いてしまい、そのまま服を脱ぎ捨ててしまったのだ。

「なっ」

智浩の目が今度はまるくなった。

ミュールは服の下になにも身につけていなかったのだ。

一系まとわぬ裸身が、智浩の創りだした光の珠によって照らしだされる。ちいさな肩も、控えめなふくらみとその先端も、いくらか女らしくくびれた腰も、その下も　すべてがさらされていた。

からかっているにしては行きすぎた行為に、智浩は言葉を失った。ミュールは身体を隠さずに、そのまま智浩へ走って近づいた。ほとんど体当たりに近い形でベッドに押し倒してしまう。

智浩は意表を突かれて抵抗できず、ミュールが自分の身体の上に馬乗りになるのを許してしまった。

「おねがい、トモヒロ　」

光の珠が背後からミュールを照らすため、その表情は影になっ見えぬ。

「なにもいわず、わたしを使って」

裸の女性に馬乗りになれるのは、新婚時代を含めてもほとんど経験がなかった。

「使えだなんて、いうものじゃない」

しかし、どういうわけか智浩は落ち着いていた。あまりにも突拍子もない事態すぎて、理解が追いついていないのかもしれない。風呂場で背中を流してもらったときのほうが、まだしも緊張していた。

「この世界では、女性がこうやって男性に迫るのは一般的なのか？」
ミユールは首を振った。

「君が本気なのだということはわかった。だが本心からではないように見える。なぜこんなことをする？」

今度は答えない。

「君の師匠に、何かいわれたのか？」

智浩がそう考えたことには特に根拠があるわけではなかった。だがミユールは肩をびくりと震わせて、顔を背けた。

「そうなのか」

ミユールは否定しなかった。

智浩は目を閉じ、ひとつ息をついた。それから目を開いていった。
「とりあえず、話をしよう。この体勢はなんとかしてくれ」

ミユールが智浩の上から退くと、智浩はベッドから離れてドアのそばに落ちているミユールの着物を拾い上げた。

「とりあえず、羽織りなさい」

ベッドに腰掛けて捨てられた仔猫のような顔をしていたミユールはそれを受け取る。

「あ、わっわっ」

それからどこも隠していない自分の姿を改めて見て、まるで今気づいたとでもいうかのように顔を真っ赤にして、身体を隠した。

その仕草を見ているうちに智浩もなんだか気恥ずかしくなってしまう。すこし迷ってから、ミユールの隣に腰掛けた。ふたり分の体重を受けたベッドが、きしんだ音をたてる。

「落ち着いてきたか？」

正面のドアをしばらく無言でながめたあと、そう問いかける。

ちらりと見たが、ミユールの横顔にはまだ思いつめた様子が見て取れた。

「あの、……ごめんなさい」

「あやまる必要はないが……なぜ、こんなことを？」

智浩が問うと、ミユールは師匠にいわれた内容をゆっくりと語った。

聞けば聞くほど、智浩は自分の顔が徐々にこわばっていくのがわかった。ウィズダム老の、気さくで話しやすい老人というイメージが音をたてて崩れていく。

「ひどい話だ。セクハラなんてもんじゃない」

ミユールがひととおり話を終えた。智浩は強い口調で憤慨したが、ミユールはまるで自分が怒られているかのように肩を縮めている。

「君もなぜ従うんだ？ 逆らうとなにかおしおきでもされるのか？」

「おしおきはされないけど……破門されてしまうわ。実際、むかし

いた弟子たちの中でも、ちょっとしたことで破門されてしまったひとは結構いたのよ」

「だからといって」

「ここを出されてしまったら、もう召喚術を学べるところはないの。魔法を学べるところならあるけれど、貴族の紹介や高い授業料が必要になるし、それでも召喚術は学べないの」

「なにも魔法使いにならなくても、生きていく方法はいくらでもあるだろう」

智浩から諭すようにいわれても、ミュールはかたくなに首を振った。

「一人前の召喚術士になって、お父さんの研究を引き継ぐの。そう、約束したの」

「お父さんの研究？」

智浩の言葉に、ミュールはぱつと顔を上げた。

「お父さんは、召喚術をもつと身近なものにするための研究をしていたの。いまの召喚術はねらったものを喚ぶことはほとんどできないし、面倒な手順も必要だけど、そういった不都合をなくしていけば、とっても便利で、国の発展に役立つような」

「わ、わかった。それはいい」

智浩は勢いこんで話したミュールを制止した。

「だが、だからといって自分の身体まで差し出すなんて、やりすぎだろう？ 君のお父さんだって、そんなことを望みはしないはずだ」

もし自分がミュールの父親だったら 望みはしないどころか、相手の男と指示をしたウィズダムに殴りこみをかけてもおかしくない。

「でも、いつかは経験することだもの」ミュールは下を向いたが、口にしたのは智浩の予想外の言葉だった。「それに、トモヒロならやさしくしてくれそうだし」

智浩は内心ドキリとしたが、今は聞き流すことにした。

「と、とにかく余計な心配はいらない。私は責任をもって君と契約

して、魔女を退治する。浩一の不始末もちゃんと片づける。それでいいだろう?」

「もちろん、わたしはいいけど」

「君の師匠と会つのは、どうせ明日限りだろう。なんとしてもごまかせるさ。まさか、身体検査をするとまではいわないだろう」

「うーん……」ミュールが考える素振りを見せたので、智浩はぎょつとした。しかねないともいうのだろうか。それではゲイロンの心配のとおりではないか。

「もしそんなことをいいだしたら、私が全力で阻止する。君には指一本ふれさせないから、安心なさい!」

智浩が力強くそういい、胸をたたいてみせると、ミュールはようやく笑顔になった。

「うん、トモヒロ」

どうやら一件落着か、と智浩はほつとした。彼女の笑顔の奥で、先刻出した光の珠がその光をすこしずつ弱めていることに気がついた。どうやら、そろそろ魔法の切れる頃合いらしい。

「さあ、もういい時間だ。自分の部屋に戻りなさい」

「あつ!」突然、ミュールが声を上げた。「わたし、部屋がないの」「どういうことだ」

「お師匠さまがヤノさんに指示をして、わたしの部屋は用意させなかったの。だから、その」

「なるほど、周到なことだ」智浩はあきれた。ウィズダム老ははじめから、こうしむけるつもりだったらしい。

「それなら、この部屋で寝なさい。君がベッドを使えばいい。私は床で寝るから」

「えっ! だめだよ、そんなの」

「なに、昨日は野宿だったんだ。それに比べればまだましというものだ」

さいわい布団はたっぷりあるから、一、二枚借りれば問題はないだろう。

「だめだめ、ここは夜、ほんとに冷えるんだから。風邪引いちゃうよ」

「そんなことは」

ベッドから腰を上げた智浩だったが、ためしに床に手をおいたとたん、二の句をつけなくなった。

板張りの床はいつの間にか氷のようにひんやりと冷えきっていたのだ。おまけにドアのすきまから風が入ってくるのか、冷たい空気が流れるのを絶えず感じる。

すきま風だけでもなんとかしなければ、本当に風邪を引いてしまいそうだ。

「ほら、ひどいでしょ」

ミユールがおかしそうにそういった。それから、先ほどまで智浩が腰掛けていたあたりをぽんぽんとたたいた。

「だから、こつちで一緒に寝ましよう。大丈夫、もうヘンなことはいわないから」

ベッドはダブルベッドほど広くはないが、そこそこの横幅があるので身体を密着させなくともふたり横になることは可能だった。

智浩が壁際へ入り、ミユールが落ちないように精一杯身体を壁にくつつける。しかし、床ほどではないが壁も冷たい。

「そんなにそっちにいかなくても、大丈夫だよ」

ミユールの苦笑混じりの声が聞こえてきたが、智浩は壁から身体をはなさなかった。

すこしはやまつたような気がする。

一緒に寝ようといったミユールの表情に、この部屋へ入ってきたときのような思いつめたものがまつたく感じられなかったので、つい承諾してしまったのだが。

事情があるとはいっても、赤の他人の女性と同じ布団で一夜をとむにするというのは、好ましくない状況のように思えた。

それに、こうして背中をむけていても、女性特有の甘さを含んだ

香りがほのかに立ち上ってくるのを感じるのだ。

しかし、すこしでもそんなことを意識していると悟られるわけにはいかない。

すまん、直子……。

頭のなかで化粧つけのない妻の顔を思い浮かべながら、ぎゅっと目を閉じ、眠りがおとずれるのを待つ。

ミユールはその姿を、不思議な面もちでながめていた。

ついさっき裸でせまったときはちっともあわてたように見えなかったのに、いまはなんだか必死でこっちを見ないように、身体をふれないようにしているようだ。

年上らしい落ち着きを感じるときもあれば、まるで同年代の男の子のように戸惑ったり、調子の外れたことをいったりもする。

お父さんのように叱ってくれるけれど、お父さんのように抱きしめてはくれない存在。

確かなのは、こうして近くにいることがちっともイヤではない、ということ。

彼の息子に対して抱いたものと、似ているようですこし違う感覚だ。

（へんなの）

その感情の正体を無理に突きとめようとはせず、目を閉じる。ふたりで眠る布団は、とても暖かだった。

(9) (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

年内にこの章は終わらせるつもりだったんですが、今月ちょっとスランプでした。家の中だと寒いし、図書館だと暖房効き過ぎて暑いし……。

そういえば、智浩の奥さんの名前を出そうかどうか迷ったのですが、さりと出ておきました。本編にはほとんど絡む予定がないので、名無しでいこうと思っていた時期もあったのですが、智浩が思いのほか奥さんのことを思い出すみたいなので。

ご意見、ご感想などありましたら、ぜひお聞かせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7088x/>

オーバーエイジ・ブレイブヒーロー

2011年12月28日19時58分発行